

女一宮懐胎。彈正宮の
見舞。仲忠の痛心。兼雅、
仲忠を招きて立太子に關
する后宮の密旨を告ぐ。
仲忠、忠こそを招きて女
一宮を加持せしむ。帶を
忠こそに示す。

(語釋)
(一) 仲忠妻

(二) 正賴

(三) 賢忠

(四) 誤あるべし

畫詞 ことは畫なり。

かくて一宮五月より孕み給ひぬ。此度はいたく惱み給へど、大將の君には、さも
知らせ給はず。たゞ御心地なやみ給ふ様にてあれば、思ほし騒ぎて、祭、祓せさ
せ、所々にも御修法おこなはせ給ひて、ありきし給はず。女御の君もおはしまさ
ねば、夜晝、醫師、陰陽師、驗者など召しつとおはしますに、彈正宮と御物語し
給ふ。女二藤壺の里にもし給ふ時に、まうでて物申さむと思へど、この月頃は
殿など物し給ふめれば。はじめまうでたりしに、物騒がしくて、物も申さでまう
で來にき。人の志は、いとよく見知り給へるにこそあめれ。新中納言出だし給ふ
を見れば、忠康、まろが志を知り給はぬにやあらむ」女二「とこそ語り給ひしか。
大宮さる事ありと宣ひけれ」と聞え給へば弟宮、忠康「かひなの事や。あまり侮ら
れて、過せられ給はむに、誰もく何わざかし給はむ。幼かりければこそ、然り
ぬべき折有りけれど、人々の心をつとみつよ。今ならましかば、かく妬き心地せ

(語釋)
(一) 誤あるべし

(二) 我を高官に任じ給ふ
とも我にあて宮がつれな
かりし報は必ずすべしの
意歟

(四) 女一宮

(考異)
(三) などにやーなどや

ましや」女宮、女二「あなむくつけ。如何は宣ふ。人をば徒らになさむと思すか。
いとど、この見ゆる物さぞあらむといふものを、戯にてもあなゆよしや」と宣へ
ば、忠康「よく宣ふなめり。心ある人の、思ふことをぞ知るかし。たゞ今かく有る
ほどなめれば、まめやかには然も思はず。世中定まりなむ時、大臣たかき位に物
し給ふとも、憎くもてなし給ふらむ本意とけむとす」と宣へば、いみじく怖ぢ給
ふ。
かよる程に大將入り給ひて、仲忠「今の程は、醫師どもに問ひ侍れば、熱などにや
おはすらむとなむ。物問ふには、靈氣とぞ。されば、眞言院の律師のもとに、消
息言ひ遣はしつ。参り來ば、護身せさせ奉らむ。三條より、「言ふべき事あり」と
度々侍るを、たゞ今の間にかかりて、いと疾くまうで來なむ」とて参りぬ。
仲忠「召侍りけるを、即ち候はむとせしかど、彼處に侍る人の、日頃いたく惱み給
へば、女御など物し給はぬ程なれば、見譲る人なくて、えさふらはす侍りつる」北

- (一) 懐胎
- (二) 兼雅の同胞也
- (三) 立太子の事をいへる也
- (四) 梨壺が歸ちぬとて催促せらるれば
- (五) 梨壺を
- (六) 謀なるべし
- (七) 謀なるべし
- (八) 謀なるべし、鎌倉時代の諺に「鶴のなき間の紹ほこり」といへると同義なるべし
- (九) 正和方より
- (一〇) 仲忠は「は」ナシ

の方、俊隆女「え更に承らざりけり。如何様にか。などか、斯くなど宣はざりし。参りて見奉らましものを」大將、仲忠「知らず。靈氣などいひて物まるらずなむ有りつるを、昨日今日は重くなりてなむ」おとど、兼雅「いとほしきかな。参るべうこそあめれ。もし前にありし筋にやあらむ」と聞え給へば、仲忠「さも見え侍らず。然りし時も、かくは物し給はざりき。さても、程なくは如何」と聞え給ふ。おとど、兼雅「消息申したりしは、後の宮より宣ふ事なむ有りし。如何なる事にか、思ふ時には、然もありぬべき事なれど、世の亂となり、騒がしかりぬべき中に、天下にまさる心ありと、誰々も思ほえし」となむ。如何なる事ぞ、と申さむとてなり。宮もかしこ参らずと宣ふめるに、今宵なむ参らせむと思ふ。藤壺参り給ひなば、しやうぞくの薫物のやうなるべし。鶴のなき間の鼠としも仕うまつれとてなむ」と宣へば、仲忠「如何なるべき事にか侍らむ。仲忠は、いかでかとり申さむ。殿の御爲にやごとなき事なり。それによりて、侍らむ所に思ひ疎まれむも苦しう

- (一) 語釋
- (二) 脱文あるべし
- (三) 「あ」と「な」なるべし
- (四) 梨壺の御供にも行か

なむ。たゞ後の宮の宣はむ、奉り給へ。非常と見る事も侍らば、いとよき事なり」と聞え給へば、いとど、兼雅「身の爲には、いとよかるべき事なれど、大方騒がしかるべければ、こゝにも然ぞ思ふや。さらば早物せられよ。つとめて此處にもまうでむ」と宣へば、大將かへり給ひぬ。梨壺、御車二十ばかりして、御前いと多くて参り給ひぬ。うまれ給へる宮は、母宮のもとにおはす。

畫詞 こゝは三條殿。
かくて大將歸り給ひて、宮に、仲忠「今の間はいかど。言ふべき事有り」と侍りしかば、まかりたりつるに、やんごとなき事ども申されつれど、僻答をなむしてまうで來ぬる。さるは、梨壺、今宵ぞ参られける。されど、其方にもまからずなりぬ。里人も今参らむ」と聞え給ふほどに、「律師参り給へり」と申せば、仲忠「なほ此方に」とて、簀子に御座敷かせて請じ入れ給ふ。仲忠「これは恥かしき人ぞや」とて直衣装束にて出で給ふ。律師は、綾の装いと清らにて参り給へり。姿、顔頭つき、

〔語釋〕
 (四)「させむ」は「作善歟」として頼みたる也
 (五)忠こそは生佛なればとて頼みたる也

〔考異〕
 (一)大將―もとと

(二)大將―もとと

〔語釋〕
 (三)給ひつるをなむ―給へるをなむかしこう思ひ給へるさて

いとめでたう、御供の者ども、装束清らに、容貌よき、十人ばかり、若法師十人、大童子三十人ばかり、擯榔毛の車の新しきに乗りに参り給へり。中門より、大童子はとどめて、侍、法師、童して入り給ひて居給へり。大將、仲忠、宮の中などにては、對面賜はれど、その事となくては、え取り申さぬ事をなむ。さるは、昔より志、侍れど、自然に怠り侍りてなむ」律師、忠こそ「山伏も、いかでかと志し侍れど、殿の仰せごと賜はらぬを嘆き侍るに、たましく仰せ給へれば」と申し給ふ。大將、仲忠、いと嬉しくて、こよにも、數に思さねばや、訪はせ給はざらむ、と思ひ給へるに。内裏の召などにも参り給はぬ時おほきを、如何ならむと思ひ給へるに、かくものし給ひつるをなむ。消息聞えたりつるは、此處に、立ちぬる月の晦より悩み給へるを、日頃重くなりまさりてなむ。これかれに物問はせ侍れば、邪氣など申す。させむなど行なはせ侍れど、なほ心もとなきを、たゞ今は現れたる薬師佛にこそはとてなむ。一夜二夜ばかりものせさせ給へ」と聞え給ふ。忠こそ「心

〔語釋〕
 (二)后宮より召されて、行かずに此方へ来られしを疎末にしては勿體なし
 (三)女一方へ
 (四)懐胎を仲忠に知らせぬをいふ

(七)御懐胎の事を仲忠に申上げむ

〔考異〕
 (一)侍りつれど―侍れ

(五)もとと―大將

(六)心して―志ありて

(八)もとと―大將

には、久しくさふらひ候ひなむを、佛と宣はするなむいと恐ろしくて、まかり逃げぬべく。此の頃は、所々に斯くなむ。后宮の姫宮も、かくなむ惱ませ給ひて仰侍りつれど、まづ殿にをとてなむ」など聞え給ふ。大將、仲忠「おほやけの御許よりだに然りけむ御心を、恐ろしや。奥の方におはしませむ」としてしつらはせて入れ奉らせ給ひつ。かくて「まうのほり給へ」とあり。南の廂に、よき御屏風立てたり。例の空薫物などして参り給ふ。かくて宮に、内侍のすけの申し給ふ。すけ「いと腹きたなくおはします。これは何の罪にてある御心地にもあらず。知らせ奉り給はねば、おとどはさわぎ給ふ。それはとまれかうまれ、生きてはたらき給ふ佛と言はれ給ふ、加持参り給へば、ともかうもこそあれ、かゝる人は、さる心してこそ加持まるれ。いと恐ろし。おとどに聞えむ」と申せば宮、女「何心地とも知らず、いと苦しきは、死ぬべきにこそあんめれ」と宣へば、すけ「あなさがなや」などむつかり給

〔語釋〕
 (五) 山より
 (七) 故なく聞くわけにも
 ゆかぬを

〔考異〕
 (一) 見給へつるを―給へ
 るを―つるを
 (二) おはしけり―おはし
 ます

(三) 佛神―神佛

(四) 多うは―おのれは

(六) 思ひ―思う

(八) 思ひ―思う

(九) 仕うまつるまじかな
 る―仕うまつり合すまじ
 かなる

へり。律師は加持參り給ふ。さらに、はやき陀羅尼讀ます。童より、聲かぎりな
 く有りし人なれば、まいていと尊し。
 曉 になりて、大將殿、仲忠世の中のこと、とざまかうざまに、皆承り見給へ
 つるを、この御陀羅尼をのみなむ、音に承れど、まだ承らざりつる。けにいと
 尊くおはしけり。いかで秋深からむ程に、木葉の降り落ち、風の聲心細からむ時、
 人の聞かざらむ山里にて琴に合せて承りにしがな」律師、忠こそ「いと尊き仰せご
 とにも侍るかな。たゞこれをのみなむ、夜晝佛神にも申し侍る。御琴なむ、昔ほ
 のかに承りて、多うはこれによりてまかり出でしなり。されど、仰せごをだ
 にえ承らざりつれば、思ひ給へ嘆きつるを、かく仰せらるれば、思ひの叶ひ侍
 るなりとなむ。わいても、御琴の音は、いと承らまほしく、たゞにもえ仕うま
 つるまじきにぞ思ひ給へわびぬる」仲忠「琴ぞ、え仕うまつるまじかなる。そもく
 いと怪しくて、御行につき給ひけるは、などてにて侍りけむ。春日にて見奉

〔語釋〕
 (二) 此間脱文あるべし
 (四) 繼母の乞食になりた
 るにあひて

(五) 侍りし―歎

(六) 我身の事と

(七) 脱文あるべし

(一〇) 正頼

(六) 侍る―なるべし

〔考異〕

(一) 言ふこと―いひかく
 ること―いぶかしきこと

(三) え知らず思ひ給へ―
 え知らず思ふ給へ

(八) 責め―せめて

(九) 給へば―給ふ

り侍りしは、いとこそ悲しう侍りしか」忠こそ「山にまかり籠りし故は、いとみじき
 事の侍りけるを、更に知り給へざりき。たゞ漫に物悲しく、世には侍るまじき心地
 のせしかば、親をも見捨ててまかり出でにし。その人、繼母に侍りし人なり。宮
 仕し侍りし程に、言ふことの有りしを、その事便なかりしかば、聞かぬやうにて
 侍りしに、怨じたるにや有りけむ、親に、怪しき事を申しけるを、え知らず、思
 ひ給へ嘆きしを、不意に異様に逢ひて侍りしに、「など斯くはなりにたるぞ」と
 問ひ侍りしかば、繼子なりし人の爲に、親の寶とする帯を取り匿して、これを賣
 らすと言ひ、帝かたづけ奉らむとすと奏しけり、となむ聞かせ侍る」と申しよ
 を、山伏の上に聞きなし侍りて、その日つひに後の事まで、先つ頃知り侍りにき。
 此事を聞き侍りしかば、いとよう逃げてけりとなむ。然ることを聞き給ひて、責め
 宣せざりける親の御心なむ、いとかなしき」と申し給へば大將、仲忠「恐ろしかり
 ける人の心にこそは。その事は、左のおとどぞ宣ひしや。然る事ありける帯は、

(語釋)

(一) 千蔭、忠こそその父

(二) 忠こそが居合せたらば與へんと思ひしに

(考異)

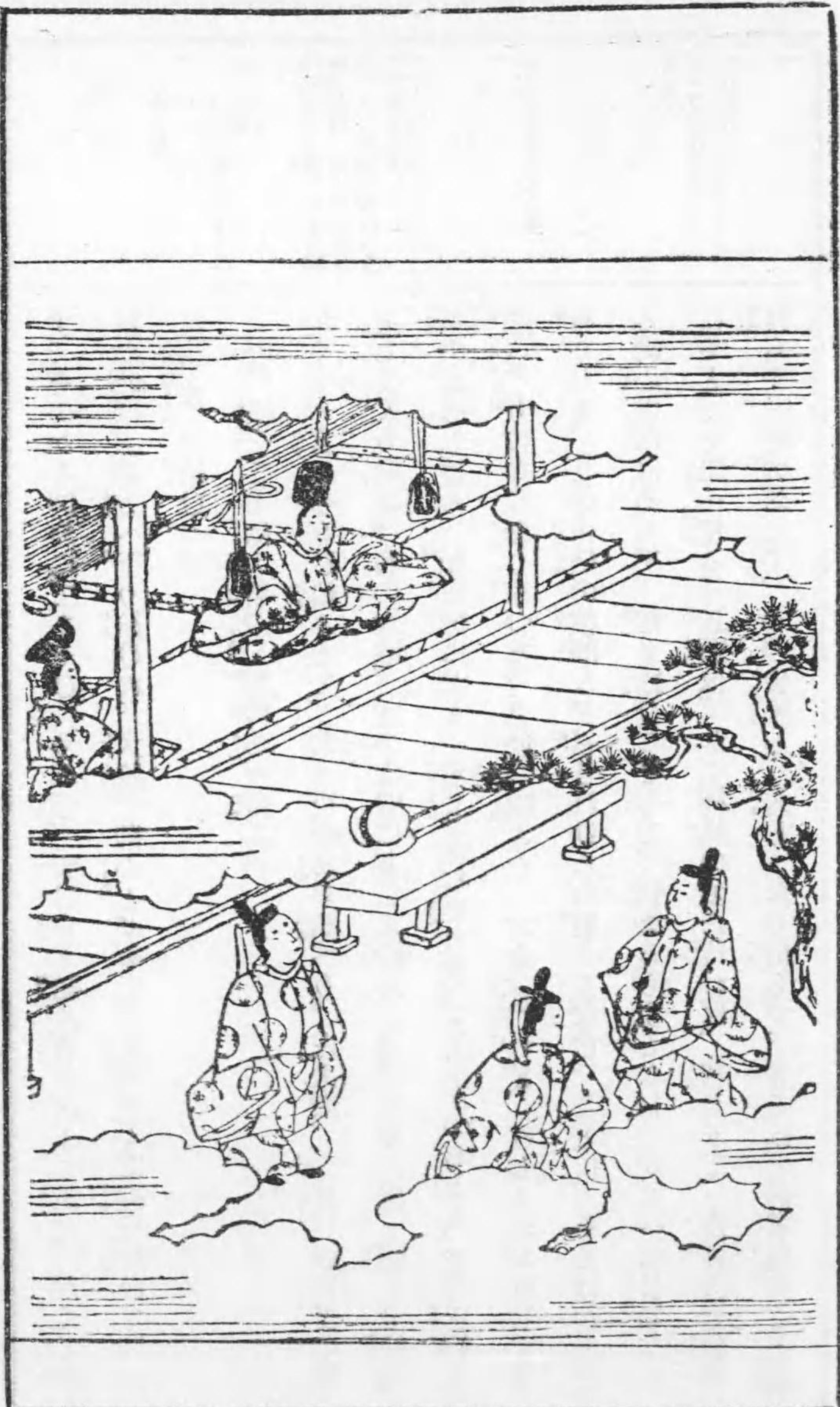
(一) 仲忠の―仲忠が

(四) 侍り―ナシ

(五) 仕うまつりし―つかまつりしに

(六) 侍る今暇に―侍りける今―侍るを今しも

仲忠のもとに侍り。このおとど、亡せ給はむとて、「そこに物し給はどと思ひしを、今は誰にかは」とて、院になむ奉られたりけるを、内裏になむわたりて侍りけるを、去年の十二月に御書仕うまつりし縁になむ賜はりて侍り。けに世になきいみじき寶にこそは。かよる物を、然間えなしけむが恐ろしき」律師、忠こそ「さる禍になむあたりて侍りし」大將、仲忠「この帯は、物し給はましかば、御物とぞならましか。奉りてむとなむ思ひ給ふる」律師、忠こそ「山伏は何の料にかし侍らむ。僧の具に玉の帶さし侍らばこそあらめ。もて侍らましかば、とかくの事、殿ばらにこそ奉らましか」大將、仲忠「たどそれかと見給へ」とて見せ奉り給へば、律師見給ひて、いみじく泣き給ふ。忠こそ「この帯は、故千蔭の内宴にまかり出で給ふとて、装束し給ひしになむ、見給へし」と聞ゆ。大將、仲忠「この春日に侍りし少將仲頼の、入道して侍るとぶらひに、その時の同じ人々などこれかれ、今は仲忠もかく上達部にて侍り、あるは頭などにても侍る、今暇に訪らひにまからむと



(一)女一宮

(二)兼雅

兼雅女一宮の病を見舞ふ。蹴鞠。仲忠女二宮を隙見す。兼雅正頼に小倉の遊覧を約す。

(三)承りになむ」歎

(考異)
(四)など一ナレ

す。そのかみ御前にてあそび侍りし頃、戀ひ申し給ふ事はまり無し」かくて明けぬれば、御方へ下り給ひぬ。大將、御心とどめて、家司どもに仰せ給ひて御前に物奉れ給ひつ。

畫詞

こよは大將殿、加持参り給ふ。

かくて、宮わづらひ給ふとて、右大臣殿参り給へり。左大殿、大將、いそぎて御迎して入り給ふ。右の大殿、左の大殿にきこえ給ふ、兼雅「こよには、惱ませ給ふ事のおはしける。如何様にかと、承りなむ参りきつる」左のおとど、雅頼「正頼も然承りになむ参り來つる。さいつ頃より、かく承れど、けしうはおはせずと有りしを、この山籠の律師など召されけるに驚きてなむ。ことに、そこはかとおる御心地にはあらで、起り給ひなどして、物まるらずとなむ。かたへは暑氣などにやとて見給へ侍る。日頃は、かく極熱の頃に侍れば、苦しうて、内裏にも参り侍らず」右のおとど、兼雅「兼雅も、久しう参り侍らず。さるは、御國讓のこと近

(語釋)

(一)梨盃

(二)忠澄

(三)近澄

(四)仲忠

(七)誤脱あるべし

(八)何も召しあからず

(考異)
(五)大將殿—大將のもと

(六)大將殿宮に—大將宮に宣ふ

(九)かしこ—もそろしや

くなり侍るを、宮へも参るものの侍るをいとあつく侍りて、片時見給へ棄てがたう、引き入れておき侍りしを、辛うじて出だし立て侍りし。この惱ませ給ふと承り驚きてなむ」かくて御菓物参り御物語し給ふ。

かくて右のおとど参り給ひぬとて左衛門督の君、藏人の少將、宮あこの侍従など参り給へり。宮たち、おとどたち、「いざ、かよる所にて脚病勞らむ」と宣ひて、

楓の青やかに茂りたるもとに立ち出で給ひ「をかしき鞠のかよりかな」と興じ給ひて御鞠あそばす。皆上手なり。人々装束し給へり。宮たち、おとどたちは直衣

奉り。大將殿、藏人の少將、鞠も上手、様もよく見ゆ。宮たち、「怪しのわざや」とて御覽す。暮れぬればみな入り給ひぬ。宮たちは、二の宮の御方に入り給ひぬ。

ひぬ。

大將殿、宮に、仲忠「今日は、例の風のいもるに」御前なる人々、「まして今日はいと物清くてくらすせ給ひぬ」ときこゆれば、仲忠「あなかしこ」とて水飯してまる

- (一) 語釋
- (二) 水飯を食はせて
- (四) 女二宮の方を警戒せよと注意する也
- (六) 此處誤脱あるべし
- (九) 女二宮姫宮

- (考異)
- (一) 見給はねば一入れ給はねば
- (三) を一ナン
- (五) いかで聞き給へらむ一いかでかき給ふらむ
- (七) 給ひつれば一給へるは一見え給ひつるは
- (八) いと一ナン
- (一〇) たれば一たるに

り給へど、御目ふたぎて見にだに見給はねば、犬宮膝にすゑて、さしくとめて参りて、仲忠「御徳をも見給ふるかな」と宣へば宮、女「あつし。簀子にを」と宣へば、仲忠「昨夜をだに思ふ所に、今宵居眠ぞ用なきや」と宣ひて臥し給ひて、仲忠「かの御方に、いざとく人候へ。聞く様有り」と宣へば乳母胸潰れて、いかで聞き給へらむと。藏人の少將も、簀子に居給ひて、かの人見え給ひつれば、右大將殿とほくてさし出で給ひ、仲忠「あなかしこや。人去ぬれど、いと恐ろしき兵ありくなり。外にては知らず、此處にてはいとさがなからむ」と宣へば、宮たち御目もさめて起き居給ひぬ。乳母は、身も冷えはてて、我にもあらで居たり。かくて曉になり、御格子もおろさず。二の宮の御方と此方とは、高き御屏風立てたり。おはする所近ければ御屏風にて隔てたるなりけり。大將この折宮たち見奉らではいかでかと思ひて、一の宮いとよく御殿籠りたれば、脇息を踏みたてて、御屏風の上よりのぞけば、明けぬとおほえて、男宮たちは皆御殿籠りたり。二の

- (語釋)
- (二) 小用を足さんとして
- (四) 「ゆふらう」は「遊覧」歟、又は「納涼」の誤歟、一本「いふらう」
- (七) 御護位の事
- (一〇) 正頼の心を探る爲に

- (考異)
- (一) かたびらは一かたびらは御たち
- (三) 給へる一給ひつる
- (五) さて一まで
- (六) さても一も一ナン
- (八) なれど一なれば
- (九) をもの一ナン

宮は、御几帳のかたびらは、うち懸けてまだおろさず、起き給ひて、いさよかなる事せむとおほして入り給へるを、いとよく見奉り給ふ。白き綾一かさね奉りて、御髪なども、御殿籠りふくだめたれど、いと氣近くうつくしけなりと見る。姫宮も、起きあがり給へるを、これはまだ小くかたなりにて、あてなり。よくも生みあつめ給へる御子たちかなと見て居給ひぬ。ほのくくとをかしき朝ほらけなれば、おとどたち勾欄におしかよりて居給ひつよ、右のおとど、實正「昔斯かりし極熱に、この釣殿へこそは度々ゆふらうしに参りしか。今日さて侍る人をや」左のおとど、正頼「今日も、昔のやうにせむかし。別いでも、朝涼にこそは。さても公の御いそぎは、眞實に、月や定まりて侍らむ」右のおとど、兼雅「この八月ばかりには承れど、確にはまだ承らず。朱雀院みな造り果てたんなれど、なほ疾く急ぎて、あるべからむ事をものせよ」と仰せらるれば、さらば思し惱むことも侍らむかし。言はせしめ給へや」左のおとど、氣色

(語釋)
 (一) たりぬるを「歎」
 (二) 兼雅の桂の別荘近ければ也

(考異)
 (一) 月も一月の

(四) すきみなども「すみなし」

(五) 承はりて「承はりぬ」

(六) 如何「入りて侍る」ナシ

近澄等の女二宮に對する熱心。

(七) 女二宮

(八) 聞えもき給へれば「聞え給ひつれば」

見むとて宣ふにやあらむ、と心づかひし給へど、誰もく、何心なくうち語らひ給ふ。大將殿は、御酒など參らせ給ふ。右のおとど、兼雅「かく惱ませ給はずば、月も残、少くなりぬる、小倉の方へ御前たまはらむと思ふ給へるを」と聞え給へば左のおとど、正頼「何か、さやうにすきみなどし給はど、怪しうはあらじ」と聞え給ふ。兼雅「さらば、承はりて、晦がたにおはしませむ。昔御覽せしよりは水なども深くなり、魚もいと多く棲み侍り。如何なるにかあらむ、山の前より川なむ入りて侍る。賣り買ふものどもは、家の中よりなむ往き返り侍る、御覽せさせばや。春秋は、昔よりも木の數もあまたになりて、いとをかく侍り」など聞え給ひて、みな還り給ひぬ。

かくて二の宮、姫宮は、このおとどの西の方におはします。彈正の宮は、二の宮の御乳母など具しておはしませど、女御の君の聞えおき給へれば、二の宮の御許に、夜も晝もおはします。藏人の少將、いかでなどは思せどおとど宮おはしまい

(語釋)
 (一) 様子ありげに女二宮に物申上ぐる女中あるときは

(二) 女二宮の

(四) 宮より「はかく」の誤歎

(五) 懐胎

(七) 國母

仲忠、女二宮の懐胎を悟る。

(考異)
 (二) けりーナン

(六) こそーとぞ

て、いさよか氣色ありて物聞ゆる御たちもあれば、氣色あしく宣へば、物聞ゆる人もなし。この二の宮に思ひ困じたる君たちは、皆御たちにつきて、物取らせつ、「盗ませ奉れ」と宣ふも有りけり。藏人の少將は、中納言の君とて、御身につき仕うまつる人に、萬の財物を取らせ給ひつよ、「盗人に入れよ」と宣へど、さるべき折もなし。如何ならむ隙に入らむと、うかどひ給ふ人々あまた聞ゆる中に、五の宮より切に聞え給ふ。

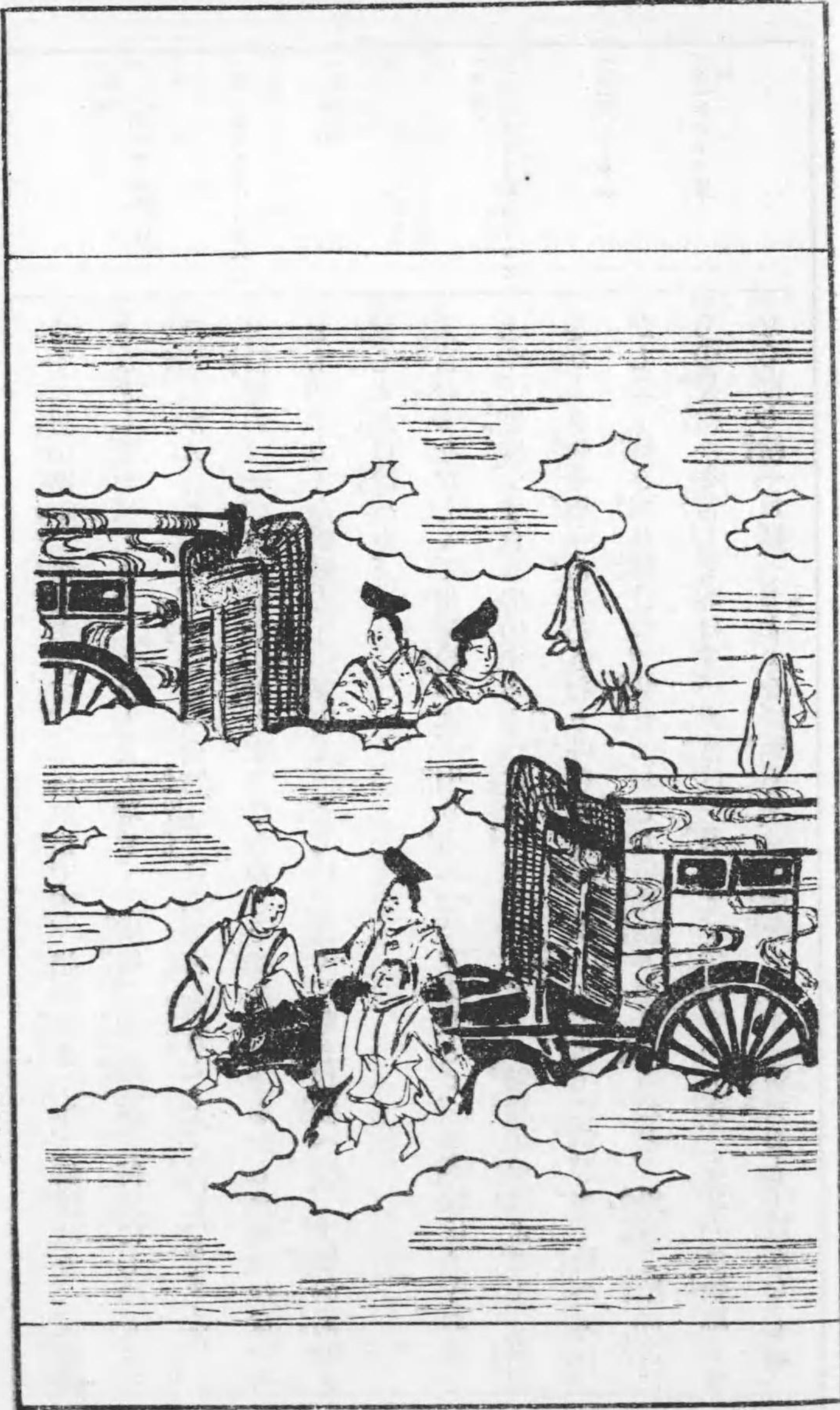
宮より聞ゆる程に一の宮の御心地を、かよる筋に大將見なし給ひて、仲忠「さりとも著く思さるらむものを、宣はせて、心魂を惑はかせ給ふものかな。なほく斯くことぐしき御心こそ。世中に佗しかりしは、内裏にさふらひ困じて、南の宮に、御迎にとて参りて侍りしかど、はしたなく宣ひしに、えまからざりしに、藤壺の、國の親となり給ふべき御心なればにやあらむ、局などして賜ひしに、出で給はでやはらせ給ひしこそ、忘れがたく。相思さぬ折おほくなむ。さては御遊し

- (一)「など」としてなるべし
- (二)兼雅が桂の別荘へ御招待申す由なり
- (三)忠こそ
- (四)仲頼を尋ねに同行すべき事
- (五)君よりも音信し給へ
- (六)「たひ」は袈裟

♀女一宮女二宮女四宮兼雅俊陰女仲忠等桂の別荘にゆく。兼雅、犬宮を愛す。鮎を捕りて所々に贈る。詠歌管絃。

- (一)「たひ」は袈裟
- (二)「たひ」は袈裟
- (三)と開ゆるとき
- (四)大將一もとよ
- (五)思したれ一思し立て
- (六)給へり一給ふ

給ひし夜一夜外に立ちて侍りしこそ。かの君の御聲のほど近う聞えしかど、この常に聞ゆる事をも然も」などて、仲忠「三條に、桂におはしまさせむと聞ゆ。一日二日涼み給へ。宮たちなどして出で給へ」と宣へば宮、女「苦しきに何方か」と宣ふ。仲忠「何か、なほ」とて、十九日ばかりにと思はず。律師も十日ばかり有りてまかで給へば大將、仲忠「さらば、かの聞えし水尾へは、必ず然思したれ。今よりはそれよりも宣へ。これよりも聞えむ」とて御弟子の中にきぬ、物につよみて出ださせ給へり。律師には、菩提樹の數珠具したるたひなど一くだり奉り給ひぬ。かくて十九日になりて、御車十二、絲毛には宮たち、孫王の君、犬宮いだき奉りて太輔の乳母。つぎくに大人、うなる、下仕、男宮たち、右のおとど、右大將、一つに、かんのおとど、御車六して、出で立ち給ふ。左のおとども引き續きてまうで給へれば、これかれ出で給ふ。宮の御車一に立てて、かんのとの二にて、おし合せて二十ばかりなり。御前は、宮ばら、殿ばら、二かたにおし合せて、數知



〔語釋〕
(一)物かなとてし歎

(四)などとてしなるべし

(六)兼雅

らず。男の御車、御簾あけて、こほれ出でて、道の程遠くて、御笛吹き、琵琶弾きなどしておはします。おはしまし著きて、寢殿の南面を、御方にしつらひ、西面にかんのおとど、中には一の宮東に二の宮、姫宮としつらひたるまよに、下り給ひぬ。一の宮、「女御の君を奉て奉らぬこそ効なけれ。をかしきものかな」舟どものありくを御覽じて、興じて、苦しけになくて起き居給へば、大將の君いと嬉しと思ひ給へり。

〔考異〕

(一)ありくーのりありく

(三)そへーナレ

(五)ちとどー男

犬宮いとをかしくて出で給へば、引き入れつ。左のおとど、正鰯なほくおはせよや。彼は、すきものするそへ言を申すぞ」などて、御簾の前によりて、萬のをかしき物を取う出であざむき呼び出で給へば、たど出でに這ひ出で給へるに、かしこう抱き取り給ひつ。父君、おとどの見給ふをば思さねど、外住し給ふ宮たちの見給ふを苦しとおほす。犬宮は、父おとどの抱きありき、をかしき物取らせならはし給へれば、おとどをば怖ぢず、面嫌をもせず。祖父おとどはかなしや、

〔語釋〕
(一)誤あらんか

(二)梨壺

(三)生れおちから

(五)「いぬ宮」は「いま宮」の誤なるべし、今宮は梨壺腹の皇子

(六)兼雅自身をいふ

〔考異〕
(四)居給へりいぬ宮も一居給へりおとどはかしこに物し給ふ犬宮も

呼び出でて見むと思して萬のをかしけなる物、宮、内侍のかみの御髪の箱なるを探し取りて、懐に入れて持給へりけるを、取らせ給へれば、悦びて抱かれ給へり。おとど宣ふやう、兼雅「人の子は、天下にいへども、女は睦ましく、男は疎くなむ有りける。この朝臣をば、親君のとかなむ思ひつる。かよれど、この犬を今まで見奉らざりつる、かよりけるものを。この宮にさふらふものは、年頃疎く、をさく見語らはず侍りしかど、彼處に物せらるゝ兒をば、すなはちよりの見侍る。今日もこの犬をば見せじとこそは思ひためれど、故あれば、吾が君こそ這ひおはしたれ」とて懐に入れて、奥に向きて居給へれば、人はえ見ず。おとど斯く宣ふを、大將いとほしと思して、まめだちて居給へり。兼雅「いぬ宮もいとをかしくなり給へり。起きかへりつよ、人見ては笑はせ給ふ。これを常に見まほしけれと、兒の里へまかれば、翁をもゆるさず。心にまかせても見侍らずや」宣へば、母宮たちわらひ給ふ。内侍のかみ、俊隆女「あな聞きにくや。翁をば、誰かゆるさぬ。

〔語釋〕
(一)犬宮が

(六)「さか木」は「その木」なるべし

(七)衛府の少將などなるべし

(八)兼雅

(一)二人共に兼雅の妾
(二)梨壺の許へ

〔考異〕

(一)「手さくぎて」て「ナシ」

(三)「さして」見て

(四)「しばし」しばしは

(五)「給へる」給ひつる

(九)「それを」を「ナシ

(一〇)「そへて」そへつる

心ときめきなりきや」と宣ふ程に、父おとどを見つけて、手さよけて這ひ出づれば、兼雅「あれはあらぬ人ぞよ。いと恐ろしく憎き人ぞ」と居隠し給へど、泣きて這ひ下りて這ひ往けば、父君かき抱きて、御簾の内に入れ給ひ、仲思「此處にか」とてさし入れ給へば、更に下り給はず泣けば、御簾と御几帳との中に入れて、こしらふれど、舟漕ぎうたふを見て、外のかたをさしてなむ、笑ひてしばし居給へり。祖父おとど、持たせ給へるをかしき物ども、多に持たり。
かよる程に、魚いと多く、川のほとりに、いかめしき木の蔭、花紅葉などさし離れて、玉蟲おほく棲む榎、二木あり。さか木の蔭に、時蔭、松方、近正ら、今かうぶり得て、このすけどもの官人にてある参りて、幄うちて居たり。魚、荒卷、人の奉りたらむ、多く有り。おとどの、斯かる折の料とて、鮎篝火、いとをかしけに造りおかせ給へり。それをとり出でさせ給ひて、荒卷そへて、梨壺宮の御方、中の君に奉らせ給ふ。内裏には、たゞ御消息して奉らせ給ふ。

兼雅まだ大將の惱ましくし給ふに、すゞませ奉るとて物しつればなむ、聞えずなりける。さてこれは、乳母たちの料に。

とて、ことさらに手づからぞ書き給ふ。中の君の御許には、兼雅日頃はいかでとなむ。近けれど、しばくも聞えぬを、今は覺束なき心地なむ。對面久しくなりにけりや。さてこれは、一條の御曹司の、手づから取りて侍りつる。かひなく、例の人々に取り散らさせ給ふな。

君がためあまのがはらに釣すとて月の柱もをりくらしつるとなむ今日は。

とかき給ひ、兼雅「これ見給へ」とてさし入れ給ふ。北の方、俊隆女「あな言よやと思ふためとか」とてさし出で給へれば、おし巻きて奉れ給ふ。

かくて遊などこれかれし給ひて、日やうく夕かけになる程に、主のおとど土器取りて、彈正宮に参り給ふとて、

〔考異〕
(四)「給ひて」て「ナシ

(三)「甘言をいよと

(一)「三條の」なるべし、俊隆女をさよ

〔語釋〕
(一)「大將の御方の惱ましく」歟

兼雅（一）ゆく水とけふみるどちのこの宿（二）にいづれ久しとすみ比べなむ
彈正宮、取り給ひて大將（三）にさし給ふとて、

忠康水のいろは君もろともにすみ來ともわれらはひとの心やはする
大將

仲忠水はまづすみ替るともまとるぬる今日のならばいつか絶ゆべき
とて宮に奉れ給へば、

女三千世へて澄むなる川の淵は瀬になればぞ人のこころをも知る
彈正宮、

人はいさわが身になふ心だに行くさきまでは知られやはする
八の宮、

我らだにむすびおきてば行く水も人のこころも何か絶ゆべき
と宣へば大將、仲忠、吾が君、よく宣はせたり。このわたりこそ、あな心憂や」と

〔語釋〕
（一）宿と、歌

（二）六の宮、歌

〔語釋〕
（一）女二宮

（二）つれば「なるべし

（三）「てや」歌

（四）今宮

聞え給へば、みな笑ひ給ふ。

かよる程に、あかき色紙に書きて常夏につけたる御文、持て参りたり。彈正宮、
「何處のぞ」と取り給ふ。使、藤壺の御方の、宮の御方に参らせ給ふ」と聞ゆれば、
忠康「我こそは宮」とて見給へば、

あて宮日頃なやませ給ふと承りつれ、如何にして参り來むと思ひ給へれど、こよ
にもまたいと苦しく侍るを思う給へつる程に、いと遠くわたらせ給ひにけれ
ば、七瀬の旅にてなむ。とてや、

もろともに朝夕わかす祓せしはやくの瀬々に思ひでらるよ
忘れがたくのみこそ。

とて端書に、
あて宮これはなめけなれど、こよにある人の小き、物食ひはじめけるを、若宮の、
犬宮にとて奉れ給ひける。

(語釋)
(一)誤あるべし「えひ」又「えひ」
「えひ」などとも書けり

(二)我に書けと仰せらるるか

と聞え給へり。彈正宮の、御ときよくえひ給ひて参れり。御覽すれば、一つには、参る物にはあらで、いと清らなる、今一つには参る物なり。取りひろけて、宮たちまゐり、遊びなす。彈正宮、忠康「この御返は聞えさせよとか。さらばいらへ聞えむ」と、いらへ給ふ人のなきに、空答をし給ひつよ、忠康「さらば」と聞え給へば、一の宮、「あな見苦しや、御使の見るに。賜へ、その御文」と宣へば、なほ聞えとり給ひ、忠康「御心地苦しと宣はす」など宣へば、大將、いとをかしと思して、うちほよ笑み給へば、忠康「いで宣旨書き奉らむ。見給へ」とて書き給ふ。
女二みづから聞えさせむとすれど、なほまだ筆も取られ侍らねばなむ。日頃は、如何なるにかあらむ、うちはへ惱ましくなむ今朝は、心にもあらぬありきをぞ。御文は朝夕とか。
みそぎせし瀬々の瀧つせ思ひ出でわがころもでも忘れざらなむ

(語釋)
(一)中の君をいふ

それにも劣らぬ。犬にと宣ひつる物は、子の徳見つやとて、大將ひとり皆食ひつめり。なかまろには賜はぬ。これさへ妬うこそ。
とて出だし給へば、大將かんのおとどに、仲忠「まうけの物や侍る」と聞え給へば、單がさねのほそなが、小袿、あはせのはかま、具して奉れ給ふ。もて出で給ひて、かづけさせ給ひて奉れ給ひつ。
鮎の御使ども、いととく歸り参りて、御消息どもみな聞ゆ。御返事ども有り。中の君は、
中君近くても同じおほつかなさなれば、御文はさて手づからとぞ。さればこそ年頃は、
わだのはら餘所になりにし魚とりはくもいづる原を誰かあけけむ
取り散らすなどあるは、ひとり言よく。
とあり。おとど見給ひて、兼雅「はかなし者は、例の乳母に取らせて、一つも食は

〔語釋〕
〔二〕女二宮

〔四〕誤あるべし「頭の」
本「かはの」

〔考異〕
〔二〕してありしつゝま

〔三〕ちひつゝまひて

でぞあらむ」とつぶやき給ひて、兼雅「これ見給へ」とてさし入れ給ふ。北の方見給ひて、俊隆女「けにや」と宣ふ。

かくて、御前ごとに物まるる。御折敷どもして、わざと清らなり。鮎さまぐくに調ぜさせて、いと多く、御たちの前に、衝重して有り。大將、宮の御許にまうで給ひて、仲忠物は聞召しつや。何をか参るべき」と聞え給へば内侍のすけ、「物も聞食さず。削り氷をなむ食す」大將、仲忠「あな恐ろしや。いみじく忌むものを」宮、女二「かよればこそ、いや増りつれ。氷食はでは、いかでかあらむ。さきに、物忌むといひつゝ、食はまほしき物も食はせず」と宣へば、仲忠「あな心憂や。食物むつかりを。醫師侍り。言ひて聞えむ」とて出で給ひ、典薬頭に問ひ給へば、聞ゆ、典薬「めさぬにや。過し給ひぬる時は、あつく冷やかなる物を驚きて御胸やませ給ひ、まだしき時はいとあしき物なり」と申せば大將、仲忠「斯くなむ」と聞え給へば、女二「あな侘しや。いと暑し」と宣へば、仲忠「團扇も参らせむ」と宣ひて頭

のところは、かのほとり、おとどより西によりて、屋あるをしたり、そこに氷召せば、小さく割りて、蓮の葉につよみて、様器にするて、近江守もて参りたり。大將とり給ひて参り給へば、少しまるりて、女二「辛うじてよかりつる心地を、惑はすかな。此處にな來そ。去ね」と宣へば大將笑ひて、仲忠「前には、かくも宣はざりしを、ものの罪などにや」と宣へば内侍のすけ、「度々の事に侍れば、内裏の御方は、大宮の御時にはいとみじくなむ。この御時には、例よりも違はせ給ひもおはしまさどりき」と聞ゆ。大宮這ひ出で給ひて、物どもに取りかよりて、欄み毀し給へば、父君、仲忠「この人こそ、いとまさなけれ。かよる業は、女はせぬものぞや。男おほかる簾のもとなどに、這ひ出づるものかは」と宣ふ。夜に入りぬれば、燈籠かけつゝ、御殿油まわりわたしたり。

亥の時に、「御はらへ時なりぬ」と申す。おとどの壇の上より、水いだして、石だたみのもとまで水せき入れて、瀧おとして、大井川の如く、簀子には、御簾かけ、

御床立てて御屏風ども立てたり。そこに、宮三所出で給ふ。かんのおとどは床もたてで出で給ふ。高欄におしかよりて御階の前に、おとど、宮たち四人、殿々の御たち、こなたかなたに居たり。陰陽頭、御祓ものして、仕うまつる。馬ども木綿つけて引きたり。御衣脱ぎ給ふ。一二の宮、唐綾のかいねり一かさね、姫宮御小鞋、かんのおとど、白き緑のひとへがさね、男宮たちも脱ぎ給ふ。宮たち、御はらへ仕うまつり侍れば、夜更けぬ。御遊し給ふ。一の宮和琴、二の宮箏の御琴、かんの殿琵琶。宮たちおはすれば、御几帳の後におはす。一の宮、女二「いと暑し。なほ此處にを」と聞え給ひて、御几帳の中におしやりて、女二「いとよう侍る」とて、御床におしかよりて、琵琶ひき給ふ。し給はぬ、はたまうけ給ふ。大將、仲思「こととは遠からず」と男たちの御あそびすにも聞え給へば、やがてならひ給ふやうなり。かよる程に、十九日の月山の端よりわづかに見ゆ。かんのおとど、扇に書きて一の宮に奉れ給ふ。

(語釋)
 (一)侍ればは「給へば」なるべし

(二)脱文あるべし

(三)脱文あるべし

校降女木綿かけて襦をしつともろともに有明の月を幾夜待たまし宮見給ひて、
 女一ながき夜の有明の月も待つべきをみそぎの神やいかどぞ思ふ
 二の宮、
 女二かくしつと月をし待たば淺き瀬のみそぎのかみも何か知るべき
 姫君、
 女四月まつと桂わたりにさ夜ふけてひく琴の音はかみも聞くらむ
 とあるをかんのおとど、大將に奉り給へば、また取りて、
 仲思かみも聞けおもがはりせず八百萬世々みそぎつと思ふどちへむ
 とて、人にも見せでさし入れつ。かくて、夜一夜あそび給ふ。夜明けぬれば、御簾の内に入り給ひぬ。
 大將、銀の箏四つ、脚つけさせて、鑄物師ども召して作らせ給ひて、跳びあが

(考異)
 (一)おもーかは

(二)あそび給ふ夜明けぬればーあそび給ふに明けぬれば

仲思かみも聞けおもがはりせず八百萬世々みそぎつと思ふどちへむとて、人にも見せでさし入れつ。かくて、夜一夜あそび給ふ。夜明けぬれば、御簾の内に入り給ひぬ。

〔語釋〕
〔三〕往來歟

〔四〕籤歟

〔五〕未考、一本「かんでう」

〔六〕正頼まだ此處にありの意歟

〔考異〕
〔一〕一箱一ナシ

〔二〕御もとに―御もとに

〔七〕おはしまし―おはしまさず

る魚ども取らせつ。鮎(一)一籠、鯉(二)一籠、いしぶし、小鮒入れさせ、荒巻など添へさせて、藤壺の若宮の御もとに、手づから、わうらひ月日書きて、せむたてて、御名し給へり。かたはらに、
(三)

仲思君がためしづけき空にすむ魚をけふより見せむ千世の日ごとくに

と書きて、蘇枋籤にして、赤き色紙に書きて、瞿麥の花につけたり。かてうなる人(五)を召して、仲思「これ、三條の院の南宮に参りて、若宮の御方に持てまるれ」と

宣へり。御使持て参りたれば、若宮見給ひて、若宮西の對になむ」とて奉れ給へれば、大殿(六)まだおはします。君たち、御方見給ひて、「此方わたり給へ」と聞え給へば、おはしたり。「かく書き給へ」とて、このやうに書かせ給ひてかたはらに、

君がかくとりそめければ山川のあさぢぞおきの上に見えける
教へつと書かせ給へれば、いとをかしけにかき給ふ。御使に祿賜びて、奉れ給へ

〔考異〕
〔一〕給ひつるかな―給へるかな

〔二〕など…出て給ふ―などかくてその日一日すまみ給ひかせ

〔三〕藏人の少將の君の御許より―藏人の少將の御許より―宰相中將の君の御許より

近澄、女二宮の乳母に消息す。

ひつ。おとど御前に人召して、調せさせ給ひて、興じてまるる。藤壺は、鮎ならぬ魚擇りて参り給ふ。

かくて御使参りければ、青き色紙にかきて、桔梗につけたり。見給ひて、女思いとかしこうも書き給ひつるかな。只さいつ頃こそ、手本召しよかば、奉れしか。

いとよう似させ給へり」と宣へば、右のおとど取りて見給ひて、兼雅「なほかしこき君なり」宮、女二「さいつ頃見給へしかば、手をこそならひ居給ひしか」大將、仲思「かたちもいとをかしけにおはすや。坊にも、内裏の宮、若宮よりは、この君をこそ。いとらうくしく故づきてぞ生ひ出で給ひぬへかめり」など宣ひて、おとどはかしこに出で給ふ。
(二)

日暮るれば鶉飼はせなどし給ふ程に、藏人の少將の君の御許より、二の宮の御乳母の許に、女(三)のよそひ一くだり、白張のひとへがさね包みて、御文あり。

近澄昨日のつとめて、消息聞えたりしかど、いそぎて出で給ひにければ。かの聞

〔語釋〕
(四)近澄が私の爲に衣類の世話をなして下さるは恐縮なり

〔考異〕
(一)川邊に―なほともに

(二)御返事―御返

(三)如きはしまさひて―とくもはしまさひて

えし事、宮にてはいと難かるべき事を、宮たちも御遊せさせ給ふべし、川邊にすゞみ給ふめる宵の間にたばかり給へ。昨日のつとめて、追ひてまうで来て、このわたりになむ、然る心して侍る。さてこれは、いと暑き日なめるを、脱ぎかへ給へ。

とあり。乳母見て、乳母「あな恐ろし。人もこそ氣色見れ」とて、里より洗ひに遣りたりし物持て来しさまにて、いとよう持て隠して御返事、

乳母かしこまりて承りぬ。昨日は、左のおとど参り給ひて、いそがし聞え給ひしが、いととく出でものし給ひしなり。宣はせたる事はあな恐ろしや。宮におはします時よりも、宮たち、垣の如おはしまさひて、夜は御めぐりにおはしまさふめれば、これかれだに、え近くも参らずなむ。いと忝く、旅におはしますなるを、はや歸らせ給ひぬ。人に氣色見えさせ給ふな。さて賜はせたる物は、あな忝や。かく、御櫛匣殿をせさせ給ふなむ。いかでこの御衣

は御目にもかけさせ奉りてしがなとぞ思う給へる。まめやかには、宮にわたらせ給ふなむと聞えさせむ。

と聞えつ。

かくて明けぬれば、一日すゞみ、鮎ひかせなどし給ひて、かくてその日の夕がた歸り給ひぬ。男宮たちは、あるじのおとどの御馬、鷹など奉り給ふ。女宮たちには、黄金のかうこの箱に、萬のあり難き物ども入れて、一の宮よりはじめ奉り給ふ。犬宮には箱の小さき、よべの物入れて奉り給ふ。乳母たちには、装束一くだりづつ賜ふ。御たちの中に鬘の具など出ださる。

かへり給ひて、右のおとど梨壺の御はらへに出ださせ給ふ。大將御車ども五つばかり出でたて奉れ給ふ。宮たち君たちなど参り給ひ、逍遙などをかしくし給ひて、かへり給ひて、二日ばかりありて宮、東河に車三つばかりして出で給ふ。おとどは出で給はず。睦ましき人々して出で給ふ。近江守に宣ふ、兼雅「この東河

〔語釋〕
(一)女二宮の
(二)近澄の來り居らるる由を女二宮に申上げん
(三)かくて―衍文歟
(四)宮たちには―なるべし
(五)皮箱の箱歟
(六)兼雅
(七)仲忠
(八)女三宮
(九)鬘の―鬘物の
〔考異〕
(四)夕がた―夕がたに
(七)かうこの―やつこの
(八)には―は―ナン
(九)鬘の―鬘物の
自梨壺あて宮等處々に祓

(一)二五つ：逍遙など―五つばかりして奉り給ふ殿の若宮などして出で給ひて逍遙など

(一) 語釋
 (二) 女三宮は
 (三) 正頼
 (四) 「一つに」は「一に」にて
 (五) 「一つに」は「一に」にて
 (六) 哀と思ふべし—哀に
 (七) 物せよと仰せよ—物
 (八) 物せよと仰せよ—物
 (九) 物せよと仰せよ—物
 (一〇) 物せよと仰せよ—物
 (一一) 物せよと仰せよ—物
 (一二) 物せよと仰せよ—物
 (一三) 物せよと仰せよ—物

(一) 語釋
 (二) 女三宮は
 (三) 正頼
 (四) 「一つに」は「一に」にて
 (五) 「一つに」は「一に」にて
 (六) 哀と思ふべし—哀に
 (七) 物せよと仰せよ—物
 (八) 物せよと仰せよ—物
 (九) 物せよと仰せよ—物
 (一〇) 物せよと仰せよ—物
 (一一) 物せよと仰せよ—物
 (一二) 物せよと仰せよ—物
 (一三) 物せよと仰せよ—物

に、祓しに物するを、東河の水に近からむあたりに、車立てさせて、鮎などくふべき様に物せよと仰せよ。あやしう若き子のやうに、人のするに随ひたる人なれば、心苦しくなむ」とて出だし立て給ひてかへり給ひぬ。

畫詞 ことば三條殿。

かくて、藤壺も、辛崎に御祓し給はむとて、大殿ももろ共に、君だちさながら、御供の人々多かり。御車ひきつどくる程、大宮、「あなたの御車を一つに」と宣へば、藤壺、あて寫いかでか先」と宣ふほどに、御車ども二方にひき續けて立ちわづらふ。おとど、正頼なほ彼を促せ」とて藤壺の御車を一に立てさせ給へば、みな人々と哀と思ふべし。辛崎におはしまして、御祓いかめしうし給ひて歸り給ひぬ。大殿もかへり給ひぬ。此方には例の番むすびて、君だち宿直し給ふ。かくて經給ふほどに、東宮より、おそく参り給ふとて、ある時は哀に心苦しげに、ある時は憎げに怨じ給ふ。ついでに随ひて御使あり。その御使の藏人の申す様

(一) 語釋
 (二) 女三宮は
 (三) 正頼
 (四) 「一つに」は「一に」にて
 (五) 「一つに」は「一に」にて
 (六) 哀と思ふべし—哀に
 (七) 物せよと仰せよ—物
 (八) 物せよと仰せよ—物
 (九) 物せよと仰せよ—物
 (一〇) 物せよと仰せよ—物
 (一一) 物せよと仰せよ—物
 (一二) 物せよと仰せよ—物
 (一三) 物せよと仰せよ—物

藏人「梨壺のなむ、坊には居給ふべき、と申しなりにためり。まつりにも、屢まうのほり給ひ、書はことにわたらせ給はず。日頃はことに御遊もし給はず」と聞ゆれば、ある時は一行二行と聞え給ひ、ある時は聞え給はず。かよれば、皆人の申す、「あな異様や。またなき例をもし出で給ふかな。かく侮られ給ふ事」とそしり申す。殿には、大殿の御方にも、藤壺の御方にも、今より宮づかさ帯刀など申す人おほかり。若宮の御方には、人々参り込みつと、公のやうになりておはしますを、見奉り給ふまよに、おほし嘆くこと限なし。山々寺々に、修法おこなはせ、神佛に申し給ふ程に、七月の中の十日になりぬ。ある夕暮に、彈正宮、西の對に参り給ひて、御物語きこえ給ふ。忠廉「かくて物し給ふ程に、しばし聞えまほしけれども、物騒がしう物し給ふめれば、いとおとなしくなりまさり給ふなりし心地も、みづから聞えむとせしを、あえものの程過しつるになむ」御いらへ、あて寫あえ物は、年隔ててこそは。ことにも徒然と侍

(一)「いでは「いちへ」の
 誤歟
 (二)方々へ遣はさるる文
 をたまには私にも下され
 たし
 (三)賜ひつべくや歟、一
 本「給へつはや」
 (四)我を望にせんといふ
 人
 (五)眞面目男

(考異)
 (一)心憎くてしてナシ
 (六)思はえぬーおぼえぬ
 (八)あて宮が出京を勧め
 たりしに

實正、實忠を其の舊妻
 を置ける三條邸に導く。
 實忠、女を見識らず、そ
 て君の悲嘆。實正、實賴と
 共に實忠を三條邸に留め
 んと盡力す。

るを、誰々にも聞えまほしけれど、皆こそ思し忘れにたれ」宮、忠康「さらに忘れ
 聞えず。かくて侍るをば、何の心ありてとか思す」あて宮「いでなほ心憎くておはし
 ますとこそは」宮、忠康「このあまたし給ふわざ、時々はこよにもして賜ひつべく
 はや。斯くてやは」君、あて宮「いと見まほしくて、數多物せらるるを、何かは」
 宮、忠康「まめやかには、年頃かくては侍るを、こよかしこにも物せよといふ人侍
 れど、御心のつらかりしにのみ、忘れ難くて、さやうの心も思はえぬに、なほ昔
 の様にも思ほさで、忍びて知る人にはし給ひなむや」と宣へば、あて宮「あやし。忍
 びずとも、然て知らぬ人にやは。かく聞え承るも疎からねばこそ」など聞え給
 ふ程に、左大辨の君、師置「いと疎々し」とて参り給へば宮、忠康「生憎や。このう
 るはし者は何しに來るぞ」とて聞えさし給ひつ。
 かくて新中納言、實忠「藤壺ものし給ふこと有りしを、かくてあらば物しともぞ思
 す」とて小野より物し給ひてけり。民部卿、實正「いと嬉しく物し給へり。遅くお

(語釋)
 (一)凶兆ありし故
 (二)三條殿なるべし、實
 忠の妻子をおきてある處
 なり
 (四)實忠の妻子
 (五)わざとまだ迎へ取ら
 ぬ様に偽り言ふ也
 (六)三條へ
 (七)實忠の妻
 (八)實忠が
 (一)袖君なり
 (三)内に入りてーうちい
 りて
 (九)恥ぢ聞えぬ所にいと
 ひがしくー恥ぢ聞え
 ぬ所にいとひがしくし
 かりてー恥ぢ聞えぬ所には
 かひなくとくー
 (一〇)柱の「のしナシ」
 (一一)居たりー居給へり

はせば、御迎にまうでむとなむ。こよはいとかく便なきを、日頃侍る所に物のさと
 しなどせしかば、さいつ頃二條殿になむまかり渡りて侍るに、其處におはして、聞
 えしやうに、内に入りておはしませ」と聞え給へば中納言、實忠「何か。こよにも
 しばしは物せむ。尋ねむと宣ひし人は如何は」と聞え給へば、實正「いと暑く侍り
 つれば、程遠くては物せず。今少し涼しくなりなむ時」などつれなく聞え給ひて、
 「なほいざ給へ」とて一つ車にておはす。下りてもろ共に入りおはするを、北の方な
 ど見給ひて、おどろきて、御几帳立て直しなす。まづ民部卿入り給ひて、實正「あ
 な見苦し。こは何ぞ」とて御廉あけ給ひつ。あるじだちつい居給ひて、實正「な
 ほ、こよには恥ぢ奉る人もなし」と聞え給へど、つよみてえ入り給はず。民部
 卿、實正「なほ入らせ給へ。女だに恥ぢ聞えぬ所に、いとひがしく」と聞え給
 ひて御圓座さし出で給へば、いと濫々に入り給ひて、いとまめやかに見給へば、
 奥のかたに小き几帳立てて、人あり。柱のもとに若き女のいと清らなる居たり。

(語釋)
 (一)袖君を實正の妻と思ひ違へたる也、實正の妻はあて宮の姉三の君
 (二)袖君
 (四)袖君の
 (六)見つめて
 (七)實忠妻は實忠が娘を見知れるならんかと恥かしく思ひたれど實忠は氣付かずして詞もかひず
 (八)今は斯くて一歎
 (九)と一衍文なるべし
 (一〇)實忠妻
 (一一)舊妻に
 (考異)
 (三)見給ふを一見給ふを
 (五)と一ナシ
 (一一)外に一上り

中納言いと怪しく、睦ましと言ひながら、つれなくとも居給へるかな。これは、藤壺の御姊なれば、かく良きぞ、と見居給へり。姫君は、とまれかうまれ、わが親に見え奉らむ、親の御顔見むと思ほして、伯父おとど見給ふを物にも思ほしたらで、さし向ひて居給へり。中納言は、容貌のいと美しけなる、まほらへて居給へり。女君は、見や知り給ふと恥ぢたれど、物も宣はず。姫君、父君のえ見知り給はぬをいとかなしと思ほして、え念じ給はで、つぶくと泣き給ふを、民部卿いと哀と見給ひて、實正「思ほし出でずや」と聞え給へば中納言いとまめに、物も宣はず。民部卿、實正「この君を、いとあさましく、斯くなり給ふまで見奉り給はねば、思ひわびて、かくおはしませつるなり。今、斯くておはしませ。世の人のあらぬやうにては、え長くは物し給はじと。御髪も、斯くぞなりたる」とてかき出でて見せ奉り給ひて、實正「今一所も、かく此處になむ。天下に外にもとめ給ふとも、勝る人しもえ侍らじ。實正らを人と思すものならば、なほかくて物し

(語釋)
 (二)實忠が
 (三)洗濯
 (四)實忠の世話を思ふ様にすること能はじ
 (五)舊妻には構はずともよし
 (六)袖君
 (八)もとるへにたれど一歎
 (考異)
 (一)まさご君の一またまさご君の
 (七)物参る仕うまつる人は一物参り仕うまつり人は

給へ」と聞え給ふ。實忠「年頃見ざりつるほどに、大人にこそは」と宣ふまよに泣き給ふ。昔の人々あつまりて泣く。まさご君の御乳母の前なるを見給ひても、中納言いみじく泣き給ふ。さても怪しう、心にもあらで來たるかなと思ひ給へり。民部卿、實正「故殿のおはしましよ時こそ、女親のごと、折々の御すましの事なども、御口入れ給ひしかど、今は女同胞とおはするは、さやうに心しらひても物し給はず。實正らが如きは、自らの事にもかなふ人し侍らねば、志は有りながら、えおほしき様にも仕うまつらじ。かく世中をおほし離れにたれば、母君は、よしな知り給ひそ、この君を御後見にて、よろづの事さやうに思ほして物し給へ」など聞え給ひて、御供の人々、所々にするゑさせ給ひて、もの賜はせなどして、實正「遠くよりおはしましつるまよにて、奉て奉るなり。物まるれ」と宣へば、黒き御臺一よろひ、精進の物、いと清らにして物まるる。仕うまつる人は、そで君、まさご君の御乳母、おとなひにたれど、かたち宿徳にてあり。童なりし人で、大人

〔語釋〕
(一)實忠を

(二)實忠が心に舊妻を許す也

(四)父季明

(考異)
(三)御うちは一御うちき

になりて、若人にてはありける。童ばかりぞ知らぬはある。かくて物参り、御酒など参りて、山里よりわたり給ひし日、しつらひ置かれたる御方に、「彼方に入らせ給ひて、いと暑きに、休ませ給へ」と聞え給ひて、入れ奉り給ふ。昔持てつかひ給ひし調度、いさよかに手習し給ひし反故など、とり散し給ひなどして居給ひしまよに、他御調度の清らなる、あまた添はりたれば、無き物なくしつらひ置かれたり。中納言、なほ有りがたき心ばへありかし、親もなくて、我のみ頼みたりし人の、子ども持たりしを見棄てて年頃有りつるに、かく一つも失はで有りける、など見給ふ。こなたにも、むかし見給ひし人々の参りて、御衣とり懸け、御うちなど参れば、たゞ昔の様なり。民部卿は、女に聲取したらむやうに、居立ちて、殿へも物し給はで、たゞ此の君の事をいそぎ給ふ。新宰相も、いそぎ参り給ひて、實頼は、殿かくれ給ひてのち、夜晝かなしき事を思ひ給へ嘆きつるに、今日なむ、その心も忘れて、嬉しう思ひ給ふる。なほ斯くて經給はど、すべ

〔語釋〕
(一)兄弟なれども實忠を親の如く君の如くにして仕ふべし

●實忠舊妻に逢ひて昔を語る

(二)實正實頼

(三)舊妻の方に

(四)思出したらば又も来べけれど度々は来らじとの意歎

て同じき同胞と聞ゆとも、親君と仕うまつらむ」とて一所ながらこよに物し給ひ(二)かしづき仕うまつり給ひつよ、二三日經給へど、北の方にも姫君にも、まだ物聞え給はず。かよる事を、内裏にも東宮にも聞召して、「らうたく、徒らになりぬと聞きつるを、今は宮仕せむと思ふにやあらむ」と宣ふ。左のおとど、いみじう悦び給ふ、年頃も聞えつるを、わが逢ひて、さて物せよと言ひしかばにやあらむ、と思ほす。中納言、世の人、藤壺なども心ならずや思ほすらむと思して、四日ばかりありて夕さりつ方、此方にわたり給ひて、姫君に聞え給ふ、實忠いと珍らしく對面したりしかど、見奉りしにも、己が心からは言ひながら、よろづの事哀に覺えしかば、まめやかにと思ひてなむ。年頃、いかでか今更にはと、哀にかく物しにければ、それも心憂くおほえて、此のわたりには、思ひ出でられむによりてなむ。多くはえ」など聞え給ふ。姫君、ともかくも物も宣はで、たどつくくくと泣き給

〔語釋〕
(一)誤あるべし

(二)あれがそぞ君母子の
かくれがなりしと

(三)實正の

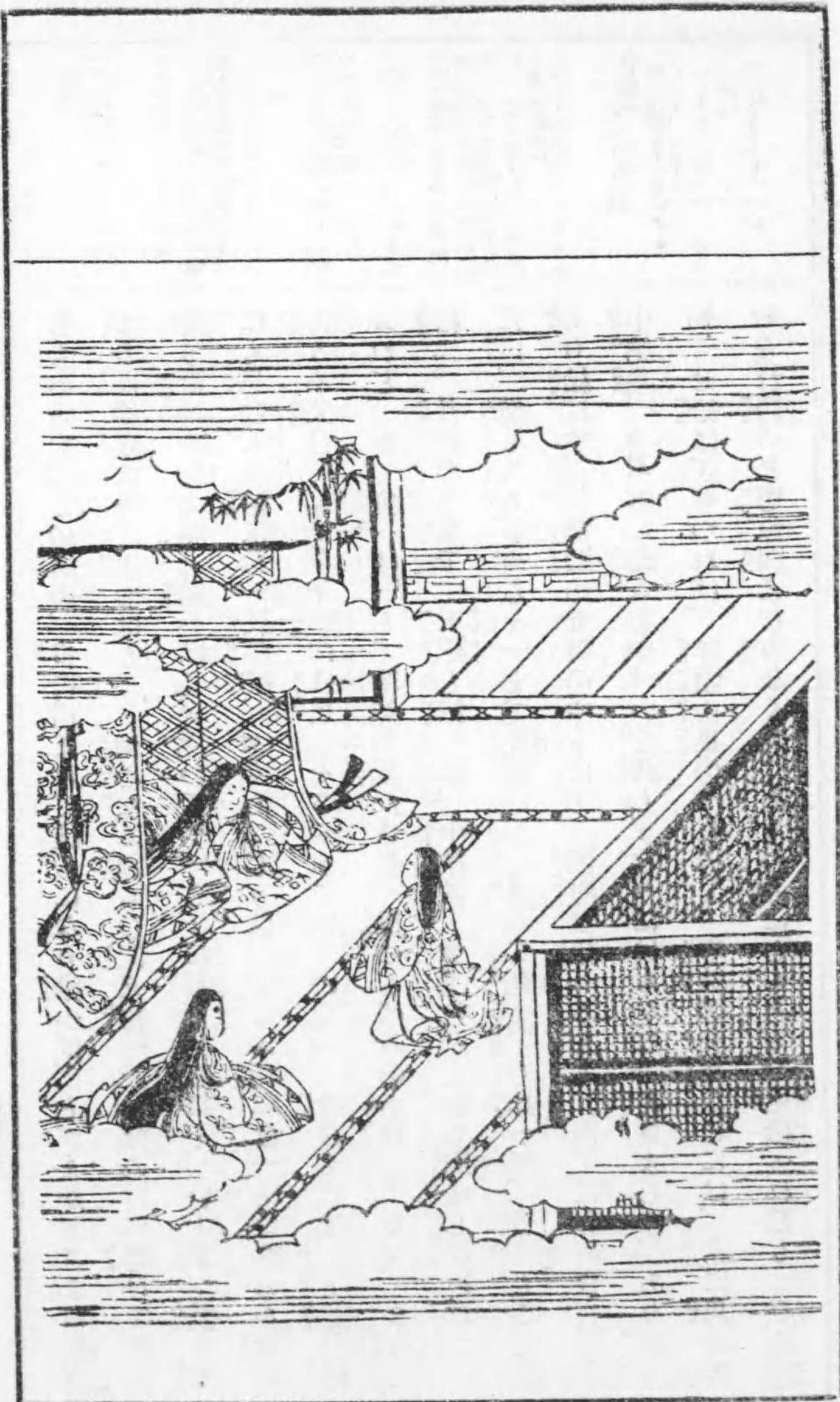
(五)父季明が

(七)實忠が

〔考異〕
(四)い何かはいかで
何か

(六)をも一ナレ

へば、實忠（一）なほ年頃（二）有り經つらむ物語をこそせめ（三）など宣へば、そぞ君年頃戀し
くかなしくのみおほえ給ひつるを、辛うじて、對面賜（四）はりたれば、夢の心地して（五）
など聞え給へば、實忠世の中にえ久しかるまじき心地のせしかば、法師にもなり
なむと思ひて、山里に、年頃は（六）そぞ君民部卿（七）かなたに物し給ふ所にて、尋ね聞え
むばかりなかりしかば、折節（八）に思ひ出でつよ、いかでとのみ思ひながら、年頃え（九）
など聞え給へば、實忠紅葉見むとて、知らぬ人ものせし時に、まうでたりし所な
む、其處と、殿かくれ給ひし程に、卿の君の宣ふになむ然なりとは知り（一〇）にき、い
と里離れては有りけむ（一一）など多くの御物語し給ひて、實忠母君は何方にぞ。物聞
えむ、と聞え給へ（一二）と聞え給へば姫君悦びて、北面（一三）におはする所にまうで給ひ
て、聞え給へば、北の方、實忠妻（一四）いで、何かは（一五）と聞え給へば民部卿、實正（一六）かけの
ごと添ひてと宣ふをも、斯う宣ふをも聞き給ひて、吾が佛（一七）など斯うは宣ふぞ。消
息し給はずとも、まうでて對面し給へ（一八）、とこそは思ひつれ。御上を思ひ聞ゆるに



(一) 實忠

(二) 我があはゞ實忠は彌出家の志を堅くすべし

(三) 「聞え給ふゆりしだに」なるべし

(六) 「見たてまつれど」歎、我は昔とかはりはてたる様にて其方に對面すれどこの意なるべし、一本見たまへれど」

(四) 几帳を「を」ナシ

(五) 「にも」も「ナシ

しもあらず。この君の、世に惜まれて徒らになり給へば、とさまかうさまにたばかり聞ゆるなり。早おはして、何心なく語らひ聞え給へ。おほろけに思ひてやは斯う聞ゆる」と申し給へば、實忠妻「いでや。こよに對面せむにぞ、いとど、鷲の山にも思ひ入り給はむ」民部卿、實正「おなじうは、戀てふ山には」と聞ゆるを北の方うち笑ひて、實忠妻「年頃の住居こそさやうには。いでや、今さらには、と思ひ給ふれど、かく宣へば」とて薄鈍の單がさね、黒つるばみの小袷奉りて、まうで給ふ。几帳おし出でて對面し給へば、中納言、實忠「むかし恥ぢ聞えしなめりしにだに、然もあらざるを」とて几帳をおし遣りて見奉り給へば、昔にもことに劣り給はず、仁壽殿の女御のやうにて、面瘦せ給へるしも、あてに見めきたり。中納言、實忠「あな珍らしや。いと久しうなりにけるかな。あさましう、あり所も知らせ給はざりつれば、年頃山里のつれづれ、春秋の夜寒などには、常に思ひ出でられ給へど尋ね聞えむ方なくて、ありし人にしもあらで見給へれども、そこに

は變り給へることもなく、たゞ哀なる人のみなむ」とて扇に書きつけて奉り給ふ。

實忠雲井よりかへりてみれば故郷のいま雛鶴ぞまち見ざりけるとて奉り給つれば、北の方泣くく、

實忠妻むかし見しやどもの山に荒れましてかへらぬ鶴をまつも枯れぬると宣ふをいと哀と思して、實忠「まめやかには、昔怪しきそどろ心のつきて、あく

がれそめにし心地の、鎮まらざりしかば、世にもあらじと思ひて、あやしき山里に籠り侍りて、親の御許にもまうでざりき。唯此の折にぞ、まうでて見奉りし。

其處にてなむ、こよには平かにおはしますなど聞きし。すなはち思ひになりしかば、今まで。すなはち聞えむとせしかど、心ふかき所つき給へりしかば、如何にぞ思ひつとみてなむ」北の方、實忠妻「年頃は、いと哀と物おほして居給ふ、と承

(語釋)

(一) まさご君の亡くなりたるをいふなるべし

(二) 給へれば」歎

(四) 季明薨去の時をいふなるべし

(五) 北方の無事なる由を聞きたり

(七) 父の腹中になりし故

(考異)

(三) そめにし心地のーそめにしをなほ心地の

(六) 聞きしーきこえし

(八) 如何にぞーいかにぞ

(語釋)
 (一)舊妻を
 (二)不詳、一本「まさを
 「さい」とかけり
 (三)實忠が自分の住居の
 方へ
 (四)「物し給はずば」にて
 自分たちがついて居ねば
 實忠が小野へ歸るかも知
 れぬとての意なるべし
 (五)實忠の處につききり
 にして

仲忠、實忠を訪ふ。正
 頼、實忠を訪ふ。

りつる、わがことにやと思ひ知られて、いかで訪らひ聞えむと思ひつれど、それ
 につけても、思はずことやあらむ、とてなむ」中納言、實忠「何かは、今までは。
 暫しこそ、人を憎しとは思ひしか」などおほく御物語、年頃ありつる事など、か
 たみに聞え給ふ。(二)中納言、實忠「いとよかめり、かくて物し給へば。ことにはささえ
 ついつけても、そへて物し給へば、煩はしうて、来るをりあらば、親同胞のごと
 語らひきにたれば、恐ろしとこそ思さるらめ」など夜更くるまで聞え給ふほどに、
 夜さりの御臺参り物など聞食して、おほん方にわたり給ひぬ。(三)
 かくて御同胞の君たちは、物し給はず小野へや歸り給ふとて、北の方たちの御許
 に、「かよる事のあればなむ」とて、夜も晝も物し給ひて、人々の参る物なども、皆
 「持てまうで來」と宣ひて、内にも奉れ給ひ、此方にも取り散らし給ひつゝ、
 人にも賜ひなどして、物し給ふほどに、昔見かたらひ給ふ人は、上達部も、殿上人
 も、めづらしがり悦び、あるは興ある物など奉れ給ふ。右大將殿も夕暮のすど

(語釋)
 (一)實忠の妻のかくれす
 みし志賀の山本

(三)忠澄祐澄

(四)實正實頼實忠

(考異)
 (二)もとの御妻一本妻

(五)思ひ一思ふ

しけなるに物し給ひて、仲忠「こと斯うて物し給ふと、只今なむ承る。年頃お
 はする所にまゐり來むと思ひ給ふれど、とかく参らでなむ。然るは、かの見付け
 し山里にも、いかでもろ共にとぞ思ひ給へるや。かの人は、おはしてとひ給ひき
 や。誰とは聞き給ひつるや」と宣へば中納言、實忠「年頃は、尋ねとはせ給ふとこ
 そ、深き山人には」と申し給ふ。北の方、姫君などは見給ひて、かの山里に物し給
 ひし人にこそはあめれ。見しよりも、いと宿徳に清けにもなりにたるかな、誰な
 らむ、と見給ふ。かくて物語などし給ひてかへり給ひぬ。
 かよる程に左のおとど、君だちに、正頼「新中納言もとの御妻にかへり給ひて、こ
 のたど東に物し給ふなるを、訪らひに物せむ。故殿「徒らになすな」と宣ひし
 ものを、かく世づきて物し給ふなる悦申さむ」と宣ひて、左衛門督、宰相中將
 などしておはしたり。民部卿、おどろきて、三所ながら出でて御迎して入り給ひ
 ぬ。おとど、正頼「かくて物し給ふとなむ、一日承りし。すなはちと思ひ給へし
 (四)
 (五)

〔語釋〕
(二) 眠脱あるべし

〔考異〕
(一) 言ひ一ナシ

(三) 空にて一空にし一こ
くにて

(四) ころるを一ころるは

を、いと暑く侍りてなむ。いと嬉しく、思ふやうにておはするを、限なく悦び聞ゆ
るを」民部卿、實正「あからさまに、妹とぶらひに物し給へりしを、言ひとどめて
侍るなり。なほ山里になむ、いと忘れ難けに」おとど、正頼「御心と、かくて物し
給ふにあらすやはとて、かねてまうでけるよろこびにこそ、祈などする時さいは
ひといふ事あるは」とてみな笑ひ給ふほどに、内裏より、精進の御肴して、心こ
とにいと清らにて、御酒まゐり給ふ。中納言に土器さし給ふとて、
正頼忘るなと契りおきけむたらちねも笑みて見るらむ雲の上にて
中納言、賜はりて、
實思契りけむ雲井をかつは忘るれば空にて君が見るをしぞ思ふ
民部卿、
實正おひのほる雲も知るらむ山里にたづねいでつと契ることろを

宰相

(四)

〔語釋〕
(一) 實忠が妻と別居した
るを云ふ

(二) 云などとしてなるべし

(三) 正頼が實頼を以て實
忠の妻に言傳する也

〔考異〕
(四) 聞え給ふ一ナシ

實頼昔のいまの雲ははれぬらむ契りし宿にありと見つれば
左衛門督、
忠澄雲よりもおのが山々年へつる君をばたれか嘆かざるべき
宰相中將、
正頼山里に行きつと見ればうちながめひとり經しこそ哀なりしか
民部卿、實正「牛憎や。同じ心に」と宣へば、「いらへするはと仰せられつれば」な
どて御酒度々きこしめす。御物語など久しくし給ひて、新宰相の君して、内に御
消息聞え給ふ、實頼「いと嬉しくて物し給ひけるを、喜び聞えさせに。いまだに隔
て聞えず承らむなどやうにてかへらせ給ふ」と聞え給へれば、北の方、土器に
かく書きて、瓶子もたせて奉り給ふ。
實忠妻巢立つ子とまだ知らざりし雛鳥の枝はいつれぞ知らず顔にも
とあり。おとど見給ひて、正頼「けにいと理や。されど、

(一) 語釋
(二) 自邸へかへり

(三) 實忠、あて宮と文を贈
答す。

(一) 考異
(二) 處一頃

(三) すなはち一のち

正頼鳥の居るおなじとぐらはとひしかど古巢を見てぞとめすなりにし」
 とて奉り給へば中納言、何事ならむ、かたはらいたし、と思す。かくて民部卿、
 凶事の處なれば、かづけ物はせで、御供の人々に腰挿などし給ふ。おとどかへり
 給ふとて、正頼「かくてのみを、今は物し給へ。さておはせば、かう近き程なるを、
 さし歩みつゝ参り來む」とておはしぬ。
 かくて十日ばかり有りて、民部卿なむ、夜は殿へおはし、晝はこよにのみおはす。
 中納言は藤壺いかに聞き給ふらむと、しづ心なく思ほして、下の殿へ還りなむと
 おほせど、晝は萬の人々参りて、故殿の人々もなづき奉りなどし給ひ、仕うまつ
 る受領なども、まめやかなる物、菓物など奉れば、時の所のやうなり。藤壺に御
 文奉れ給ふ。

實忠御消息聞えたりしすなはち、遠くまかりて、山里制せさせ給ひしかば、時々



(語釋)
(三)其内定めし内裏へ歸り給ふべし

(四)「は」は「と」の誤なるべし

(五)「生ひ直り」の意歟

(考異)

(一)あからさまと一あからさきにと

(二)なむ一ナシ

(六)おはせば然る一おはする

はと聞えさせしかば、一「あからさまと思ふ給へてまうで來しを、思の外なる事も侍りてなむ、自ら聞召すらむ。

故郷にありとは人に知らるれど涙にのみぞ浮寐せらるよ

いつしか内裏にも。さらば時々、と宣はせしかばなむ、今日までもかく近き程に侍るを、ありしやうなる折もいかでかとなむ。参らせ給ひなば何時を何時とか。

時とか。

は聞え給へり。御かへり。

あて宮日頃は、ちかく物し給ふと承りつれば、おひなをりをもとなむ。時々と

聞えし事は、なほ然てのみおはせば然る折も有りなむ。とみに参るまじくなむ。

なむ。

そこにかくありと聞ゆる今よりぞ言ひてしことも思ひ知らるよ

と聞え給ふ。

●實忠夫婦の情舊に復す。實正、實忠の文を見て其の情を悟る。

(語釋)
(一)仲忠をいふ

(五)我が志賀にかくれ家を尋ねし時なせ名乗りてはくれざりしぞ

(考異)

(一)給ひつる一給へる

(三)にてぞありしそれは一にぞありしこれは

(四)思ふ給へつゝ一覺え給ひつゝ

(六)そで君一ナシ

中納言いと花やかにもてなされて、かくてもつきなからずや、山里につれぐと、男どもをのみ使ひておはせしよりは、と思ほさるれど、なほ世の人の心をつよみて、北の方には物も聞え給はず。塗籠はなくて、中戸をたてて、東の方には北の方、西には中納言と、いと疎々しうて、女も召使ひ給はず、使ひつけ給ひつる男を召し使ひ給ひつゝおはす。時々、姫君のみ呼びわたし給ひつゝ、物語し給ふ。實忠「年頃は、何事かし給ひつる。一日こゝに物し給へりしは、かの山里におはせし人ぞかし。そのかみは中将にてぞありし。それは、萬の事する中に、琴の上手ぞ。それこそ、紅葉見るとてありし。そこにや有りけむ、琴弾きしを、よくなりぬべき琴かな」と宣ひしが、その後はよくなりたりや」そで君「年頃は、夜晝、こひしく悲しくのみ思ふ給へつゝ、世にえ侍るまじくのみ思えしかば、かくてもえ對面すまじきにや」と嘆かれて、萬の事もかひなく、徒然となむながめ侍る」君、實忠「などか、まうでたりしには、こゝには「我ぞ」とは宣はざりし」そで君、「さ思ふ

(語釋)
(一)あて宮の

(三)「つがせしかどゆめ」
歎

(四)出家して後女に近づ
く様に見ゆる故矢張今迄
通りにして居らん

(考異)
(一)ゆめ人は一ゆめも
人には

(五)御返一御返事

給へしかど、母君制し給ひしかば、出でて、聞召しもやするとて、よろづの事を
聞えしかど、知しめさずなりにしかば、いとこそ悲しく侍りしか」と聞え給へば、
心あやまりこそしたりけれと思して物も宣はず。
かくなどぞもてなして、隔て給へど、北の方には、人の寢静まりたる夜々、中戸
より窃に入りて、時々物など聞え給へど、ゆめ人には知られ給はず。みそか人の
やうにてぞ聞え給ふ、實忠「年頃、心變りてあるやうなりつれど、御もとより出で
て、他人を目に近くだにぞ見ざりつる。この西の院に有りし時、物聞えし人の御許
なりし、兵衛といひしになむ、物聞えつがせしこと、ゆめ戯れ事も言はずなりに
き。此頃ばかりぞ、斯くてありつる。容貌ことなる頃しも、人に物聞ゆるやうな
れば、なほ斯くてはあらむ」とて出で給ひぬ。
晝つ方、御文かきて、中戸のもとにて、姫君を招き寄せて、實忠「これ、母君に奉
り給ひて、御返取りてを」と宣へば、持ておはして、然らぬやうにて奉り給へ

(語釋)
(二)「あなたのかたまは
りて見む」歎

(考異)
(一)民部卿の物し給へり
一民部卿ものし給ふ一民
部卿ものし給ふ

(三)昔のみ「み」ナレ

(四)給ふるも一給ふるに

ば、民部卿の物し給へり。北の方斯くこれかれ物し給ふに、物いはずと見給ふらむ、
と思せは、取りて見給ふに、民部卿 實正「あなたのかたま見む」と宣へば、姫
君、そぞ君かしこに立ち給へる、「人に見すな」との給へるを」實正「いかと思すらむ
と、いとゆかしく思ひ給ふるに」とて取りて見給へば、
實忠いと哀に、昔のみおほえしかば、萬聞えむとせしを、山籠の心なきやうに
やとつよましくて、
逢ひも見でふる年月はなになれや暮がたくのみ見ゆるあきの日
暮にだに、心静にもがな。忍びて、こなたにもやがて。
とあり。民部卿、實正「さればこそ。悪くやはたばかり聞えたる。はやく御返事聞
え給へ」と宣へば、實忠妻「何か」とて書き給はねば、姫君、
思ほし出づるなるは、近かりし昔の効にや、と思う給ふるも、けに如何にと
なむ。いでや、

〔語釋〕
〔一〕實忠が妻の方にゆき居る時に

〔考異〕
正頼食物を實忠に贈る。實忠小野に歸る。

〔考異〕
〔二〕瓜一栗

〔三〕人の許にとて一ナシ

〔四〕來ぬらむ一ぬらむ

〔五〕給へ一給へや

餘所なれどなほ夕暮はたのまれきかはるを見つる今ぞかなしき
心細くなむ

とて奉り給ふ。

かくて夜さりつ方、此方にわたり給へるほどに、左大殿より、よき蜜、瓜、焼米、生海松、水炭など奉れ給へり。北の方の御許に御文あり、

正頼一日参りたりしかど、出で立ちたりしなどありしかば、煩はしきになむ、急ぎ。さてみるはた人の許にとて、

わだつうみの底に入りてぞ求めつるものと見るめをかづき來ぬらむ

とく見習し給へ。焼米は、嬭の齒は立たで、嚙み残したる。若人の御許に。

とあり。取り寄せて見給へば、いとよき瓜、よき水炭、折櫃に積みて、大なる甕に、「おひ姫君なむ御覽ぜよ」とかきつけたり。あけて見給へば、銀の甕どもに、練りたるきぬ、唐綾など入れて、絲を輪にまけて、組みて、沈の枴につけたり。

〔語釋〕
〔一〕とては「さてなるべし」

〔二〕誤なるべし

〔三〕「やうせ」は「やかせ」

〔四〕給ひつ一給ふ

〔考異〕
〔四〕給ひつ一給ふ

中納言見給ひて、實忠「あな忝や。わづらはしく御志あるを、枴え給へる」とて奉り給ひつ。御返事は、

實忠妻何事か、怪しうなむ。とて、この海松は、

伊勢の蟹もみるめをかくしかづきせばうきに心はしづまざらまし

焼米は、大かみにこそはなむ。さてもやまとのには見え侍らなむ。あなか

し。いととくやうせ給へ。

と書かせ給ひて、御使に祿賜ひて、奉れ給ひつ。かくて、夜々なほまうで給ふ。

姫君に、實忠「今は御服ぬぎ給ひてよ。明日なむよき日」と申し給へば、そて君「人

人の脱がせ給はむ時にこそ」と母君は宣ふ」と申し給へば、實忠「益なき事。かた

の如くにて、親ありとならば」とて御車ども、御前などして、脱がせ奉り給

ふ。歸りおはしたるを見給へば、濃き御衣、小袷など著給へる御容貌、いと清ら

なり。藤壺のやうなる人の、氣少し劣りたるなり。父君、いとよき御女なりと見

〔語釋〕

(一)君が來ぬ間にの意歟

(二)讓位の事近くなりたるを云ふ

〔東宮よりあて宮へ消息、東宮、あて宮の返事なきを怪む。〕

(三)「これはた」なるべし

(四)前の如く矢張あて宮の御返事なくば再び歸り來るな

給ふ。

かくて、小野へ物せむと思ほす。北の方、同じ装束いと清らにして奉れ給ふとて、

實忠妻君にとてぬひし衣もこぬほどに涙のいろに濃くぞなりぬる

御返し、

實忠涙にし濡れけるきぬの黒ければなほ墨染といかと思はぬ

とてあからさまに小野へおはしぬ。

かくて東宮は、藤壺の参り給はず、御返きこえ給はぬをおもほし嘆きて、院の御

方、梨壺なども久しうなむまうのほらせ給はず、御局へもわたらせ給はず、つれ

づれと物も聞食さず、日に隨ひて、御氣色あしうなりおはしませば、内裏にも、

朱雀「折しまれ、かよる頃しも惱み給ふなる事」と聞え給へば后宮、「何か。ことな

る事にもあらじ。暑氣などにや。さては、漫なることを思すにこそあらめ」など

聞え給ふ。これかたの藏人召して、御文賜ひて、東宮「これ、前々のやうにならば、

(三)

(四)

〔考異〕
(一)かくて…御文も侍るとして奉る一ナシ

(二)「心憂かるめれば」歟

(三)出動をとめられん

更にな参りそ。さふらはせじ」と仰せらるれば、痛うなけきて、持て参りて奉

る。かくて例の藏人参り。此頃御返事こと少に、御心ゆかぬやうにてあやし

きを、参りて御氣色賜はれとてなむ。御文も侍る」とて奉る。見給へば、

東宮たびく聞ゆれど、物も宣はせざめれば、いと覺束なくてなむ。人のあやし

がり騒ぐなむ聞きにくく、聞えじと思へども、然てのみは有るまじければ、

とて、

もろ共にありてぞ夜々も惜まれしかくてはなぞやつゆの命も

いでや小き人々數多あめれば、その御爲にこそ、命もさらぬ事も、いかで

かは。心憂からめれば、世に在らまほしくもあらず。

など有り。見給ひて、例の物も宣はず。藏人、「御返持て参らずば、簡削らむ」と

仰せられつるものを、御徳に、勞りなさせ給へ。とどめられ侍りなば、いと効な

く」など申す。孫王の君をはじめて、兵衛「あこきを顧みさせ給ふと思ほして、

〔語釋〕
〔一〕しきじにもしか、職事は藏人の中の事務にて殊に權力あるもの

〔三〕これはたけ乳母子なればとて宮が特に大事がり居る事故

〔四〕免官せば

〔五〕東宮の心

〔考異〕

〔一〕思はむさばかりー思はむと同じ様のことか、せ給へり藤壺さちば今日、はさもやと御心うるばかり御返事きこえじさばかり

〔六〕人々ー今は

〔七〕のほらすーのほらす

しるしばかり聞え給へ。これが徒らになりなば、いと悲しう」など集まりて申す。君、あて宮「御返聞えずとて、御使を罪し給はど、わが爲にぞあらむ。罪し給はずば悦と思はむ。さばかりだに仰せられたらば、これに勝りたらむしきにも申しなしてむ」と宣へば藏人、「いかゞし侍らむ。やがて参らずや侍るべき。参りてかよる由をや啓し侍るべき」上、あて宮「たど参りて、御返事も聞えず」と乳母たちして申させよ」と宣へば、泣くく参りて、然啓せさす。宮、これは、乳母子とて、いとらうたくするものぞ。これを解き棄てたらば、これが事言ひに、文はおこせてむ、と思ほして、勘事にすゑ給ひつ。かくて、日頃待ちおはしませど、殿の君だちの参り給ふに、是にやとおもほせど、御消息も聞え給はず。いみじう恐ろしき人の心かな。何により、斯く深く怨すらむ。人々まうのほらすとにやあらむ、と思し給ふ。残は次々にあるべしとぞ。

國讓(下)

梗

● 朱雀院の後宮、忠雅兼雅仲忠等を招きて梨壺腹の皇孫を東宮に立てんことを謀る。忠雅等之に與かる事を辭す。● 后宮、東宮に梨壺腹の皇孫を立てんことを勸む。東宮喜ばず。● 后宮更に兼雅を招きて事を謀る。● 后宮、立太子の事を帝に迫る。帝故らに決せず。● 后宮の怨。● 後宮、立太子の事を帝に迫る。帝故らに決せず。● 漏す。● 朱雀院讓位。今上の即位。女四宮(承香殿)季明の女(昭陽殿)忠雅の女(麗景殿)あて宮藤壺等女御になさる。● 后宮、忠雅を招く。● 來らず。● 後宮の姉妹等あて宮の祝に集まる。立太子の噂。● 忠雅が后腹の女三宮の望になるべき噂。虚々よりの祝の文。● 后宮使を以て忠雅を招く。忠雅脚氣と稱して行かず。后宮、忠雅の假病を悟る。● 忠雅歸りて六の君を招く。六の君歸らず。● 即位式。● 忠雅不参。正頼以下昇位。司召、季英以下昇進。● 六の君なほ歸らず。● 仲忠妻を齋戒す。● 朱雀院の氣樂なる生活。御子たちを招く。● 仲忠警戒して女一宮を参らせず。● 后宮、兼雅に文を贈りて立太子の事を迫る。● 世間の噂。正頼、あて宮の落膽。● 仲忠の女一宮に對する辯解。● 仲忠、水尾に仲頼を訪はんとす。● 仲忠、涼、藤英、行政、忠こそ等仲頼を訪ふ。● 仲頼の款待。● 菅紋。● 讀經。● 贈物。● 仲忠、仲頼の子どもを世話すべき事を約す。● 仲忠、朱雀院に参りて水尾の有様を奏す。● 仲頼、涼に贈られし米、綿などを妻の許に分つ。● 絶藤英時めく。● 妻の己に不満なるを論ず。● 立太子の期近づく。● 絶

- (一) 朱雀院の後
- (二) 忠雅、後の兄弟
- (三) 忠俊、清正、共に忠雅の子
- (四) 兼雅
- (五) 仲忠

(六) いざさらば仰せごと侍るにさふらはむと聞え給ふ。今さらば仰せごと承らむと聞え給ひて

●朱雀院の後宮、忠雅兼雅仲忠等を招きて梨壺腹の皇孫を東宮に立てんことを謀る。忠雅等之に與かる事を辭す

概

望せる正頼、立太子の當日、忠雅召さる。忠雅密書を正頼に贈る。あて宮腹の御子立太子の吉報。一家のさぶめき。兼雅仲忠等の態度。立太子の宣旨。東宮付職員任命。后宮仁壽殿女御の榮華を憐る。出家の望。六君夫の許に歸る。嵯峨大后の落膽。梨壺腹の御子、あて宮腹の第二の御子共に親王になさる。今上、あて宮の歸りを促す。仲忠、あて宮の御方に何候す。東宮参内の用意。あて宮、實忠にそて君を入内せしめん事を勸む。實正の賛成。東宮、あて宮参内。行列。仲頼の妻と其の母見物の中にまじりて行列を觀る。今上、あて宮并に其腹の皇子たちを寵愛せらる。登花殿懷胎。新年、菅原忠保修理頭に任せらる。滋野眞菅父子赦されて召還さる。女四宮皇子を産む。仲忠、母を訪ふ。女二宮の噂。正頼女二宮女四宮を自邸に迎ふ。祐澄近澄等女二宮を途中に奪はんとして成らざ。五宮、彈正宮に托して文を女二宮に贈る。女一宮難産。人々の周章。仲忠の悲痛。正頼の同情。男子を産む。女二宮の乳母が祐澄の頭を受けて、女一宮の御産の騒ぎに紛れて女二宮を盗まんとせし噂。嵯峨院の花の宴。今上、朱雀院以下参會。詩歌。仲忠講師をつとむ。嵯峨大后、今上の女四宮に厚からざるを怨む。

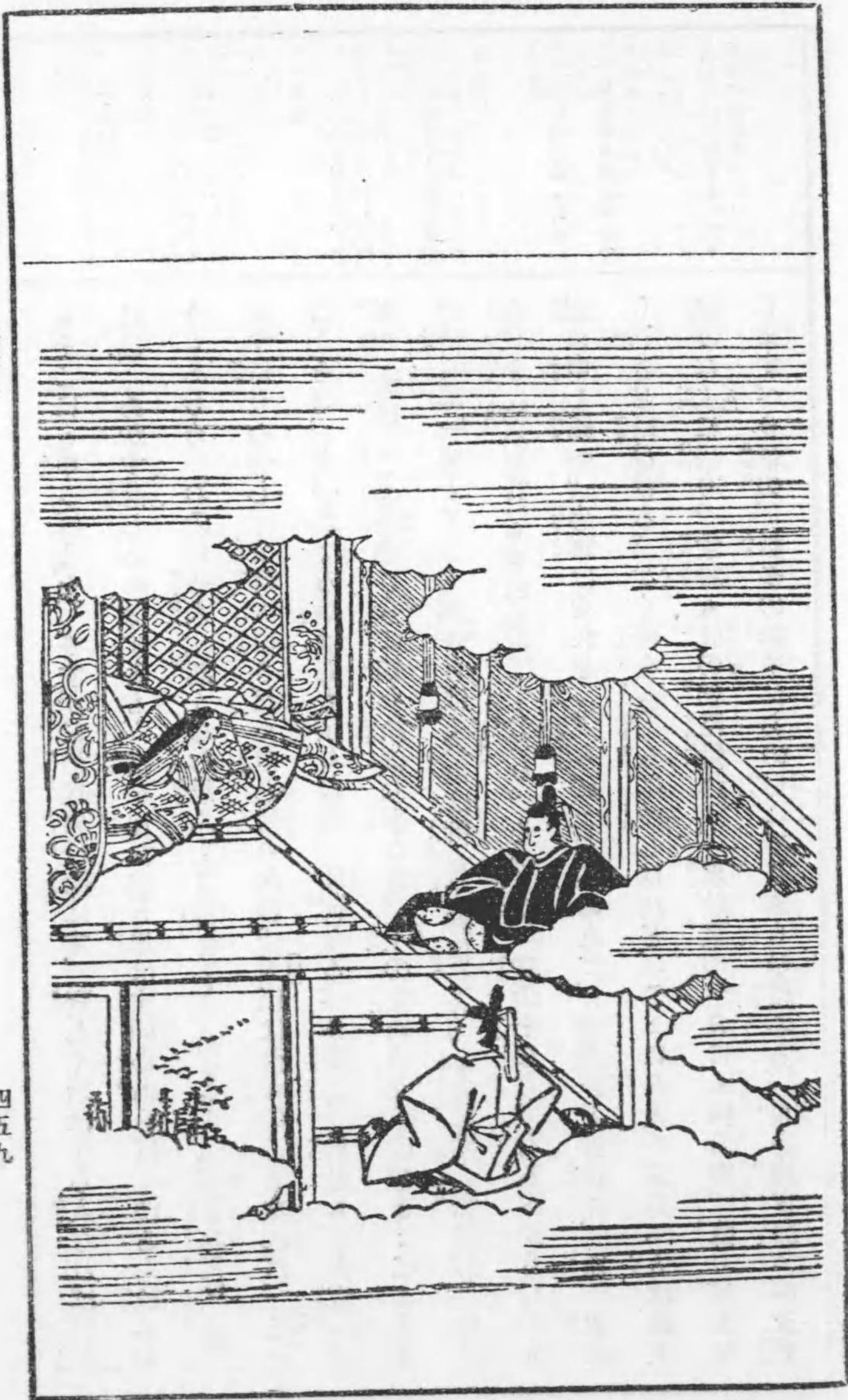
かくて中宮より、太政大臣に、その日の夜うさり、后聞ゆべき事なむある。大納言、宰相もろ共に忍びてものし給へ。切なること聞えむ」とて奉り給ふ。右の大殿にも、后大將もろ共にものし給へ」とあり。おとどたち、「畏まりて承りぬ。」

- (一) 帝
- (二) 百如の首班は其方なり
- (三) 正頼方は
- (四) 大臣は正頼のみ
- (五) 季明は薨去したり
- (六) 東宮に忠雅兼雅ら
- (七) 皇太子を生む人あ
- (八) 思ひしに
- (九) あて宮をいふ
- (一〇) あめれと歎
- (一一) 人みな一人をみな
- (一二) 斯くし來る一かくし
- (一三) やんごと一やうごと
- (一四) 臣の物し給はずなり
- (一五) ぬもとどに物し給へ
- (一六) すとるなる一心の
- (一七) なく二つなく

ざさらば、仰せごと侍るにさふらはむ」と聞え給ふ。その夜になりて、皆参り給へり。后の宮、御前の人みな立てさせ給ひて、請じ入れ奉り給ひて、太政大臣に聞えさせ給ふ。后消息に聞えしやうは、昔よりこの筋に斯くし來る事の今違ひて、行末まで絶えぬべき事聞えむとてなむ。御國讓の事、この月になりぬるを、宣ふやうは、「同じ日、東宮も定めさせむ」となむあめる。それを、己等もあるに、の上にては、そこにこそ物し給へ。又次々斯くやんごとなく物し給ふを、かの筋は、おほいまうちぎみのみこそは。大臣の物し給はずなりぬ。さてはみな下藤にてのみこそは。この筋にしつる事を、一世の源氏の女、后になり、その御子坊にするたる事は無かなるを、などかこれしも然るべき。宮に女をこれかれ奉り給ひし時は、この中にさりとともこそ思ひしか。年の越ゆるまでさる事のなきを、思ひ歎きし程にすゞるなる人出で来て、になく時めきて、子をたど生みに生めば、これにこそはあめれ。この筋の絶えぬべき事、くちをししく思ひつるを、此の梨壺

〔語釋〕
 (七) 後の御意見を帝に申上げられて帝が決定せられなばそれにて宜しかるべし
 (九) あて宮が退出し居れりとして
 (一〇) 東宮
 (一一) 梨壺腹の御子を東宮に立つると聞かれなば
 (一二) 梨壺腹の王子
 〔異考〕
 (一) 坊には「は」ナシ
 (二) 捨てて捨てつゝ
 (三) 恥とあるをば何事も一恥となる大いなる事を
 (四) とみに「とばかり
 (五) いかでか「いかでか申さむ」いかでか何をか申さむ
 (六) 時こそ「時にこそ
 (八) その御心に「みこのとみに

思ひの外に夢のごとし給へるに、斯かる折に、これを坊にはするむとなむ思ふ。女はよになき物にもあらず、此の御身のすぢを思ほし捨てて、來し方行くさき、又此筋の恥とあるをば、何事をもとどめ給へ」と聞え給へば、太政大臣、とみに物も宣はず、しばし思ほしたためらひて、忠雅、忠雅らは、ともかくもいかでか申さむ。臣下といふものは君の若くおはします、御心の疎におはします時こそ侍れ、斯く明王のことおはします世には、何事をかは定め申さむ。たゞ「その御心に(七)(八)かくなむと思す。如何」と聞え給はむに、御心にさだめさせ給ひて、これをおぼさば何の疑か侍らむ」中宮、「それは、然ばかり、此の頃里なりとてだに、戀ひ(九)悲しび、物もまゐらず、影のごとなり給はむ人は、まいてかけても聞き給ひなば、徒ら人になり給ひなむものを。他の國にも、大臣公卿定めてこそは、よろづの事をもしけれ。これかれ心を一つにて、この事を、斯くなむ有るべき。この筋のむけに無くばこそ、他筋のまじらめ。かく然るべき人を措きては、いかでか」と己等(一〇)(一一)



(語釋)
 (一)東宮は
 (四)兼雅
 (五)兼雅の意見によりて決すべき事なるべし
 (六)帝の
 (七)兼雅
 (九)正頼の味方なり、忠雅父子仲思いづれも正頼の縁者なるをいふ
 (二〇)我子仲忠が仁壽殿腹の女一宮を妻にし居れば
 (考異)
 (二)悲しと一悲しく
 (三)御心あらば一御心のあらば
 (八)かく一ナシ
 (一)仁壽殿もあて宮も正頼の娘なり

もそこにも申さばこそ、さすがに道理失ひ給はず、賢しくおはする人なれば、心には、あかず悲しとおほすとも、世を保たむと思ほす御心あらば、ゆるし給ふやうもあらめ。おのれ一人「斯うなむ思ふ」とは申さじ」おとど、忠雅「忠雅は、承らす侍りぬべし。公卿大臣さだめ申し侍りなむ。大臣は御女のことなれば、ことよにこそは、まづかよる事はしも依りなむ。如何なるべき事ぞ。男ども」と宣へば宰相大納言、忠雅清正「さらに知り給はぬ事なり。上の定めさせ給はむまよにこそ従ひ侍らめ」おとど、忠雅「さらば、大臣は御女又御孫なり。大將は下藤なれど、ゆく未只今、物のかためと侍り給ふ人なり。その妹、甥の上なり。有るべからむごと定め申し給へ。忠雅はそれを承らむ」右のおとど、兼雅「いとも尊く、斯く思ほし召させ給ひける。かく仰を承るは嬉しけれど、こよに五人さふらふ人は四人はみな犬に侍り。兼雅も此の朝臣侍れば、思ひ棄つべきにも待らず。降り居おはしますべき帝の、數多の御子たちの母にてさふらひ給ふも、世を継ぎ給ふべき君

(語釋)
 (一)あて宮腹の三皇子を正頼の預かれるをいふ
 (二)忠雅父子仲思らと正頼の女どもと
 (三)誤あらんか
 (四)忠雅等の生母、兼雅の先妻
 (五)仁壽殿の妹、正頼の六の君
 (七)八は七の誤なるべし
 (八)當に生れんとする子もあり
 (九)忠雅がつまらぬ女に關係したりとて
 (一)兼雅一本「さねまさし」づれにても解しがたし、宰相清正の妻は正頼の八の君也
 (二)女一宮の夫になれざるをいふ
 (四)犬宮
 (五)正頼が聞かば
 (考異)
 (六)給はず侍るなる一給はざなり
 (一〇)なくもてわび一なくもてわび
 (二三)子に一こよに一は

の二つなく思ほして三所の君も近うさふらひ給ふ、同じ人の女なり。この御中ども疎なるにもあらず。如何、命をかけ給へるやうなり。この太政大臣君この子ども母まかり隠れて後、この女御のはらから持たまひて、又一日一夜別の所をなむ知り給はず侍るなる。その母に、子四人侍るなり。又この大納言の朝臣は、その妹の八にあたるをなむ侍り侍るなり。それまた、子二人。又今日明日にて侍り。これ去年の今日、はかなき人に物言ひ觸れて侍りとして、まかり去りて親の許に侍りければ、この幼きを取り持てなむ、せむ方なくもて詫び給ひけるが、辛うじて此の頃なむ、あの父など言ひて、わたりて侍るなる。宰相の朝臣のも兼雅が姉の腹なり。それも子ども侍り。仲忠の朝臣、かの家に侍らねど、あるが中に君にしもてかしづき侍る人につきて侍り。子に、限なくかなしうする女子侍り。またも有るやう侍るなり。かくの如、手を組みたるやうにゆき交り、此の中にいさよか疎ならず、命をかぎりて侍るに、斯かることをなむ相定むると聞き侍りなば、

〔語釋〕
(一)正類は
(二)仲忠

〔考異〕
(二)その一ナシ

(三)めのこともも侍る
はなど一女御のこともら
侍るなど一めのことも
も侍はなど

(四)目か一日か一べき
か

(五)しつる一したる一し
をり

(七)朱雀院第三皇女

この女どもも取り離ちて、帝にもかれこれにも、又相見せ奉るべきにも侍ら
ず。いとよき人なれど、いと急に強き人になむ侍る。また然思はむ理になむ。
家の尊きことは、かやうの折の用意なり」と聞え給へば中宮、おほきに御聲出だ
し給ひて、后宮、その仁壽殿のめのこととも侍るはなど、すべてこのめのことも
は、如何なる目かつきたらむ、つきとつきぬる者は、みな吸ひ付きて、大なる事
の妨もしつる」と宣へば太政大臣、忠雅かの大將の朝臣の聞きはべるに、いと
不便なる仰なりや」と聞え給ふ。忠雅、忠雅らは、人にも侍らず。かの朝臣は、男
だに恥かしく侍るものを」とてうち笑ひ給へば、みな笑ひぬ。后宮、然ぞかし。女
なる己らだにこそ、筋の絶えむことは思へ。主たちは、何のなり給へればか、そ
の妻子の悲しとて、かゝる大なる事の妨をば、なさる。世の中に、女はなき
か。それに勝りたらむ人をも、おのれ奉らむ。近うは、己が一人もち奉りた
る女御子え給へ。然りとも、その女の子どもには劣らじ。いと斯く拙くな計らひ

〔語釋〕
(四)東京に

(五)「と」衍文なるべし

(六)東宮があて宮を籠せ
らるること

(九)あて宮腹第一の王子
(二〇)誤あらんか

〔考異〕

(二)なめれど一なめり

(二)ある一ナシ
(三)かこれば心おぞくな
む一かく心をとなへてな
む

(七)になく思したるとて
一ふたつなくおぼしたの
みて

八)さても一ナシ

(一)あなほうしくとく
なしつべかりき一あるほ
うくととなしつるつき

給ひそ」太政大臣、忠雅、なほこれは私事なり。なほ侍ることを斯うなむと申さ
るゝなめれど、子を思はぬ人なければ、ことの道理のある事なり。かゝれば心お
ぞくなむ、え申すまじく侍る。なほたゞ、啓するやうに、御子の君に、有るべき
様を、善からむ折、こしらへ聞え給へと。仰ごことにて許し給はゞ、この中の幸
にてこそ侍らめ」后の宮、「其處たちは、妻方をのみ思して、宮のになく思したる
とて宣ふにこそあめれ。よしや。我なほ世の中の事どもまかせて見居らむ」と宣
ふ。右のおとゞ、兼雅、さても、此坊がねの君をば、まだ御覽せぬにやあらむ。そ
の君は、もとより天地に承けられて、明王がねと生れ給へる人なり。彼をきしる
ひ思さば、いと悪しからむ。なほかゝる御おもてだてもみずと言はれ騒がれ侍り
つるに、かゝる事の侍るこそ、恥すこし免かれて思う給へられてぞあらむ。人に
きしるひて、徒らにならむと思ひ給へず。知るくのやうにても、え侍らすのみ
こそ」宮、后宮、あなほうしくとくなしつべかりき。男の端となりて、斯う物を言

語釋
 (一)誤あらんか
 (二)東宮とても
 (三)女ぐるひ
 (四)あて宮をいふ歟
 (五)あて宮が里にありし時
 (六)あて宮が里にありし時
 (七)呪ふ詞也
 (八)東宮
 (九)東宮
 (一〇)おはせずをはたあまがつかう思はずはをあまがへ
 (一一)侍りし侍る
 (一二)后宮、東宮に梨壺腹が皇孫を立てんことを勸む、東宮喜ばず。

はむよな。一人だに賢きものは。たゞ女の子どものやうにて」と腹立ち給ひて、その朝にも宮とても、妻まきぐるひをこそし給へ、いと憎けにはおはせず、をばたあまが女なれば、おもてはよけたるにこそあらがはざらむ。けに、氣色の恐ろしけに、人を殺すべからむは何ぞ」太政大臣、忠雅さ侍る人なり。更に凡人に侍らず。氣色ありさま、いと恐ろしき人に侍り。かの大将の朝臣こそいまだ若き男には侍れど、いとよく人見侍る人なり」大将、仲島うたて、遊のやうに申さるゝかな。なほ見侍るに、いとかしこく見え給ふ君也。かの侍る所に住み給ひし時は、近く侍りしことなり。いと恐ろしく侍りし」と聞え給へば后の宮、「さる者しもぞ、神佛はほしうし給ひしかな」と宣ふ。おとゝたち、「よき事に侍れど、えなむ此の中には定め侍らぬを、なほ申しつるやうに奏せさせ給へ」とて皆まかで給ひぬ。

かくて日頃ありて、宮に、后宮聞えさすべき事なむある。わたらせ給へ」とあれ

(一)語釋
 (二)御血族にて
 (三)あて宮に離れては
 (四)梨壺腹立太子の事あらばあて宮は再び宮中に歸るまじ
 (五)「よく共」は「いかでか」の誤か
 (六)忠雅らが妻の方の事を思ひての意歟
 (七)あて宮腹を立てんとするを歟
 (八)位なども一即位も
 (九)なほ一なせ

ば、渡らせ給へり。御物語など聞えさせ給ひて、后宮斯うくなむ思ふ。如何に有るべきことぞ」と聞え給へば宮、いと御氣色あしくて、青くなり赤くなり、物も聞え給はず。いと久しくありて、東宮昔より、誰も、親の仰せごとは、ともあれかうもあれ、否び聞えじと思ほえ侍れば、否び聞ゆべきには侍らず。この國ならず大なる國にも、國母、大臣ひとつ心にてこそ、事を謀りけれ。臣下ども、御脚末にて、やんごとなくともせらるめるを、相定めて、ともかくもせさせ給ふばかりになむ。こゝにはた、かの人離れては、いと便なく侍るに、かゝる事侍らば、參るべきにも侍らず。されば、かの人、幼き者もろ共に、生くとも死ぬとも、山林にも入りて侍るばかりにこそは。位なども、顧みむと思ふ人の爲にこそは。なほ俄にこれを徒らになしては、よく共侍るべき」とて涙をこぼして立ち給ひぬ。

宮、后宮聞えじと思ひつる事を、これらが女がたに思ひて、己等は知らず顔にて、然はせむといふを、かゝる中らひに離れたる人をば、入れ交せむが憎さに、宮に

- (一)「語釋」
- (二)「い」衍文歟
- (三)兼雅
- (四)東宮に
- (五)后宮更に兼雅を招きて事を謀る。

- (六)朱雀院に申上げて御讓位の日に太子を定められよ
- (七)其方は梨壺の父なれば無論此方の味方ならん
- (八)東宮が
- (九)「かのぞう」(族)に入りまじりて「歟」一本「人々かのぞ」を「人々の数」とかけり
- (一〇)「さばれい」さいはれむ
- (一一)様に「様」にとて
- (一二)「は」ナシ
- (一三)居給ひぬすなはちこの事をこそは「居たまひぬ」ともなほしほしくゆなりしとこそ

しかく申せば、かく宣ふなめり。大方はさばれい」など腹立ちておはす。

〔註〕詞 ころは後の宮。

かくて又後の宮、右の大殿に、后宮忍びて、直衣姿にて物し給へ。聞ゆべき事なむある」ときこえ給へば、その夜参り給へり。宮對面し給うて、后宮に、かのありしこと聞えしかば、「ともかうも、あるべからむ様に。此處にはいかでか」と有りしかど、氣色なむよくも見えざりし。それ思ふやうは、上に聞えて、同じ日定めさせ給ひて。たゞ太政大臣の御心なり。そこには彼方此方により給はんやは。位に居給ひぬすなはちこの事をこそは思さめ。王昭君を胡の國へやり、楊貴妃を殺させ給へる帝なくやはありける。太政大臣は、女を思ひ給へれば、それにつみ給へるにこそあれ。すべき様ならずと思ふを。さる心し給へれとなむ」おとと、兼雅ともかうも、御心と定めさせ給はむになむ。ころには、みなく人々かのそに入りまじりて侍れば、心一つによろづ思ひ給ふとも、力なう侍るべけれ

- (一)「語釋」
- (二)女一の關係上正類に當すべき筈なる上又特にあて宮に心を寄せ居る譯もあれば梨壺方に變せしむること叶ふまじ
- (三)「ならむ」は「ならば」歟
- (四)司日に決定したしと思ふ譯は
- (五)梨壺腹に皇孫のある上は
- (六)女四宮
- (七)「ものならば」歟
- (八)后宮、立太子の事を帝に迫る。帝故らに決せず后宮の怨。
- (九)「考異」
- (一〇)侍るめれば「ば」べめれば
- (一一)よにも「も」ナシ
- (一二)宣はむ「せ」せ給はむ
- (一三)やは「は」ナシ
- (一四)給へるがそれし給へるなりそれしも

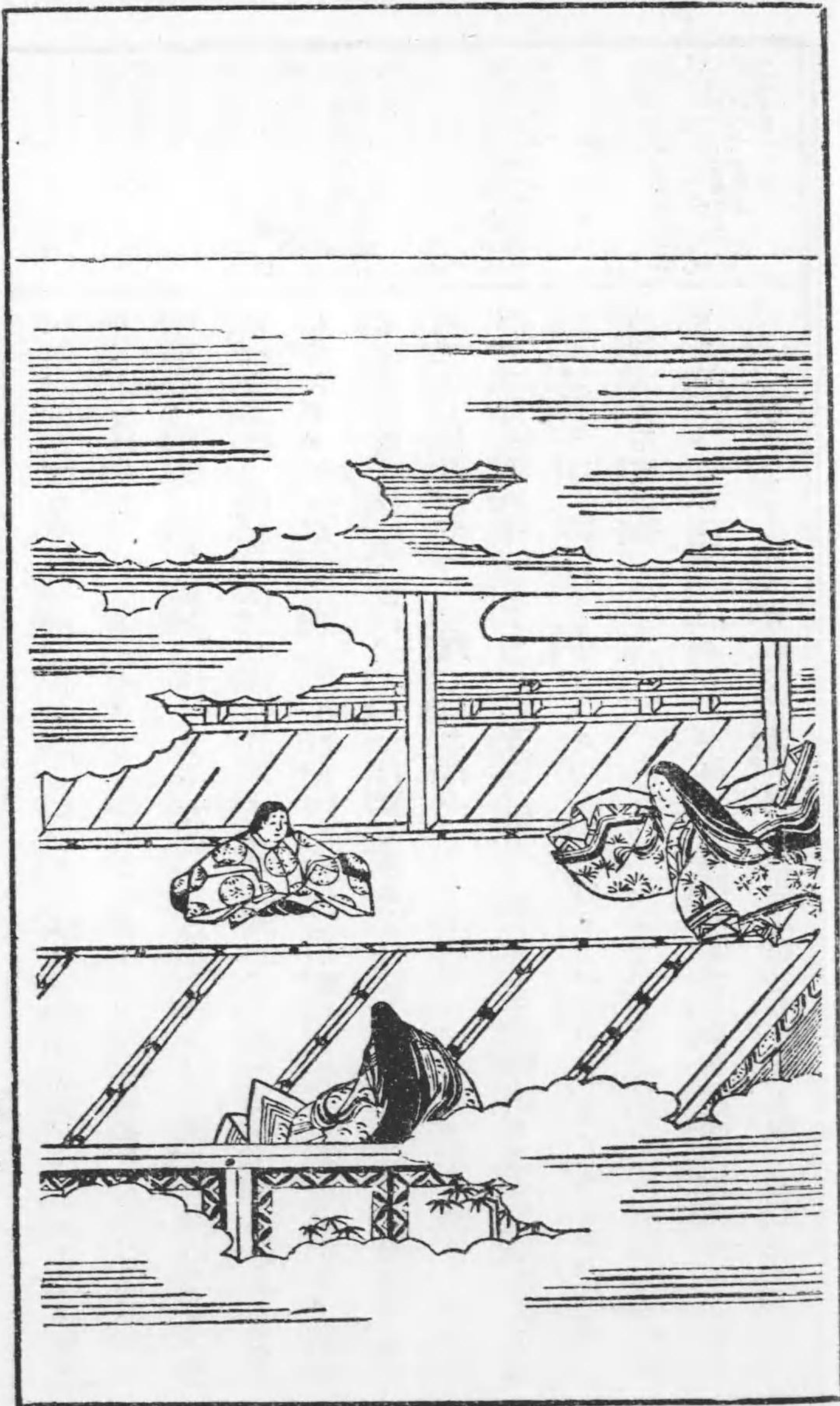
ば、思ひかけぬなり。たゞ仰せごとになむ。萬の事、仲忠の朝臣に語らひて侍るを、大方の心よせよりも、また思ひ侍るめる筋侍るめれば、よにも動じ侍らじ」宮、后宮いと不孝の子こそ、然こそあなれ。然不孝ならむものをば、子ともな見給ひそかし。さもあらばあれ、それ等は一つ心ならずともありなむ。たゞ一の上だに一つ心ならむ」と宣へば、兼雅承りぬ。たゞ宣はむになむ」とてまかで給ひぬ。

かゝる程に、上わたらせ給ひたるに、后宮國讓は、實にいつ程にか侍らむ」上、朱雀「この十餘日ばかりになむ」后宮坊も同じ日にやは定めさせ給はぬ」上、朱雀何か、然あらずとも。騒がしきやうなり。長閑にもありなむ」宮、后宮、その由は、かうく思ふことなむある。その人無かりし時こそ、あるに隨ひてと思ひしか。かゝる人ありとならば、同じくばその腹のをとなむ」上、思ほすやう、宮孕み給へるが、それし男ならば、これをもや、とこそ思ひ聞え給はめ。然あらぬものから、

- (一) 正頼
- (二) 帝の外戚になりえぬ事を怒りて
- (三) 仁壽殿
- (四) 不幸歟、仁壽殿が帝を嫌ひ奉りての意歟
- (七) 帝が
- (八) 仁壽殿をいふ
- (一〇) 仁壽殿へ
- (一一) 東宮

左のおほいまうち君の思はむ事あり。そこばくの御子の祖父にて、かくあること
 思ひて、女御をもまかでさせ給ひて参らせずば如何せむ、と思ほして、朱雀何か。
 只今ならでも有りなむ。自ら位にあり定まりて、親とあらむ人の心よろしからむ
 やうに定められむ。然しも思はざらむ人を子にしたらば、あぢきなくさかしらを
 も。恥かしき人にさも覺えじや」と宣へば、后宮この仁壽殿の盗人により、宣ふ
 ぞかし。ふけうし奉りて、籠り居りて、戀ひ悲しび、待ち居て、青蠅のあらむ様に
 立ち去りもせでおはすれば、如何に恐ろしく思さるらん。さる人のゆかりをこ
 そ思すらめ」上、うち笑はせ給ひて、朱雀何か、然までも思すや。めづらしき人な
 らばこそ。神さびにたる子どもの母をば何か。十の君の、まだ見ざりつるが有り
 ければ、それ見にこそ時々わたれ。さて宣ふやうは、彼處に、しづかになりなむ
 時、あるべき様に語らひ給へ。便あるべからむことを宣はせむには、よも否びら
 れじ。やんごとなき人の、みな御脚末にてあんめるを、わいても思ふ人の類と宣

(二二)



〔語釋〕
 (一)兼雅
 (二)仲忠
 (三)正頼
 (五)正頼が不平を起して頼どもを引取りたらば
 (七)帝位を我獨りのものと見よとていつ迄も歸らぬのか

〔考異〕
 (四)才もあり心もいとかしこく重し才あり心もいとかしこくをかし
 (六)給ひて一給ふ
 (八)をば一をも

〔語釋〕
 (一)我が生みの御子の太子に立たぬを怨みたる也
 (二)新帝が
 (四)昭陽殿

〔語釋〕
 (一)我が生みの御子の太子に立たぬを怨みたる也
 (二)新帝が
 (四)昭陽殿

〔考異〕
 (二)うとければ一ことなれば一ことなれど
 (六)宮の一のナシ
 (七)なりて一にてナシ

へど、世をば左大臣、仲忠の朝臣となむ政つべき。太政大臣、いとよき人なれども、才なむなき。才なき人は、世のかためとするになむ悪しき。右のおほいまいち君は、有様、心もかしこけれども、女に心入れて、好いたる所なむついたる。然るべき人は、頼もしけなくなむある。この二人は、大將の朝臣は更にいふべきにもあらず。今一人も、才もあり心もいとかしこく重し。その人臥し籠りて、女ともとり持ちて惑はさむに、人々なむ騒ぐ事あらむ。よし見給へ」と聞え給へば、后宮よし聞えじや」など怨じ聞え給ふ。

かくて御國讓明日になるまで、藤壺、藏人の事も申させ給はず。宮、斯うながらあらば、徒らになりなむと思して、その日勘事ゆるさせ給ひて、さて夜うさりつ方、他藏人して聞え給ふ。

東宮日頃は、ことに参り給ふやとのみ。年頃契り聞えし事を、違へ給ふめるこそ。もろともに思ひそめてし紫の雲の原をばひとり見よとや

と聞え給へれば、たゞ斯くなむ、
 あて宮ながきよを見るべき人はうとければ餘所にのみきく雲の原をば
 と聞え給へれば、この後の宮宣ひし事によりてなりけりと思ほして、あな幼や、天下に言ふらむと思す。

十一日に、御國讓り給ひて、帝は朱雀院に出で給ふ。仁壽殿の女御、御供仕うまつり給ふ。後の宮は、内裏におはしませど、藤壺のもろ共に見給はぬを、夜書思ほし歎きて、更に人もまうのぼらせ給はず。こと君たちは、みな参り集ひ給へり。しばしありて女御なし給ふ。唯今しも、なし給ふまじけれども、藤壺を参らせ給はむとおぼして、急ぎなさせ給ふ。四の宮ひき越えて、故太政大臣殿の、一の女御、今の大政大臣のと、藤壺とを二の女御となし給はむとする時に、後の宮の聞え給ふ、后宮、いかでか、梨壺をばなし給はぬ。さかしき世ならば、これも王の親ともなりて、高き位にもなるべき人なり。かく亂るゝ折なれば、かくいふにこそあ

- (一) 昭陽殿
- (二) 昭陽殿
- (三) 昭陽殿
- (四) 昭陽殿を女御にして
- (五) 季明の女
- (六) 忠雅の女は

- (一) あらざらめ—あらめ
- (二) あらめ—ナシ
- (三) あらめ—ナシ
- (四) このさがなものは—このときなしのさがなものは
- (五) 鞆—うしぐるま
- (六) 鞆—うしぐるま
- (七) 鞆—うしぐるま
- (八) 給へり—給ふとぞ

なれ。必ずなし給へ」と聞え給へば帝、今上二人は、太政大臣の女なり。これは下藤にこそあらざらめ。相次いでこそはあらめ。これをしてはいかでか」と聞え給へば後の宮、「このさがなものをななし給ひそかし」と聞え給へば、今上いかでか。これこそ、ある中の上藤なれ。公に、世をしづめ、久しう仕うまつりたる人の女なり。そのうちに、いと便なく心細き人にこそ。こゝにだに顧みずは如何せむ。なほなして、鞆を梨壺に許さむ」と申し給へば後の宮、「さも、とさまかうざまに、申す事を聞召さぬかな」と聞え給へど、皆し給ひて、梨壺には鞆をゆるし給へり。かくて、四の宮は、承香殿に、故大臣殿の昭陽殿、今のは麗景殿、左の大殿のはやがて藤壺、式部卿宮のは登華殿、右の大殿のは梨壺、平中納言殿の君官耀殿にすませ給ふ。御名も皆しか申す。登華殿は女御になり給はず。父宮よりはじめ奉りて、かゝる恥を見る事と思し嘆きてまゐり給はず。昭陽殿は、服にて里に久しく居給ひてまゐのぼらせ給はず。

畫詞

こゝは御國讓の所

- (一) 后宮、忠雅を招く。來らず。
- (二) 后宮の心
- (三) 朱雀院
- (四) 忠雅をわが腹の皇女の聲にして事を謀らんと巧める也
- (五) 后腹の皇女三宮

かくて后の宮の思すやう、同じ日、坊をすゑずなりぬれば、今はしにくかりぬべき事、一の人の心だに一つになしてば、子ども親に従はざらむやは、と思して、彼岸の程によき日を取りて、さるべき事おぼし設けて、太政大臣に忍びてものせむ、院きこしめしても、悪しうも宣はじ、右大將をだに、よき鞆にし給へば、これも、年もまだ若う、かたちも心も目やすく、世の一の人にもあれば、など思ほして、太政大臣に、后宮、聞ゆべき事なむある。今宵、こゝに忍びてものし給へ」とあり。おとど怪しく、かゝる事によき日といふなる日しも、斯うく宣へれば、坊定のことにやあらむ、煩はし、と思して、兼雅、畏まりて承りさふらひぬ。さふらふべき由仰せられたるをば、日頃、勞る所侍りて、院にも内裏にも参り侍らぬ。いま今日明日過して、ためらひて参り侍らむ」と聞え給へば宮くち惜しう、いかでかこれ呼び取らむ。天下に思ふ人持たりとも、わが御子を見奉らむ人は、

〔語釋〕
(一) 忠雅が

〔考異〕
〔六〕年頃は「は」ナシ
〔七〕内裏へも「湯水も」
〔九〕后宮から召すめりき
や「后宮より召すめりき」
〔一〇〕と問ひ申せど「と
は申せど」

〔考異〕
〔六〕年頃は「は」ナシ
〔七〕内裏へも「湯水も」
〔九〕后宮から召すめりき
や「后宮より召すめりき」
〔一〇〕と問ひ申せど「と
は申せど」

〔考異〕
〔六〕年頃は「は」ナシ
〔七〕内裏へも「湯水も」
〔九〕后宮から召すめりき
や「后宮より召すめりき」
〔一〇〕と問ひ申せど「と
は申せど」

疎にはあらず、と御心一つに、人には言はで思ほす。たびく聞え給へど、参り給はず。

かくて、藤壺の御方に、よろこび聞え給ふとて、これかれわたり給へり。大宮も民部卿の宮の御方も、おほきおとど、兵部卿の宮、民部卿殿の北の方も渡り給へり。「必ず、何かはと思へる事なれど、あやしく妨げられつるやうに聞え侍るを、かくてだに」と宣へば、「年頃は、かしの國讓の事によりて、思ひ歎き、心損ひたるやうにて、内裏へも参らず、ものし給ふこそいと見苦しけれ。子持たるも苦しけなるものにこそ」大宮、「いでや、こゝにも、この御事を、とさまかうさまに思はば、おぼろげにやは。ほとく斯くもえ有るまじきにこそは聞えつれ。又いかなる恥をも見むとすらむとぞ、彼處にも思ひ歎かるめれ」おほき大い殿、六君、その事、いと騒がしかりなむや。一日も、后宮から召すめりきや。度々になりぬれど、煩はしとて参り給はずなりにし氣色を、「それはかやうの筋なるべし」と問ひ申せ

〔語釋〕
(一) 忠雅をのみ力にして居る

(二) 忠雅は

(四) 忠雅は

(八) 后宮より

〔考異〕
(三) 世にもかく「とにもかく」

(五) とや「となり」

(六) 見まほしうて「て」ナシ

(七) つる「つるは」

(九) 思したなる「な」ナシ

ど、更に宣はせねど、著くなむ」大宮、「方々、とさまかうさまにたばかり給ふめり。たゞ此處には、おとどをのみ頼み聞えたる。さりととも、一つ心になり給はずばとこそ思へ」北の方、六君、かしこには、世にもかく思し騒ぐが苦しき事、とこそ思はれためれ」大宮、「いさや、いとあやしき事をぞ人言ひつるや。眞にやあらむ、おとどを、あるやんことなき所に取り籠めらるべしとや。それこそ、いと恐ろしきとばかりなれ」北の方、六君、何處に、如何聞召しつるぞや」大宮、「后の宮の姫宮にとかや」北の方、胸つぶれて、六君、あな心憂や。さも知らずかし。こゝにはさる氣色もなきは、隠さるゝにやあらむ。幼きものどもあまた侍るに、またも見まほしうて侍るに、さる名だたるめたくおはする所に取り籠められなば、顧みもせじ。如何様にせむ」と氣色悪しうて聞えたまへば、大宮、いさや。さぞ言ふなりつる。たしかなる事にやあらむ」北の方、六君、彼處よりたびく「忍びて」とぞあるや」宮、「朱雀院は、一の宮より勝るはなしとぞ思したなる。それは、小くよ

- (一) 語釋
- (二) 后腹の女三宮
- (三) 忠雅が
- (四) 女三宮を后宮から申込あらば
- (五) 女三宮の乳母
- (六) 實忠
- (七) 實忠の舊妻
- (八) 三の君が居るとて
- (九) 舊妻に對して
- (一〇) あて宮を尋ねると

り思しつきたればにこそ。かの宮、さらに劣り給はざる。まだかたなりにて、いとをかしけにおはすなり。今すこしねび給はゞ、いとようなり給ふべき人にこそ。北の方、六君「二の宮、思ふやうにおはすなり。いかで見奉る物にもがな。大將こそ羨ましく目ざましけれ」と時々宣ふを、此の宮さやうに聞え給へば、よもあしと思はじや」民部卿殿の、三君「こゝにも、あの乳母のいふとて、言ひしろひなどせられたりけり。それは、たゞ此の事により、萬の事をすとしてたばかるなめり」など女御の君と御物語し給ふ。三君「新中納言の御事は昨夜きこしめしたりや。いとこそをかしかりけれ。かの三條に、昔の人を迎へおきて、然も知らせで、己が侍るぞ」とて率てまかりたりければ、そで君の、あらぬものに生ひなりてあむなるを、己と見なしたりけるは、いとこそ怪しかりけれ。されど己が方をなむ、いと疎く、心にもあらぬやうにて物せられける。小野へとてかへり給ひけるを、一日なむ、此處にもものせむとておはしたなるが、かの北の方こそ、いとよき人な

- (一) 語釋
- (二) 實正は
- (三) 實正にそで君母子が親しむとなり
- (四) 實忠が妻と別居したるを
- (五) 同居を我が勧めたり
- (六) 仁壽殿
- (七) あて宮の女御になりたる事
- (八) 立太子の事
- (九) 考異
- (一〇) たり一ナシ
- (一一) いと奉らせまほしきをいとと奉らまほしきを

れ。彼處には、いとめでたきものにこそせらるなれ。中納言をば、いと疎きものにして、いらへも昔は聲も聞えざりける人に、今は親同胞の如して、親も子もさしむかひてあるとこそいふめる」女御の君、あて宮「年頃、いとあやしくて、所々にもものせられたりつれば、かの中納言對面して、なほ斯くてをこそ物せしか。かのそで君の、よく生ひなり給へるを、いかで内裏に參らせてしがな。睦まじき人のいと奉らせまほしきを」北の方、三君「さなむ思ふとあらば、いとよく奉られなむ。今、この序あらば、彼處にもものし侍らむ」と聞え給ふ。朱雀院の女御の御もとより、仁壽必ず有るべきことと思ふ給へしかど、うたてきしろふ人がちなりけるを、かく物し給ふをなむ。今一つの事を、内裏の御用意にこそは。と聞え給へり。御返、あて宮「承りぬ。宣はせたる事は、もし參ることあらば、徒走の苦しかりしをの

〔話釋〕
(一) 忠俊の妻、七の君

(二) 妻が病氣にて

(三) 女御になりたるにつきて尚侍典侍などに下され物などの御用あらば承はらん

〔考異〕
(二) 給はねば―給はねど

(三) 参りても―参りまうてて

(六) やうにて―やうにては

みなむ。さて物たばかりは、そがいと様々なるを、あぢきなく、人の御爲にさへあべかなるをぞ思ひ嘆く。

と聞え給ふ。藤大納言殿の北の方は、たちぬる月の晦にこそ子産み給へる。まださはだち給はねば、御使して聞え給ふ。源中納言殿より、

涼参りても聞えさすべけれども、こゝに日頃惱まるゝに、見給へ譲る人もなくてなむ。いと嬉しく、いつしかと待ち聞えし様におはしますなるを、内侍のかんの殿たちなどには、物や遣はすべき。さらば宣はせよ。こゝにものし侍らむ。

と聞え給へり。御返事、

あて宮承りぬ。なやみ給ふは、如何様なるにか。さらに承らざりけり。まち給ひける事は、時過ぎたるやうにて。乳母たちは、いさや然する物にやあらむ。今されば聞えむ。

と聞え給ふ。一の宮より、

女一日頃あさましく、頭ももたけられずありて、え聞えざりつる程に、思ふにもしるき御喜あなるをなむ。これはさるものにて、かの事をなむ念じ聞ゆる。こゝにあめるものは、「怪しき事あなるを、更に知り侍らぬを、もし誰も誰も思ほしや疎むらむ」とぞ、いとほしがり聞ゆる。

とぞ聞え給へる。御返、

あて宮日頃はなやませ給ふなるに、自ら参るべけれど、え然も侍らぬをなむ。思ほしけることは、いでや、この頃の花櫻ばかりにこそ思ふ給へらるゝ。宣はせたる人の御消息は、さる御心のなからむこそ、僻みたる様には。かく宣はせたるをなむ頼もしうは。

と聞え給ふ。

左大辨殿の北の方、かくて後は思ほし倦じて、親同胞にも聞え給はず、夜書おぼ

(七) 太政大臣殿の北方の誤なるべし忠雅が后宮の聲になる噂をきこて六君が憤りたる也

(六) 御心なからむこそ御心ならむこそ

(一) ありて―ナシ

(二) 后宮に驚する心のなきは寧ろ不自然なり

(四) 仲忠の御傳言は

(三) 仲忠は后宮の隠謀には我は無關係なれど若其に與したる様に思はれはせぬかと心配し居る

(二) 立太子の事

〔語釋〕

- (一) 詔釋
- (二) 忠雅歎
- (三) 十一の君
- (六) 忠雅に

(考異) (一) 經給へば一ナシ

(四) どもは「は」ナシ

(五) 斯う遙げには一斯うは遙けては

(七) かしこに「かしこの

し嘆きて泣き給ひつゝ、よき事もあしき事も知らぬやうにて給へば、え聞え給はず。おとゞは、この君をぞ私物にて、らうたくし給へど、心もゆかずのみおはす。兵部卿の宮の外住し給うて後、まだ藤壺に對面し給はざりつれば、あて宮年頃の御物語聞え給へ」とて切にとゞめ聞え給へば、またわたり給はず。かくて御方々も、大宮、男君たちもみなおはす。御装束どもは、あはせ一かさね、御小桂ども、さまざまにいと清らなり。

夜うさりになりて、太政大臣殿より、御迎たてまつり給へれど、六君「今宵はこゝになむ」と聞え給へばおとゞ、例ならずあやしと思して、おはしたり。北の方、六君いと狭うて、これかれ物し給へば、さらに對面すべき所もなし。歸らせ給ひね。今一日二日ばかりありて、其方にを」と聞え給へば、おとゞ、忠雅「あやしう、例ならず宣へば、聞きならはぬ心地なむ、驚きながらなむ。など斯う遙げけには宣へる。たゞ此處もとに出で給へ」と聞え給ふ。大宮、「なほ對面し給へ。かしこ

- (詔釋)
- (一) 忠雅袖直師登
- (二) 大宮腹
- (三) おはすかゝる程に「たるべし
- (四) 女三宮
- (六) 忠雅方へ
- (七) 忠雅が病氣屈をして
- (九) 后宮の心
- (一〇) 兼雅をさがせし時の事俊隆巻にあり
- (一一) 忠雅
- (一二) 權のかみをいふ「ては衍文なるべし

- (考異)
- (五) 如くに「に」ナシ
- (八) しつこして

に御過やある」と聞え給へば、六君かゝる事のありけるを、知らせざりけるが憎ければぞや。あぢきなや」と聞え給ふ。篋子に御座まるりて、左衛門督の君、宰相中將、左大辨などはべり給ひて、おはしますべき所に、これかれものせらるべければ、とてする奉れり。御前に、此方の御腹の君たち、皆おはするほどに、後の宮は、この事をいかでと思して、姫君を玉の如くにつくろひ磨き奉り給ふべし。天上の吉祥天女を持たるもの夷なりとも、わが宮をば、と思しつゝ、たびたび御消息を聞え給へど、かく病申をのみしつゝ参り給はぬを、我まことの天地に承けられたる、國の親ならば、しはづさじとおぼして、昔若小君をもとめし中將の、母北方の兄、宰相になりて若くて亡せにける子の小かりけるを、取りて養はせ給ひける、今は宮の權のかみになして、いとやんごとなきものに、給ふ人、いとかしこう萬正しう、おほやけ人なり、おほき大殿もおなじ御親族にて、馴れ仕まつる人にて、御文をかきて取らすとて、宣ふやう、后宮「これ、人に持たせて、

〔語釋〕
(三)權のかみ也

(四)忠雅が

(五)「くだし」は御下命の
意か、一本「てたし」

〔考異〕
(一)給ふとあるは「給ふ
とてあるは

(二)承りて「給はりて

懐に入れて、太政大臣の御許にもて行きて、人傳ならで、御手にたしかに奉
れ。悩み給ふとあるは、まことか空言か、たしかに案内して言へ」と宣ふ。かし
こまり承りて持て参るに、この南の御門に、大殿の御車、御前など、北に立てり。
こまにおはするなるべし、と思ひて、下りて入り見れば、おとどこれかれおはす。
宮の亮、消息申させて、たゞまうでにまうでて、御階のもとに侍るを、疾く見つ
け給ひて、何事ならむ、これに見えぬ事、煩ふ由申したるものを、と思して物
も宣はず。御簾のうちに集まりて、立ちさわぎ給ふ。左衛門督の君、忠澄宮の大
夫の朝臣侍り」と申し給へば、忠雅何事によりてぞ」と問はせ給ふ。忠澄宮の御使
にさふらひつるなり。「これ、まのあたりにて参らせよ」と侍りつるくだしの侍り
つれば」とて懐より、陸奥紙にてある文を、藏人の少將の君して奉らす。御
簾の内には、「さればよ」とて集まりてまどひ給ふ。北の方は、青草の色になりて、
六君今宵呼びもて去なむするにこそあめれ」と涙をながして伏し轉び給ふ。他人

〔語釋〕
(一)世になき父母が

(三)君に

(五)聖取の事

(六)妻が

〔考異〕
(二)人々の一人々一人々

(四)誰にかはしはしナシ

人はいとほしと思す。おとどは、胸つぶれて、開けて見給へば、
后宮切なる事ありて、度々ものし給へと聞ゆれど、「悩ましけにて」とのみあるを、
然しもおはせぬ様に承るは、おこたり給ひけるにや。たゞあからさまに、
立ちながら物し給へ。斯う数にもあらず、人侮られなる身にはあれども、昔
の人々の、世にあらむ限は、思し寄らむこと聞え合せてあれ」とこそ宣ひし
か。萬の憂はしからむことをも、誰にかは聞えむとてこそ。必ず。
と書き給へり。見給ひて、夢にもこの事とは思さず、この東宮定の事にこそあら
め、斯う御消息などあるに、思ほし疎みて、いとど相見え給はじ、と思していと
ほしく思ほす。内には、かよる事を知り給へれば、限ぞと思ほして、北の方はう
つぶし臥して泣き給ふ。おとど、
仲雅畏まりて承りぬ。日頃は、みだり脚氣にや侍らむ、更に踏み立てられ侍ら
ず、立ち動もし侍らぬを、年頃あひかへりみ侍りつる者の、親の許にまうでき

(語釋)
(一)いかで御力にならん
とのみ思ひ居れり

(五)忠雅は

(六)忠雅

(考異)
(二)して一ナシ

(三)給ひつる一給へる

(四)委しうは「は」ナシ

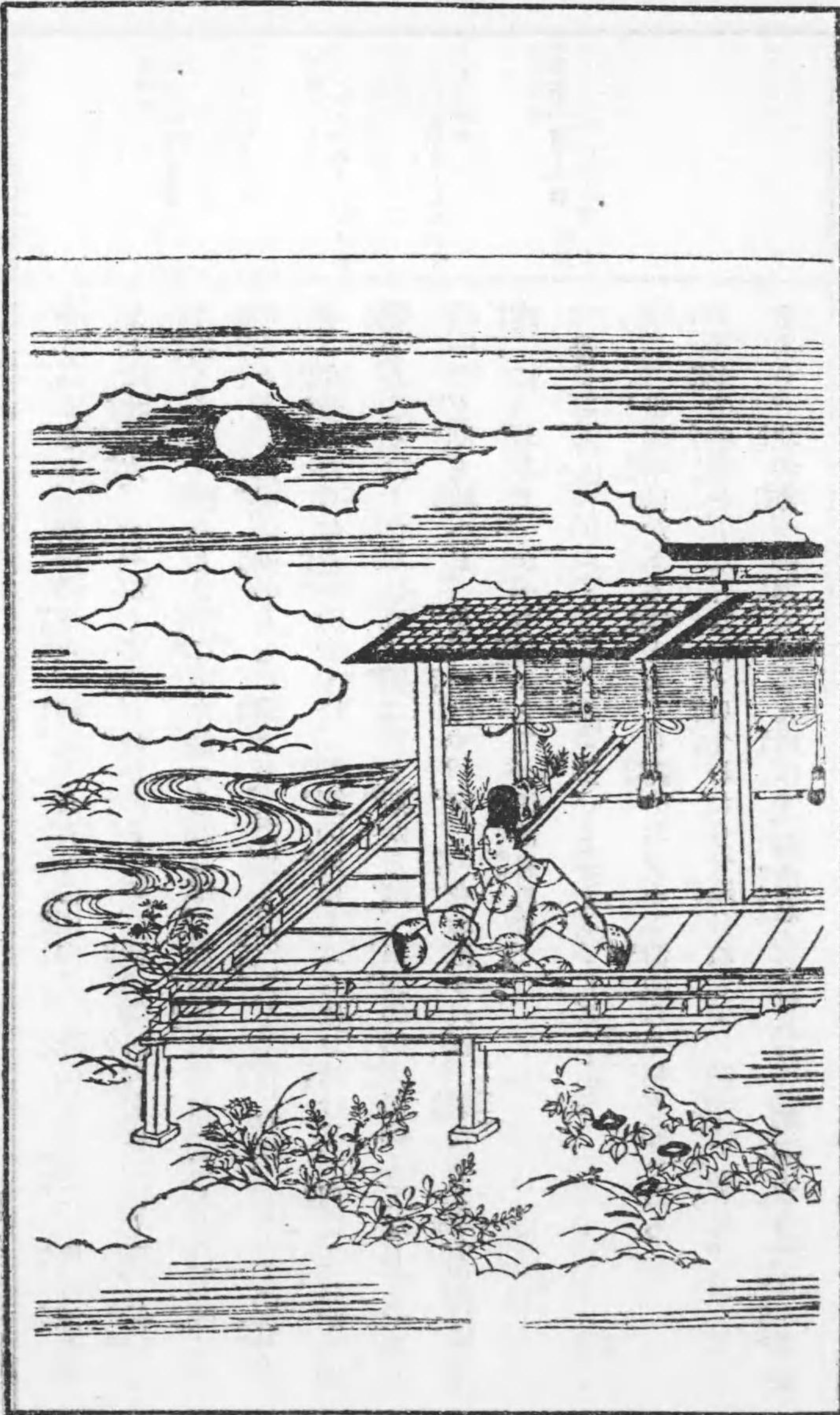
Ⓣ思雅歸りて六君を招く
六君歸らず。

て、「俄にわづらひ侍りて、いと怪しくなむ」と告げまうで来つれば、「空しくもこそなり侍れ。見給へざらむやは」とて、みだり車ながらまかり下りてなむ。昔の事どもは、何か仰せらるよ。萬の事、いかでとのみこそ。少しも踏立てられ侍らばまゐり侍らむ。

とておし包みて奉り給ひつ。

宮の亮が御許へ参りて奉るを御覽じて、后宮「いづくに如何様にて逢ひつる」と問はせ給へば、亮「左大臣の家の藤壺の女御のものし給ふ方に、公卿たち數多、これかれしてなむものし給ひつる」宮、后宮「心地病むとあるは、然あるにや」亮「委しうは見え奉らず。車は門の外に立ちて侍りつ。簀子にことなる事もなけにて」など聞ゆれば、宮、后宮「なほ聴かじと思ふなめり。負けじ。脚病むといふは、輦の宣旨を申しくださむ」など宣ふ。

おとどなほ簀子におはす。夜の更け行くまよに、八月十七日ばかりの月のやう



(語釋)
(一)正頼の子息等

(考異)
(一)ちとマの「の」ナシ

(三)しなまやしなりや
しなまや

(四)日一日一日

やう高くなり、御前の遣水、前裁さまぐくに面白く、蟲の音も哀に、風も涼しきまよに北の方、大尋かくて後、我が心とこそ、親の御許などにおはして、餘所なる折もあれ、恐ろしき所に取り籠められなば、如何様にせむ」などおほし嘆く。他人々も、母屋の隅のもとに集まり、おはする所のいと近ければ、おとどの宣ふ、思雅「今参りたらむ童へのやうに、御簾の外にさふらはせ給ひて、内にこれかれ御覽するこそはしたなけれ。例ならず斯かるは、内裏の御方の御もてなしにやあらむ」など聞え給へど、出で給はず。夜、一夜おはすれば、君たちえ立ち給はず。曉に、おとど、かへり給ふとて、御消息あり。

思雅よろづ怪しくならはぬ心地こそ、よきものよしなまや。

世の中はかよる物ともしら露のおきるて消ゆる今朝ぞ知りぬる

老の學問を、などなむ。只今わたらせ給ひねとて、御迎に奉る。

とあり。北の方、御返もきこえ給はず、御消息もなければ、御迎の人は、日一日立

(四)

即位式。思雅不参。正頼以下昇位。司召。季英以下昇進。

(語釋)
(一)今上の

(二)あて宮をさす

ちくらしして、歸り参りて、「ともかくも仰せられず」と申せば、怪しと思す。この御腹の君たち四所、十一なるを兄にて、四つ五つなるおはす。七つにおはする女君ぞ、父母いみじうかなしうし給ふ。女はそれが限り。

かよる程に、御即位二十三日あるべしとのよしる。帝は、かよる事を何とも思さ

で、たど藤壺のるまり給はぬを、夜晝おほし嘆けど、御使も久しう奉り給はず、

後の宮の聞え給ひし事をのみ御心憂しとおほしつゝ、御徒然とながめおはしませ

ば、御乳母たち、命婦、藏人などは、「かよる物の初に、おもしろく興ある事をこそ。

かく物をのみ思ほし嘆き、日々に御かたちの衰へおはしますこと」など言ふ。

かくて御即位になりぬ。上達部みな参り給ふに、太政大臣、暇文出だして参り給

はず。御心もゆかず、萬の事、もろ共に、と思しよ人に見せぬ事、と思せど、これ

かれそよのかし聞え給へば、出で給ひぬ。例のことなりぬれば、上達部、陣にて

宣ふ、「太政大臣の、かよる大事に参り給はぬかな。暇文出だし給へれど、ことに

(語釋)

(二)兼雅仲忠

(三)后宮の隠謀

(四)正頼兼雅

(五)藤英

(六)仲忠

(七)兼澄

(九)兼澄歟

(考異)

(一)居給へれば―居給ふれば

(八)難く―ちたく

(一〇)これはた―これこそ

惱み給ふことも無かなるものを」と宣へば又他人、「かの北の方、親の許にこもり居給へれば、小かりし子どもの騒ぐなるをこそ、もてあつかひてものし給ふなれ」
(二)右の大殿、右大將、この事の聞えの出で來たるにこそあめれ、然は思ひし事ぞや、など心の中に思ほす。大將、藤大納言などは、太政大臣をだに、斯くし奉り給へば、まして如何に、など思ほしつ。

かくてかうぶり賜ひ、みな人加階し給ふ。大殿、右大殿、二位になり給ふ。東宮亮、四位階こえて、學士の右大辨三位になる。家あこの衛門尉、かうぶり得給ふ。女かうぶりに女御、更衣、皆かうぶり賜はりぬ。乳母たち加階す。藏人たち、かうぶり得なす。

かくて晦に、司召のころ、右衛門督かけたる宰相なくなりければ、宰相には右大辨季英、右大將按察使かけ給ふ。右衛門督に兵部大輔「いと難くなり給へり」と世に言ふ。兵部太輔に顯澄、右大辨に東宮亮、これはたの藏人右衛門尉になり

ぬ。

(六)の君なほ歸らず、仲忠妻を警戒す。

(語釋)

(一)思雅自身來れども

(二)思雅も歸れと口では言ひ居る中に自分の方から離れて仕舞ふがましなり

(四)母をさがして

(五)思雅

(考異)

(三)去り侍りなむ―去り侍る

かくて太政大臣の北の方、大宮の御許にわたり給ひて、おとどの御消息はあれど、御返も聞え給はず、まことに物し給へど、對面し給はず。宮もおとども、正頼大宮あぢきなし。童へにもあらず。心のかはり給はむにだに、身一つにもあらず、子どもあまたあり、かく物し給ふめれば、忘れ果てじとこそ思はめ。かく宣ふめるを、對面し給へ」と聞え給へば北の方、六君何か、普う人に知られぬ前に、彼處に
(三)もかう宣ふ程に、己が心と去り侍りなむとなむ。これかれ見習ひてもあるものを、己しも、かしこき心に忘れじとなむ。たどつきたりし乳母なくて、懐にのみ習ひたる子の、求め泣くなれば、らうたさに、とさまかうさまにたばかりて迎ふれど、許されぬをのみなむ、いと悲しくは」とて物も聞え給はねば、大殿は、かくやんごとなき折にもまるり給はず、君だちをのみもて煩ひ給ひつと、姫君をば、北の方のいと悲しうし給ひしかば、これ見には、然りともわたり給ひなむ、と思しつ

〔語釋〕
 (一)兼雅
 (二)仲忠
 (六)后宮
 (一〇)女一宮の容色が衰へたりとかこつて取かへざるを恐れて外へ出さぬ也
 (一一)給ひつゝ給ふ
 自朱雀院の氣樂なる生活。御子たちを招く。仲忠警戒して女一宮を参らせず。

〔考異〕
 (一)目を一目をば
 (四)添ひ居て「居」ナシ
 (五)する一などすれば
 (七)のみ一のみは
 (八)御子たちは「は」ナシ
 (九)呼び参らせ給へば一御消息ありつれば

つ、目をはなち給はず、守らへておはする、右の大殿の聞き給ひて、然思ひしことぞや、^(二)后の宮にも、然聞えてきかし、と思す。^(三)右大將我もかよる目をや、と思し怖ぢて、ありきもし給はず、夜晝添ひ居て、御消息あれば参りて、人の参りまかでする車の音すれば、たづね問はせ給ひて、^(四)心ゆるびなく思す。^(五)
 かくて朱雀院には、こと人々また参らせ給はず、仁壽殿の女御のみ、出で給ひし御供に仕うまつり給ひてさふらひ給へば上、朱雀今はかく、中宮も内裏のみこそは。^(六)
 こと人々は参りもせじ。そこにのみ添ひて、御子たちはあまたあれば、睦ましきものには。凡人のやうに、子ども前にすゑて、^(七)つい並びてあらむと思ふなむ」とて御局ひろく造りしつらはせ給ひて、殿上人、上達部も、さりぬべき、御前におはし、車どもなどして、朱雀女御たち、一の宮も参り給へ」と呼び参らせ給へば大將、仲忠「この頃、^(八)いたく損はれ給ひにためり。然あらざらむ時、^(九)ことさらにも参らせ奉らむ」とてとどめ奉らせ給ひつ。二の宮は参り給ひぬ。上、見奉^(一〇)

〔語釋〕
 (二)「たち」衍文の歟
 (三)用する歟
 (四)忠康を疑にせんと望む人あれど
 (八)「朝臣の」歟、實忠を
 (九)あて宮をいふ歟
 (一)この一なし
 (五)まうでーまで
 (六)て侍りーナン
 (七)られたりけるにこそはーちれにたりけるにこそ

り給ひて、朱雀一の宮をこそ、こともなしと思ひしか。これも、怪しうはあらざりけり。琵琶、箏の琴の上手もがな。この御子たちの料にせむ」と宣ふ。男御子たちも、みな同じ所にて、夜晝御遊せさせ給ひておはします。御妻持たまへるは、夜はまかで給ふ。彈正宮は、夜晝さふらひ給へば上、朱雀「なか、この宮たちの、見る限まかでぬは。里もなき、ようする人のなきか」と申し給へば女御、仁壽「これかれ、然ものする人侍れど、如何なるにか、かく獨りのみぞ」と聞え給へば、朱雀「もし藤壺をや、月見るやうに思ひけむ。實忠の朝臣こそ、さやうに聞きしか。それだに今は然も無かなるものを」仁壽「それ、山里に侍るまよにさふらひし、とて喜びにまうで來たりけるを、言ひこしらへ侍り。それは、時々京に通ひまうで來けるを民部卿の言ひたばかりで侍りけるにこそ」上、朱雀「怪しみ思ひしは、こしらへられたりけるにこそは。心さへこそあらまほしう。かの朝臣は、山籠こそあいなかりしか」女御、仁壽「いでや、いと幸なく侍りける人にこそ。若君のまだ産^(九)

〔語釋〕
(一)豫期の如くにゆかば
此子は實忠に妻あはせん

(二)今上

〔考異〕
(三)ことこそ

(四)絶えて絶ちて絶
(五)侍るなれば侍れば

〔後〕后宮兼雅に父を贈りて
立太子の事を迫る。

(六)あるぞかしとある
所かゝると
(七)事とこそ事と事
こそ

れ給はず、さる氣色侍りける夜、「思ふやうにてあらば、必ず然せむ」と宣はせければ、親もこれかれも、然思ひて侍りけるを、かゝる折節にも、かくやんごとなく妨げ給ふ人の出で給ふめれば、父母、「今まで世に侍りて、かゝる恥を見ること」と伏し沈みて湯水も絶えて思ひなけき侍るなれば、親をなけかするにまさる幸なき事は、何處にか」と聞え給へば、上、朱雀よに然契られたらば違へられじ。われらが心には似ずさる所し給ふ人の御心なればあるぞかしと聞えしかど、あるまじき事とこそものせしや」と宣ひて夜晝物し給ふ。

〔畫詞〕 ことは仁壽殿の女御の御方。

后の宮聞召して、思ふやうに子どもひき率て、我が儘にはた目ざましや、と思して、右の大殿に御消息奉り給ふ。

后宮對面聞えまほしけれど、これも煩はしくし給へばなむ、ものし給へと聞えぬ。太政大臣に聞ゆべき事ありて、度々ものし給へと聞ゆれど、惱むことありて、など聞ゆれど、然しもあらぬやうに。かの事は如何思しなりぬる。そこにもや、昔の懸想人の心つよましくなむとて、長き世の悦とあるべき事を、せじとは思すらむ。ことには、萬に思へど、人に逢ひて、言語らふべきにもあらず。かの人にもあひ給ひつよ、よく言語らひ給はど、然りともなむ。大將、そこに、やんごとなく思さむ事を、何か妨げむ。然らば、子ともな見給ひそかし。天下にかしこき身なりとも、親の見給はざらむ子はいと悪しからむは。四人翁を語らひてこそ、事は成しにけれ。五人の心を一つにて、「昔より斯うなむある、この事許されずば、山林に交りて、公にも仕うまつらじ。何を勇にてか」と申されば、然りともえ否び給はじ。此事に叶はざらむ人をば、かく數ならず思はれたりとならば、この世にも、あの世にも深くつらしと思はむ。とあり。おとど、「大將をな見そ」と宣ひつるに驚きて、坊をばするすとも、大將の疎にはいかと思はむ、かく宣ふが恐しく畏きこと、と思して御返事、

〔語釋〕
(一)あて宮の手前を兼ねて
(四)忠雅
(五)同意せぬ事はあらじ
(六)父の意に背くならば
子と思はぬがよし
(八)商山の四船の力に
りて漢の文帝が皇位に即
きしをいふ
(一〇)我を
(一一)手紙の中にある文
句
(一二)大將を「歟」
〔考異〕
(一)とは「は」ナシ
(三)人に逢ひて一人にも
あひつゝ
(七)子は「は」ナシ
(九)成しに「は」ナシ
(一二)すえずとも「すえ
ずば」すえず

りて、など聞ゆれど、然しもあらぬやうに。かの事は如何思しなりぬる。そこにもや、昔の懸想人の心つよましくなむとて、長き世の悦とあるべき事を、せじとは思すらむ。ことには、萬に思へど、人に逢ひて、言語らふべきにもあらず。かの人にもあひ給ひつよ、よく言語らひ給はど、然りともなむ。大將、そこに、やんごとなく思さむ事を、何か妨げむ。然らば、子ともな見給ひそかし。天下にかしこき身なりとも、親の見給はざらむ子はいと悪しからむは。四人翁を語らひてこそ、事は成しにけれ。五人の心を一つにて、「昔より斯うなむある、この事許されずば、山林に交りて、公にも仕うまつらじ。何を勇にてか」と申されば、然りともえ否び給はじ。此事に叶はざらむ人をば、かく數ならず思はれたりとならば、この世にも、あの世にも深くつらしと思はむ。とあり。おとど、「大將をな見そ」と宣ひつるに驚きて、坊をばするすとも、大將の疎にはいかと思はむ、かく宣ふが恐しく畏きこと、と思して御返事、

(語釋)
(三)東宮に

兼雅畏まりて承りぬ。仰せられたる事、世にいかでと思ひ給ふれど、あひ叶ふ人の侍らぬになむ。今、かたぐ宣ひ語らひて聞えさせむ。
と聞え給ひて、大將の御許に、「宮より斯くなむ」とて奉り給へれば見給ひて、人にも見せて隠しつ。

(考異)
(一)いかでと一ちかてか

(二)いと一ナレ

世間の噂、正頼あて宮の落膽。

【畫詞】こよは右大將殿。宮の御方。右近の君といふ人、御前にて聞ゆるやう、右近「宮のすけ、大臣にて、思ふやうにておはしまさば、まかるらむ」と申す人侍る」宮、「あな聞きにくや。いと心違なり」と宣ふ。人々多く参り集へり。人の奉りたる物、いと多かり。こよは宮、乳母たちなどして遊び給へり。殿内、ひきかへたる様に、人多く参り集ひて、市の如のよしる。

かくて、内裏よりはじめ、世界にのよしりていふやうには、「梨壺の御腹のなむ居給ふべき。後の宮、夜晝泣くく聞え給へば、帝然思しなりにたなり。おとどたちは、知らぬやうにて、皆心を一つにてなむ物し給ふなる」と言ひのよしる。

(語釋)
(一)思雅等

(二)あて宮

(三)あて宮腹第一の皇子

(四)正頼

(六)あて宮の心

(考異)
(五)なでふにか世に交らふべき一なでふ事にか世に經まじるべき

(七)宮たちを「を」ナレ

左のおとどは、御掣たちをつらしと思す。御掣たち、かく言ふことを、如何に思すらむ、夢にても知らねど、など互に思せど、誰もく物もきこえ給はず。女御の君につき奉りつと物望せし人々、一人目に見えず、若宮の御方に参りつどひし人々も参らねば、ひきかへたる様に、いとしめやかにながめおはします。内裏よりも、久しく御消息も見えねば、おとど、この事實に定まりなば、またの日法師になりなむ、なでふにか世に交らふべき、とおほし嘆きて、君たちもみな集ひて、萬にこしらへ給へど、思ほし慰むべくもあらず。藤壺は、萬におもほせど物も宣はず、帝の御心あやまりにたればこそ、人も斯くは言ふらめ、かく言ふも著く、御返聞えねど立ちかへり賜ひし御使も見えぬは、如何なるにかあらむ、この事は、けにくく然なりて、おとども宣ふやうになり給はど、我も尼になりなむ、何か世に交らむ、と思ほす。宮たちを見奉りておはす。若宮は、何心もなく、遊びありき給ふ。

仲忠の女一宮に對する辯解、仲忠水尾に仲頼を訪はんとす。

〔語釋〕

(一) 自分も梨壺方に賛成したる様に

(二) 「おはしますにだに」歟

(三) 女一宮が見知りたれば

(五) 六の君が里に留りて歸らぬを

(六) 假令本人は后宮に御目にかゝらずとも事を圖る事は出来ぬにあらざ

(七) 仲頼を尋ねに

〔考異〕

(四) 罪には一罪にも

かくいふ程に、十月になりぬ。大將宮に聞え給ふ、仲忠「世に人のいふなる事は、ことにも知りて侍らむやうに聞き給へらむがいとほしき事。自ら御覽すらむ。御即位に参りて侍りしまよに、院のかく旅におはしますだに参らず、三條にもまからで侍るは、知り侍らぬよしを、一所に御覽じてば、罪にはあて給はじとてなむ。太政大臣の、ひとり月頃おほし歎くなるを、人の御上とも承らず。ことに、見給へ煩ふべき人あまたも侍らねど、一所の御心を思ひ給ふるも、恐ろしくなむ」宮、女「それは、人のし給ふにもあらざなり。對面し給はぬをこそ、誰も誰も宣はずなれど、聞くやうありとて、正身こそ對面給はざめれ。ことには、さやうにたばかりとも、し果てられむ様をこそ見侍らめ。大將、仲忠「何事を、いかやうなる筋に」宮、女「みな集はれてこそ、定められけれ。知らず顔にも」大將、仲忠「すべて、この事な宣ひそ。さらに知り侍らず。さるは、去歲より「水尾の山籠とぶらひにまからむ」と言ひ契りて侍るを、花盛にも、とかく障りて物せ

ずなりにしを、此の頃紅葉の散らぬさきにとてまかり出で立つなるを、一二日侍らざらむ程のうしろめたければなむ。然あらむほどは、「あからさまに渡り給へ」とありとも、ゆめわたらせ給ふな。まかり歩いてまうで来るに、此方におはしま

さぬ時は、いと便なく佗しくなむ。なほ然きこゆる心あり。歸りまうで來なむ、待たせ給へ」ときこえ給へば宮、女「いづちか。苦しくのみあれば、臥し起きも

心安くてこそ。日頃はこれかれ物し給はねば、人少にてさうくしきをのみなむ」大將、仲忠「それ、然ぞ實におはしますめる。この東の對に侍る人を、召しあけて

さふらはせ給へ。琴などいとよう弾きて、様々にせぬわざ無う、よき人なり。心なども善けに侍るめり」宮、女「恥かしげに、かくいと異様なる頃しも、いかで

か」大將、仲忠「何かは、いと恥かしく侍らぬ人なめり」とてまうのほらせ給へば、いと目やすく裝束きてのほり給へり。容貌もいとおとなしくしう清けなり。宮、御

琴賜ひつゝ弾かせ給ふ。いとおもしろく弾き、さまざまにいとらうくしく、を

〔語釋〕

(一) ほどは「は」ナシ

(二) まうで「まで」

(三) さう「う」しきを「を」ナシ

(四) 頃しも「折しも」

(五) 恥かしく「恥かしき」様

(六)按察使の君を

(考異)

(一)といふ一とむいふ

(二)按察使に一の

(三)侍る一はべなる

(四)大將殿一殿ナシ

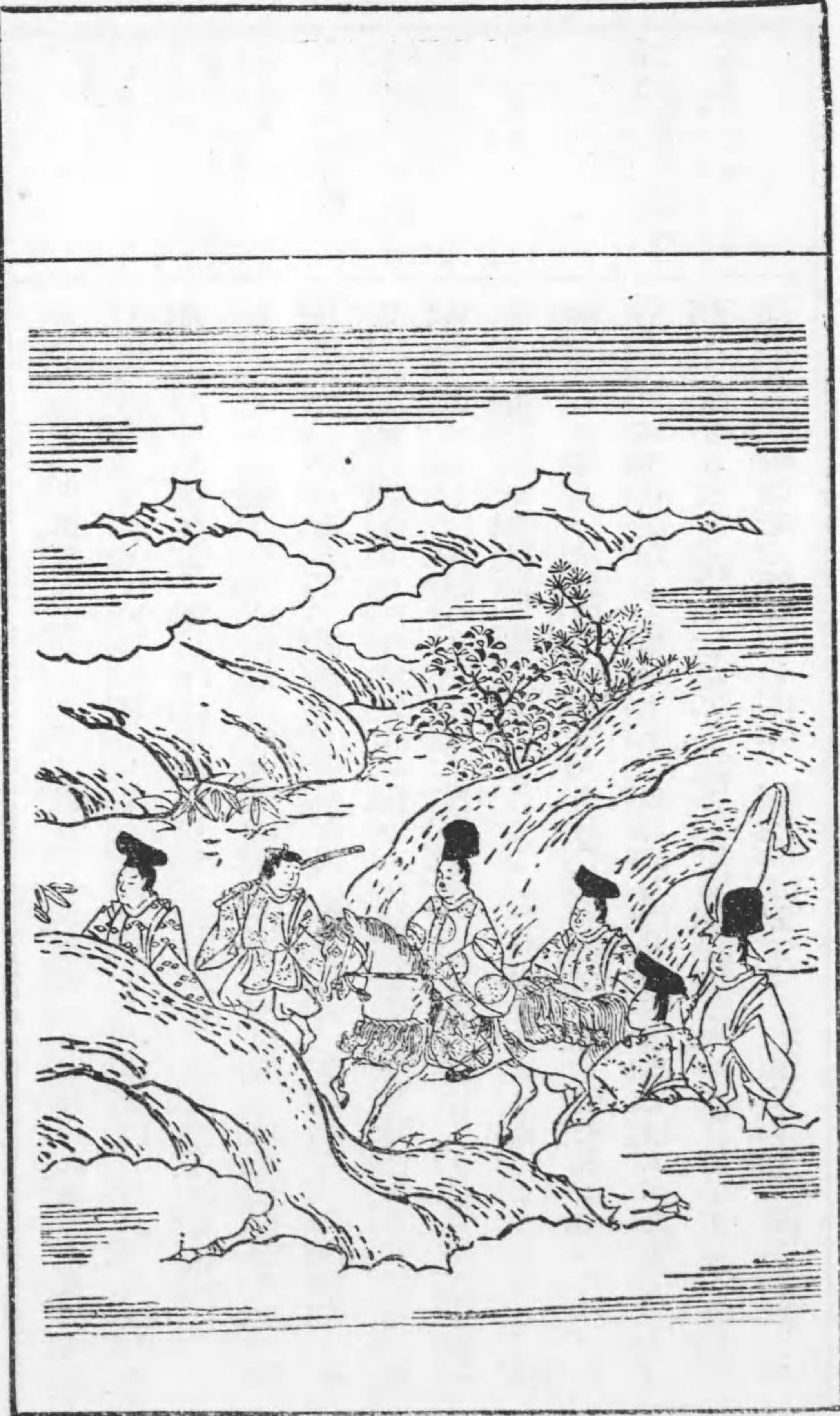
(五)聞えつー聞えなどナ

(七)これかれーそれかれ

●仲忠、涼、藤英、行政、忠こそ等仲頼を訪ふ。

かしき人得つと思ほす。按察使の君といふ。大將殿按察使に宣ふ、仲忠「水尾へまかるなり。御消息やある」按察使、「かくあらはれて侍りとて、恥ぢ侍るものを」と聞ゆれば大將殿、仲忠「世に然もあらじ。いとよく褒め聞えつ」と宣ふ。犬宮をかしけにて、ひとり立ちし歩みはじめ給ふ程なり。父君見奉り給ひて、仲忠「ここに、かく睦まじくなし奉るは此の子によりてなり。火水に入れども、宮は見も入れ給はず、乳母どもの限は、うしろめたければなむ。侍らざらむ程に、出だし給ふな。いとあわたどしくて、出でつゝ人に見ゆれば、見苦しくなむ。上局などして、斯くてものし給へ」と宣ひ置く。宮に、仲忠「いと疾くまうで來なむ。聞えさする様にを」と出で給ひ、其處にてこれかれ待ちつけ給ふ。

山籠にとらせ給ふべき物とて、御衣櫃一かけ、長櫃一かけ持たせ給ふ。ほそを風といふ琴持たせ給へり。御供には御前六人、御馬添六人、御前二人は四位、二人は五位、二人はやんごとなき官ある六位、御隨身四人、雑色六人、装束白きろう



- (一) 涼
- (二) 「あかうま」は「はかま」
- (三) 藤英
- (四) 「せら」は「制敷」
- (五) 行政
- (六) 松方
- (七) 九思こそ
- (八) 「考異」
- (九) 「純色のし色」ナン
- (十) やどもり風—山もり

のさしぬき、青露草してらうずりに摺りて、白き綾のうちき、白馬、御供の人よりはじめて、さまざまの白、青、しなぐに著たり。中納言は、あか色の織物の襖、鈍色のさしぬき、綾かいねりのうちき、あかうま、御前二人は劣れり。やどもり風といふ琴持たせ給へり。右大辨は青鈍あを、その外も皆同じ色をあを、御馬添四人、せいありて、學生とも御前四人、秀才二人、進士二人。御供の人みな大學の衆の下藤なり。良中將は青色をあを、白のさしぬき、薄色のあやの袷、御供の人前の如し。琵琶持たせたり。雅樂權頭、琴持たせたり。右馬助、近正は和琴、左衛門の非違尉、時正、笛持たせたり。これかれ装束は心にまかせたり。律師、わらは四人、法師四人、童子六人、これもみな、よう装束とよのへたり。この人々の御供に、かよる物の上手の限おはしつどひて遣遙し給ふべしとて、人の數少く擇らるとて、我もく見聞かむと思ひて、雑色は、やんごとなき侍の人ぞ出で立つ。御衣櫃、割籠もちには、侍出で立つ。かくて、二條の院に集まりて、

- (一) なはかよる—多かる
- (二) 山籠は—うち群れておはしたれば—ナン

そこに饗などして出で立ち給ふ。大宮の大路より、北様にのほり給ふほど、車どもいみじく立てつどけ見る。徒人もいとおほかり、忍びて、やんごとなき人ども。なほかよる中にも、大將はいとよなう清けなり。山路まで、御送の人とおほかり。到り著き給ひて、籠より「迎にもものせよ」とてかへされぬ。

畫詞 ことは水尾の路。

かくていたりつき給ひて、山籠は、年頃、堂などもいと廣く、いかめしう、瀧いとおもしろく落したる所に住みて、里なりし女子迎へて物ならはす。山犬、里犬といふ男子どもに、笙吹き横笛吹かせて、箏の琴女にならして居たる夕暮に、うち群れておはしたれば、山籠喜びかしこまり聞え給ふこと限なし。まづ紅葉の林に御座ども敷きて、みな居給ひぬ。まづ「勞れ給ひぬらむ」とて、山の法師ばら、童へ出だして、をかしき枯木拾はせて、お前に銀のまがりなどとり出でて、おもの炊がせ、お前の朽木に生ひたる茸ども、糞にさせ、苦茸など調じて、銀の金

御仲頼の款待。菅絃。讀經。贈物。仲忠、仲頼の子どもを世話すべき事を約す。

- (一) まづ紅葉の—まつ
- (二) まづ紅葉の—まつ
- (三) まづ紅葉の—まつ
- (四) まづ紅葉の—まつ
- (五) まづ紅葉の—まつ
- (六) まづ紅葉の—まつ

〔語釋〕
〔三〕山伏に「なるべし、山伏は仲頼をいふ」

〔八〕などとして「なるべし」

〔考異〕

〔一〕添へて参り―添へ参る

〔二〕御前には―は「ナシ」

〔四〕昔は―昔―昔の

〔五〕嵯峨野の様に―嵯峨の供養にも

〔六〕かなしき―かなしき

〔七〕山籠も―も「ナシ」

碗わんに入れつゝまゐれば、君きみたち興きやうじつゝ召めし添そへて参まゐり、御物語ものがたりなどし給たまふほどに、御割籠かりごども持ちて参まゐれり。取りわたして、山籠やまごもりの御弟子みでし、童子ごうじ、その邊へんのもの此この君きみに仕つかうまつるなど召めし集あつめて賜たまふ。御菓物くたものばかり、御前みまへには参まゐれり。御酒度みきたぐ々くきこしめして、物ものの音ねどもかき立て、山風やまかぜは紅葉もみぢの散ちりたるをば吹ふきたて、枝えだなるをば散ちらしなどする夕暮ゆふぐれの興けいあるに、松方まつかたの雅樂頭うたのかみ、おほきなる木の節ふしの、いとをかしきを取りて、山伏やまぶしと御土器みかちびまるると申まうす、松方まつかた權頭ごんののかみは、昔むかしは、いさよかの御みありきにも、後おのれ奉たてらすこそ仕つかうまつりしか。かよる路みちにおもむき給たまひにし折おり、告つげさせ給たまはましかば、御供みともに仕つかうまつりて、御弟子みでしにてもさふらひなましものを、世よの中に交まじひ侍はべれど、何なにの勇いさみも侍はべらぬに」と泣なくく御土器みかちびまるりて、松方まつかた「嵯峨野さかえのの様にやうにも侍はべるなり」とて、
松方まつかた吹上ふきあがりにさそひしとも山深やまふかくたづねて君きみを見るがかなしき
山籠やまごもりも「今日は」などて、

〔考異〕
〔二〕大將殿―大將も

〔二〕秋山も―秋山の

仲頼たにかぜ谷風やまかぜの吹上ふきあがりぞわれもおもほゆる山やまの錦にしきにまとるせるけふ
大將たいしやうご殿どの
仲思ちんしもよしきの昔むかしの友ともを見みにすればあらしの風かぜもにしきをぞ敷しく
中納言ちゅうなごんの君きみ
涼あや君きみをのみたづねていまは秋山あきやまもみちも深ふかくなりけるかな
右大辨うだいべん、むかしの藤英とうえいなりし火影ひかげ姿すがた思おもひて、
藤英とうえい七夕たなはたのあふ夜よぞわれも君きみをみしたれも心こころのめづらしきかな
律師りし、
思おもひを限かぎなく憂うれかりし身みだにありはてぬ山やまにて君きみがおもひをぞ知る
中將ちゅうしやう、
行政君ぎやうぎんをだになしと嘆なげきしよしきにありし世よさへも變かはりぬる哉かな
右馬助うまのすけ

近正君によりしぐるよ袖のふかき色ををれる紅葉と里人や見む
時蔭

〔語釋〕
(一)山ぶしふさじあり
歟一本山ふたたにあり

〔考異〕
(一)まがふーまよ

〔三〕粥にーにナシ

いにしへは君がころもにみえし色の今は山べに散りまがふかな
とて中將は琵琶、山籠箏の琴、權頭琴、近正和琴、時蔭横笛、またそれらが中に、
箏、吹くものと吹きあはせて、他人々は唱歌し、歌うたひ、夜一、夜あそび給ふ。
所々見やれば、遠う火を焼きて、その山のめぐりの山じにたにあり。ちかう見れ
ば、火を山のごとくおこして、大なる鼎たてて、栗を手に焼きて粥に煮させ、
よろづの菓物食ひつと、人々の御供なる人に賜ひ居たり。夜更けゆけば、露霜お
く。夜一、夜あそびあかし給ひて、つとめてになれば、御粥まるる。露に濡れたる
御衣ども脱ぎかへ給ひて、山籠の御供に、よき人の子どもの四人あるに、四所なが
ら取らせ給ふ。
その日は題出だして、用意しつと文づくり給ふ。右大辨の御供なる秀才一人は文

〔考異〕
(一)多うー多く

(二)にもまありーにまある

(三)がたーナシ

(四)たごごとー常ごとーつねのこと

(五)やどもり風ーやまも

つくる、一人は講師す。かよる程に、源中納言殿より、檜割籠、たごの割籠、屯
食などいと多うあり。御前どもにもまあり、人々にも賜ふ。よき物いと多くもて
こみ給ひて、日暮れて文づくりはてて、讀ませ給ひて、おもしろきはみな誦し給
ふ。右大辨の御聲は、いと高ういかめしう、大將の御聲はいとおもしろう哀なり。
夜更くるまで、文誦じ、曉がたになりて、風いと哀に、木の葉の雨の如くに降る
ほどに、律師陀羅尼よみ給ふ。大將いみじくめで給ひて、箏の琴ひき合せ給ふ。
おもしろきこと限なし。山人も里のも、みな涙落さぬはなし。しばし遊ばせ給ひ
て、山籠たごごとにて陀羅尼をよみ給ふ。中納言やどもり風召して調べ合せ給
ふ。かくて暫しありて、君たち、諸聲に文あそび給ふ。律師、山籠の御聲のいと
尊きを聞きめでて、土器取りてかく申し給ふ。
思こそ出づとせし身だに離れぬ火の宅を君水の尾にいかですむらむ
山いもり、

〔語釋〕
(一)此處にある者誰かあ
て宮に戀せざりし者あら
んや

(三)「くらみ」なるべし

〔考異〕
(二)袖のみをにも―その
みのをにも

(四)もてーナン

仲頼烟たついへは思ひの苦しさに身も消ちがてら入れるみづのを
大將

仲忠ことにかくあるどち誰か燃えざりし袖のみをにもぬるみやはせし
中納言

涼人よりは我ぞけぶりの中なりし今もきえねどえやは出でける
辨殿

藤英夜をくらめ螢もとめしわが身だに消えしおもひの目にけぶりつよ
中將

行政もえ渡る火のほとりにはありながら乾かぬものは袖にぞありける
など宣ひつよあそびあかし給ふ。

かくて日やうく晴れもてゆく程に、種松山籠の御料に、粥の料、あはせ、いと
清らに調べて、馬どもに負せて、乾飯、馬二十ばかりにおほせて、布のあを、綿

〔語釋〕
(一)「こ櫃」は「長櫃」なる
べし

(四)袋

(五)「三袋ばかり」

〔考異〕
(二)鉢―はしーナン

(三)たりーたる

あつく入れて、いと多う持たせ、長櫃どもに飯入れさせ、酒樽に入れて、持たせ
てまうでて、山伏どもめし集めて、飯酒くはせ、乾飯、襖、一つづつ取らす。大
將もたせ給へりし長櫃、御衣櫃、山ごもりに奉り給ふ。こ櫃には、淺香に沈の脚
つけて、蘇枋を枋にして、銀の鉢、金碗、かいさし、銚子、水瓶など、よろづの
調度つくし入れたり。御衣櫃には、御法服一つ、限なく清らにて、夜の装束、綾
のさしぬきに、織物の襖、あやの裏どもなどして、その襖に書いて結びつたり。
仲忠露けて山邊にひとりふす人のよるの衣にぬぎかへよとぞ

子どもの装束、女子のもの、いと清らにし入れてまゐり給ふ。山ごもり見て、
仲頼世をすてしこけの衣にぬぎかへばまた夜々にもものをこそ思へ
とて賜はり給ひぬ。中納言は、きぬあやをいとのとくどつに入れて、供養のやうに
て、三所ばかり奉り給ふ。右大辨も、いとをかしき物奉り給ふ。律師は、よろづ
の行の具、菩提樹の數珠よりはじめて用ある物を奉り給ふ。中將は墨染の装束、

〔語釋〕
(一)非道を行はざる旨を佛に誓ふ法

(三)仲頼の妹

(五)妹の人柄をいふ

〔考異〕
(二)饒法せさせ—こんぐ打たせ

(四)籠りて—てナシ

(六)え—ナシ

うちき、さしぬき、黒櫛のうへのきぬ、五條の、袈裟具したる法服三くだりは主に、装束四くだりは上童の料に、下衆の装束三十具ばかり、童子の中に皆し給ふ。これより外は、心にまかせてをかしき土産どもも。かくて物など参りて、又の日は文つくり、その寺にも、めぐりの寺にも、御讀經せさせ饒法せさせなどし給ひて、その夜はとまりて、とざまかうざまに遊び給ふ。山ごもり、大將に聞え給ふ、仲頼昔一條殿に侍りし人の、便なけにて侍るめりしを、見給へ棄ててまかり籠りて、年頃いかで侍らむと思ひ給へしを、殿にむ願みさせ給ふと承るをなむ、深うよろこび畏まり聞えさする。別いても昔たにようも侍らざりしを、如何様にと思ひ給ふるになむ、かたはらいたくは「大將仲思一年頃さて物し給ひしを、え承らざりき。去年、事のついでありて、彼處に宣ひしになむ、驚きながら聞えむとせし。これかれ集はれて騒がしかりし程は、さし別きたる様なりしかば、え。その宮むかへ奉りてしかば、これかれ外へわたり

〔語釋〕
(一)仲頼の妹の謙遜なるをいふ歎

(二)大宮

(三)女一宮が

(五)仲頼の妹に

(六)仲頼の妹に

(九)仲頼自身をいふ

(二〇)「いかう」は「一向」なるべし

(二三)「侍らせし」

〔考異〕

(四)「忍み—ナシ

(七)「御徳と—御徳に

(八)「思ひ—思う

(一一)「いかうに—いやうに

(一二)「いら—へりげに

給ひなりにしかば、この三條の自家なりし方になむ侍る、東の對になむすませ奉る。さても、殊に頼もしけなる事も無けれども、自らをだに人にもし給はぬかな。幼きものの侍るめるを悪みきたながるめれば、身にはらうたくおほえ侍るになむ、あづけ奉りてなむ侍る。いと目やすく、警策なる人にこそ物し給ふめれ。君をのみ見奉りて、彼處に對面せざらましかば。人のいふことは空言になむ」山ごもり、仲頼然だに御覽じなさば、いと嬉しく、佛の御徳となむ。この侍る童べも、母亡せ侍る。身ひとつだに、侍りがたけに承れば、こよら召しあつめて、松の葉をも昔の衣をも、もろ共にこそはと思ひ給へてなむ。女子をさへものして侍るを、童べは、いかで宮仕も仕うまつらせむ、と思ひ給ふれど、親は便なく侍れば、いかでかは、とてなむ」大將、仲思何處に、如何にせむとか思ほす。せむ様を宣へ。かの伯母君にあづけ奉りて、いかうにこの事をうしろみ奉らむ」いらへ、
(一)「いらへ—い
(二)「いらへ—い
(三)「いらへ—い
(四)「いらへ—い
(五)「いらへ—い
(六)「いらへ—い
(七)「いらへ—い
(八)「いらへ—い
(九)「いらへ—い
(一〇)「いらへ—い
(一一)「いらへ—い
(一二)「いらへ—い
(一三)「いらへ—い
(一四)「いらへ—い
(一五)「いらへ—い
(一六)「いらへ—い
(一七)「いらへ—い
(一八)「いらへ—い
(一九)「いらへ—い
(二〇)「いらへ—い
(二一)「いらへ—い
(二二)「いらへ—い
(二三)「いらへ—い
(二四)「いらへ—い
(二五)「いらへ—い
(二六)「いらへ—い
(二七)「いらへ—い
(二八)「いらへ—い
(二九)「いらへ—い
(三〇)「いらへ—い
(三一)「いらへ—い
(三二)「いらへ—い
(三三)「いらへ—い
(三四)「いらへ—い
(三五)「いらへ—い
(三六)「いらへ—い
(三七)「いらへ—い
(三八)「いらへ—い
(三九)「いらへ—い
(四〇)「いらへ—い
(四一)「いらへ—い
(四二)「いらへ—い
(四三)「いらへ—い
(四四)「いらへ—い
(四五)「いらへ—い
(四六)「いらへ—い
(四七)「いらへ—い
(四八)「いらへ—い
(四九)「いらへ—い
(五〇)「いらへ—い
(五一)「いらへ—い
(五二)「いらへ—い
(五三)「いらへ—い
(五四)「いらへ—い
(五五)「いらへ—い
(五六)「いらへ—い
(五七)「いらへ—い
(五八)「いらへ—い
(五九)「いらへ—い
(六〇)「いらへ—い
(六一)「いらへ—い
(六二)「いらへ—い
(六三)「いらへ—い
(六四)「いらへ—い
(六五)「いらへ—い
(六六)「いらへ—い
(六七)「いらへ—い
(六八)「いらへ—い
(六九)「いらへ—い
(七〇)「いらへ—い
(七一)「いらへ—い
(七二)「いらへ—い
(七三)「いらへ—い
(七四)「いらへ—い
(七五)「いらへ—い
(七六)「いらへ—い
(七七)「いらへ—い
(七八)「いらへ—い
(七九)「いらへ—い
(八〇)「いらへ—い
(八一)「いらへ—い
(八二)「いらへ—い
(八三)「いらへ—い
(八四)「いらへ—い
(八五)「いらへ—い
(八六)「いらへ—い
(八七)「いらへ—い
(八八)「いらへ—い
(八九)「いらへ—い
(九〇)「いらへ—い
(九一)「いらへ—い
(九二)「いらへ—い
(九三)「いらへ—い
(九四)「いらへ—い
(九五)「いらへ—い
(九六)「いらへ—い
(九七)「いらへ—い
(九八)「いらへ—い
(九九)「いらへ—い
(一〇〇)「いらへ—い

- (語釋)
- (二)いよゝ東宮に立たれなば
- (四)我には隠してある
- (五)當然と思はるゝ事なれば
- (七)思さむらむと」敬
- (九)「などとしてなるべし
- (一〇)子どもは今日にも引取るべし
- (考異)
- (一)それぞーそれは
- (三)されどーさりとも
- (六)たどーナシ
- (八)給ひたればー給ふめればー給ひたれば
- (一一)多く御物語ー御物語多く

む東宮に奉らむとなむ」大將、仲思「藤壺の一の宮こそは。それぞ、さらにとど
 の人とは見え給はぬ。今ながら、内裏の御氣色に劣り給はず、いと氣かしこくな
 む」山ごもり、仲思「また承るやうぞ侍る。さらば、まして、如何にこれらが爲
 に嬉しう、さふらはまほしう侍らむ」大將、仲思「あなうたて。何でふさる事か」
 中納言、涼「されど、みな定まりたる様にこそ。日さへ取られにたりとか申すなる」
 大將、仲思「すべて知り侍らず。ことには忍びてなむ」中納言、涼「御心にこそ、忍
 びてとは思せど、他人は然思ひたらざめり。然もはた覺えたる事なれば」大將、
 仲思「おのづから終には見えなむ。たど藤壺は、え然や思すらむ、と思ふのみこそ、
 いみじうかたはらいたけれ。それも、おとなしき心つき給ひたれば、然思すや
 うもあらむ」などて、仲思「さらば、このあこたちは、今日もいざかし」山ごもり、
 仲思「今年ばかりは、物の音すこし聞き知らせ侍りて、年かへりて奉らせむ」など
 これかれ多く御物語してかへり給ふ。御装束どもは、白き襖、綿入れて、銀の泥

- (語釋)
- (一)香染敷
- (二)舞ひてーしてナシ
- (四)「御供人に響まうけ
て」なるべし
- (考異)
- (三)御迎にー御迎の
- (五)まうけてーしてナシ

して繪かきたり。あや、かいねりの袷、薄色の香のさしぬき、御供の人は、薄色
 の襖、露草して遠山を摺れり。わた皆入れたり。下人は朽葉、色の襖など、心に
 まかせて著たり。山ごもり、子ども、法師、童へ御供にて、ふもとまで御送し給ふ。
 君たちは、御馬牽かせて徒歩より、大將は笙の笛、中納言は横笛、中將、筆簾、松
 方、近正は御さきに立ちて、陵王、落崎舞ひて他人々御後に立ちて、錦の如く散り
 たる紅葉の上を歩み出で給ふ。山のあらしに、いろくの紅葉雨の如く降りかよ
 れば、御襖にいろくに付きたり。籠にて別を惜みて、歌よみて、山ごもりはか
 へり給ひぬ。
 君たち御迎に、さまざま人多く参れり。大將、中納言の御迎に、人々小鷹手にす
 るつと参れり。歸り給ふまよに、野邊ごとにあさらせ給ひて、御餌袋に入れさせ
 給へり。右大辨は路にて別れ給ひぬ。人々は、大將の御送して殿へかへり給ひぬ。
 御供人、響まうけて、御前にはかづけ物し、御馬添、雑色には腰挿せさせ、入りて

〔語釋〕
(一) 仲忠が
(二) 女一宮

〔考異〕
(三) 野べにいでて一秋の野に
(四) 知らせやはする一知らずるとやは一知らずる
(五) し給ふこゝは畫かくありきし給ひこゝかしこありき
(六) つれづれとまもり居給ふにつれづれとまもり居給ひ

〔仲忠、朱雀院に参りて水尾の有様を奏す〕

(七) 住居の斯く一住居の
(八) 久しう見ねば一久しうこそ見ねば
(九) とか一ナシ

見給へば、宮ありき給はでおはすれば、いと嬉しとおほす。小鳥ども、生きたるは犬宮に奉り給へば、もてあそび給ふ。御餌袋なるは、調じて宮にまゐり給ふとて、聞え給ふ。

仲忠君がため小鷹手にすゑ野べにいでてまつむしをくふ鳥をとりつゝ宮、

女一鷹すゑて野べにといふは我がためにかりの心を知らせやはする

と宣へば、仲忠「思ひぐまな」とて按察使の君に山のありつる様など御物語し給ふ。

〔畫詞〕 ことば畫。

かくありきはじめ給ひてぞ、院に参り給ひける。上きこしめして、御前に召して、物も宣はで、つれづれとまもり給ふ。久しうありて、朱雀「年頃かよる住居の、斯くせまほしかりつることも、見まほしき事もせむ、とこそ思ひしか。などか参られざりつらむ。一の宮も久しう見ねば、迎へに物せしかど、止められにきとか」と

〔語釋〕
(五) 夫を持ちて暮したくば望の如くにせよとの意歎

〔考異〕
(一) 申し奏し
(二) ありし大將：文どもなど一ありしと問はせ給ふ文どもなど

〔仲頼涼に贈られし米綿などを妻の許に分つ〕

(三) 奏し一申し
(四) 給ひつれば一給へれば
(六) わいてもこゝに一わいてだに

宣へば大將、いとほしう苦しと思ひてものも申し給はず。久しうありて、仲忠「年頃勞るところありて、まかりありきもえし侍らざりつる。仲頼が侍る所にまかりて、相勞り侍りてなむ、辛うじて参りて侍る」と申し給へば上、朱雀「それは皆獨居してこそ物せらると聞きしか。何でふ事かありし」大將、彼處のあはれなる様奏し給ひ、人々のつくれる文どもなど御覽せさせ給ふ。

〔畫詞〕 ことばは院の御前。

かくて山籠は、人々の奉り給ひし物ども見給ひて、人々に賜ふべきは賜びて、わが御用になるべき留めなどして、中納言の粥の料にとてありし物をば、子どもの母君の許にやり給ふとて、御文には、

仲頼日頃は、これかれ人々物も給ひつれば、騒がしくてなむ。いかに徒然にとのみぞ。なほ人の有る様にてあらまほしく思されば、さやうにても。わいても、こゝに見奉りし様にてもありにきとな思しそ。今の人の心は然しも

〔語釋〕
〔一〕我も出家してせめて
御近處に居りたし

〔考異〕
〔一〕琴もならはせむ一琴
どもならはさむ

〔三〕宣へる一宣ひつる

あらし。山の末よりも。時々とぶらひ聞えむにつきて物し給ひぬべうは、さ
ても。

松風のさびきまにくく年を経てひとり臥すらむ君をこそ思へ

さては、これは粥の料とて、人の賜へりし。そこにて煮させ給へ。子どもの
宿直物、綿おほく入れて賜へ。戀ひ聞ゆれど、暫し琴もならはせむとてなむ。

とて奉れ給ふ。女君見給ひて、いみじく泣きて御返。

仲頼妻承りぬ。客人たち、いとめでたう、花やかにてまうで給ふなりしをなむ、

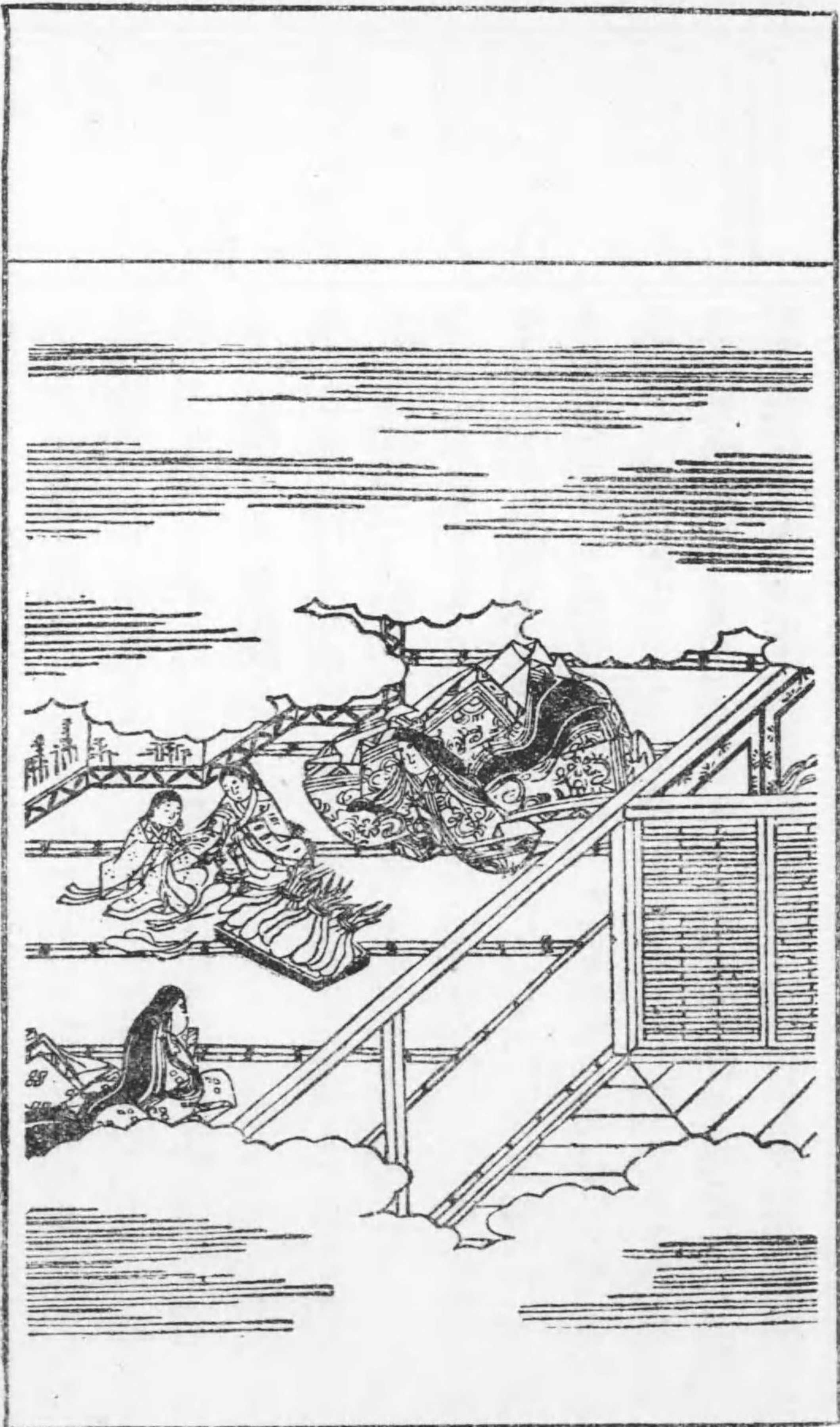
いと悲しう承りし。世人のやうにてとか。いでや、人に見えぬべき所なり

とも、今更にさる心をば、いかでか。さやうなる様にて、近うだにいかで、

とこそ。松風はそれをのみなむ。

ひとり寐るよさむもいざや苔を薄み霜おく山のあらしをぞ思ふ

この粥の料は、宣へるやうに。



- (一)正頼邸
- (二)仲忠方
- (三)實頼
- (四)兼雅邸なるべし
- (五)藤英
- (六)不詳一本に「檢非違使か」と註せり
- (七)藤英は

藤英時めく。妻の己に不満なるを論ず

- (一四)正頼の十四の君
- (一五)馬車も「もしナン
- (一六)集ひまゐる「つゞきまゐる
- (一七)衆一すけ
- (一八)こといとかしこし
- (一九)こといとかしこし
- (二〇)今の「今も
- (二一)この「ナン
- (二二)大學の院に鶴脛
- (二三)此の院に鶴脛

と書きて奉り給ひつ。きぬ、綿を見れば、いと多かり。親に奉り給ひ、按察使の君の許に、箱に入れて奉りたまふ。御たちも、みな賜はりて、引き散らしてむしりなです。女君、仲頼妻、昔も今も、この吹上の君の御贈物をこそ、豊に見れと宣ふ。

畫詞 ことば宮内卿殿。

かくて三條の院には、四面めぐり立ちし馬車もをさく見えず、藤壺の御方に人もなし。大將殿にいと多かり。頭中將の御方に數多あり。大殿には集ひまゐる人、君たちの御車ども。右大辨殿の御かた、式部の大輔かけたれば、此頃ひしせむとて、大學の衆の車あまた立つこといとかしこし。世におもく思はれ、人に許されたる學士なりしかば、今の帝、御心に御書入れ給へれば、常に御前にさふらひて、この議り申すことども、いと疾くきこしめす。容貌もいとものくし。北の方に聞ゆるやう、藤英昔、大學の院に、鶴脛はだかにて、飯に飢ゑつゝ、書の見ゆる限は守らへて、夜は螢を集めて、學問をし侍りしときに、心地常におもし

(語釋)

- (一)十四の君が藤英を不足に思ひて常にすねて居る也
- (二)我如きつまらぬ者に嫁したりとて
- (三)正頼
- (四)我を
- (五)名鳴り「歎
- (六)壺を尊にして
- (七)其の生みたる御子が
- (八)梨壺
- (九)却つて皇太子にもならんとす

(考異)

- (一)奉るをむひがみたる様なる一奉り給ひなむひがみたる様なり
- (二)ななり一なり一ならせ
- (三)坊一は
- (四)あめれ一あれ
- (五)人の「の」ナン

ろく頼もしく、思ふ事なく侍りし。今かう、公に仕うまつり、かゝる御中にさふらへど、物思はしう、侘しうなむ。それは、かう見奉るかぎり、親にも對面し給はず、世には心もゆかぬ様にて經給へば、生きて侍る效なむなき。拙き人につき給へりとして、親を勸じ奉るなむひがみたる様なる、おとどは、御前去らず召しつかひ給ひ、公事につけても、思ほし數まへ給へり。御前をも、斯くてこそ思召しかへりみ給はめ。いとあぢきなき御物恥なり。世の中ははかなきものぞや。藤壺の、昔よりななり給ひて、多くの人をいたづらにしなし、宮仕をし給ふとは、傍ほとりに人寄せ給はず、すなはちより子を生み給ひしかば、坊、后がねとののしられ給ひしかど、音もし給はず。思ひがけざりし人の昨日今日うち生みてし給へるこそはあめれ。かよれば、かく花やかに見給ふらむ人々はかなうなりて、季英人々しくならむとも知らず。大學院の藤英と言はれ侍りしかども、上達部の端にまかりならずや。博士とて侍る人の、侍らぬをぞ思ひ侍る」と聞ゆれど、いら

へもし給はず。

〔畫詞〕こよは右大辨殿。

かくて東宮月のうちに居給ふべしといふ。右大殿の御門の外には、人も避けあへず、馬車立ち、市の如くのよしる。後の宮よりは、日ごとに御消息あり。三條院には、内裏の御使も見えず。かよる事の筋も聞え給はねば、おとど、ともあれかうもあれ、この事定まりなば、又の日頭おろして、山に籠りなむ、と思ほして、然るべき所おほし設け、法服などまうけ給へば、男君も女君たちも、集ひてさふらひ給ひて、泣く／＼聞え給へば、おとど、正頼「我女子おほかる中に、此の子生れしよりらうたけなりしかば、懐よりといふばかりにおほし立てて、いかでこれをだに人竝々に、と思ひしに、ある時は對面におもだたしき時もあり、ある時はいとをかしき時もあり來しに、なほいかでと思ひて持たりしに、これによりて人の恨をも負ひ、徒らになるといふ人も聞えしかど、強ひて宮仕に出だし立てたれば、安

〔語釋〕

(一)正頼

立太子の期近づく、絶望せる正頼。

(五)あて宮

〔考異〕

(一)の外一ナレ

(三)男君一男子

(四)集ひてさふらひ給ひて一集ひさぶらひて

(六)恨をもしをナレ

からず羨まれ言はれし人の、かく人笑へに恥を見むを見ては、世にもまじらふべきにあらず」と宣ふほどに、「明日になりぬ」といふ。君たちは萬に聞え給ふをも、正頼「すべて我このこと聞かじ。人も言ふな」と宣ひて、その日のつとめて、塗籠にさし籠り給ふ。大宮、「我も、何せむにかよる目を見るべき」とてもろ共に入り給ひぬれば、君たちは、左右の戸口に並み居給ひて、泣きまどひ給ふこと限なし。

その日晝つ方、「まゐり給へ」とて御使あり。「斯くなむ」と聞ゆれど、音もし給はねば、参り給はぬよしを申させ給へば、太政大臣を召す。それも参り給はねば、立ちかへり召せば、今は斯く俄になりたれば、我がすると人の思ふべきにあらず、と思してまゐり給ふ。正頼「藏人の少將の君、左衛門佐の君、なほ参りて、物の氣色も案内せよ。こよに参り給へとありつる、疑あり」とて参らせ給へば、我か人かにもあらで参り給ふ。

〔語釋〕

(二)立太子の事が

(五)正頼に取次げども

(六)忠雅の心

(八)立太子の取計らひを

(一〇)近澄

(一一)宮あこ君

(一二)知らせよ

(一三)我に

立太子の當日。忠雅召さる。

〔考異〕

(一)べきにあらざべき

(三)何せむに一なでふに

(四)並み居給ひて一なみだをおさへて

(七)今は「は」ナレ

(九)一人の一人も

(語釋)
(一) 忠雅

(二) 實賴をして忠雅に渡さしむ

(三) 梨壺腹東宮に定まれるならんと想像せる也

(四) 忠雅が

(五) 近澄が

(忠雅) 密書を正賴に贈る。あて宮腹の皇子立太子の吉報。一家のさよめき。兼雅仲忠等の態度。

(考異)
(六) 馴せて一ナシ

(七) ぬきて一とりて

かくて、酉の時ばかりにおとど参り給へれば、上、ともかくも宣はで御硯とり寄せ、物を書かせ給ひて、封じて、頭中將して奉らせ給ふ。おとど見給ひて、御氣色よろしきを、藏人少將、これは我が御甥の御子なれば、思ふやうなりと思したるなり、と思して、我が親は徒らになり給ひぬと思ふに、色もかたちもなくなりてさふらふを、上御覽じて、をかしう哀なりと思してうちほよ笑ませ給ひて、今上すこし生き出でて、太政大臣の御後につきて立ち給へ」と宣へば、御供に宣ふことやあると、氣色を見ありき給ふ。

その夜は、職の御曹司にとまり給ふ。其處にまうでて、御前にさふらひ給ふ。曉方におとど、人間をはからひて、御文をいと小さく書きて賜ふ。賜はりて、急ぎ出でて見れば、「おとどの御許に」とある御文、いとよく封じてあり。従者の行末も知らず、御門に立てる馬にのりて、馳せて三條院に参り給ふを、君たち、太刀をぬきて殺しに来る者かとおほして、如何に言はむとするものならむと、身も冷え

(語釋)
(一) 東宮に

(五) 忠澄

(六) 假名にて

(七) あて宮腹第一の皇子

(八) 今上の

(九) あて宮

(考異)

(一) うち一ナシ

(三) のうちへ知らずいさまだ聞かずいさえ聞かず

(四) 聞き給ふにおとど一聞くにちとどは

はてて、物も言はねば、宰相の中將、辛うじて、うち戦きて、詰進如何に。誰か定まり給ひぬる」と宣ふ。少將のいらへ、近澄知らず。おとどの御文ぞある」とうち戦きて宣ふ。君たち、あけて見むと騒ぎ給ふ。少將、近澄御文をいかで」と塗籠の戸をたよきて、近澄近澄さふらひ侍り。取り申すべきこと侍り」といふ聲を聞き給ふにおとど、いとど物おほえ給はず。宮、大宮言ふべき事こそはあらめ」とて明け給へば、君たち押し込み入りて、御文を奉り給へば、おとど、御衾をひきかづきて、うつぶし臥して、御文を左衛門督の殿に、讀めと宣へば、女

忠雅東宮には、若宮居給ひにけり。昨日の酉の時ばかりになむ、宣旨下り侍りにし。例の作法にもあらず、御心一つにせさせ給ひて、「宣旨の前に人に漏らすな」となむ仰せられたる。巳の時にぞ、列引くべう侍る。参り給へ。と聞き給へり。おとど、いとすくよかに起き居給ひて、正賴彼處には告げつや

(語釋)
(三)あて宮が

(四)第四の皇子

(考異)
(一)参る一参れ

(二)告げよや思ひ一告げ
よと思ひ

(五)東の御方一北の方

(六)せられたらむ一せられし

と宣へば、近邊「まづ此處に参るとて」と申し給へば、正朝「はや告げよや。思ひ困
じぬらむ」とて御氣色いとよし。
少將は、南の宮に参りて見給へば、若宮をば膝にする奉りて、今宮をばいだき奉
り給ひて、帝の年頃の御契を思し出でつよおはするに、藏人の少將、近邊「斯うく
なむ」と聞え給へば、女御の君うち笑ひ給ひて、あて宮「然ればこそ。年頃の御契は
よもあやまち給はじと思ひつれど、怪しう言ひのよしりつれば、心地もあわたどし
うぞありつるや」とて宮をひきする奉り給ひて、御裳ひき懸けておはする程に、
おとど君だち、装束し給ひて、打連れておはして、寢殿の東の御方にわたし奉
り給ひつ。二の宮をば西の對にうつし奉り給ひて、君だち殿人ひき率て、しつらひ
仕うまつり給へば、片時に、玉の如しつらはれぬ。所々みな有るべき様にしつら
はれぬ。御前には、いと雪の降れる庭のごと、砂子敷かれたれば、かねてせられ
たらむ様なり。斯く、しする奉り給ひて、みな内裏にまゐり給ひぬ。上には乳母

(語釋)
(二)梨壺腹の皇子が東宮
たるべき旨を

(三)今更梨壺腹が立つ位
ならば、以下兼雅の心

(四)あて宮の腹に

(六)梨壺腹立太子の事は

(七)實忠

(考異)
(一)よりて一ナシ

(五)ならひならねば一な
らひならねど一ならひ
ならねば

(八)給はて一給ひて

(九)給へど一給はて

たち、大人、わらは、里なりしも皆まうのほりて、髪揚げ、装束したり。西の御
方には、例の御方々みなわたり給ひぬ。大宮、太政大臣の、民部卿の宮の北の方
たちは、寢殿にわたり給ひぬ。
大將「聞き給ひて、仲思「この事によりて、頭をえさし出でて、朱雀院には、ひがひ
がしき様に思されき。三條には、たえまうでよ、辛き目を見つるかな」とて内裏
へいそぎ参り給ひぬ。右の大殿、中宮より斯く宣へれど、夢にも思ひかけず、然
るべくばかゝる人の腹に、こよら生れ集まり給はましやは、天下に言ふとも、ま
さに、と思して、斯くなむと人にも宣はず。兼雅「こよらのならひならねば、人に
心もおかれじ。善からぬもの一二人心をあはせてだに、悪しと思はれぬれば、人
を徒らになすものなり」とて思しかげざりつれば、斯かるをもなにも思さず。
されども、内裏へも参り給はず。新中納言は、小野へものし給はて、此の頃は京
にものし給へど、例のかたぐ疎々しうて物し給ふに、誰も聞えたまはで、昔を

〔語釋〕

(一) 梨登腹立太子の事を

(三) 仁壽殿

(四) 宮にも一敷

〔考異〕

(一) けるを―けれど―ければ

(五) 如何にぞと―如何にとぞ

(六) 御消息―御様こそ

(七) 屈すらむ―くんずらむ―うんずらむ

思し出づることども多かり。されど人々のいとほしう言ひのよしりつれば、いとほしう思ほしけるを、斯かれは、耳安く聞き給ふ。
 かよる程に、院の女御の御許に御文あり。
 寶月頃いと思はずに承りつれば、心憂く思ひ給へつるを、只今なむ承り直しつる。眞にやあらむ。大方のいとほしさよりも、殿におほし歎きつるなむいみじう。宮たちも、みづから参り來むとすれば、ゆよしけなる身なれば、物のはじめにはとてなむ。いま今日明日過してぞ聞えさせむ。
 となむある。御かへり、

仁壽承りぬ。宣はせたる事は、けさ太政大臣の消息になむ、さやうにありける。今の程も如何にぞと、いと煩はしく、恐ろしき世の中なれば、今見給へ定めて、ことごとくには聞えむ。宮たちの御消息思ふには、何事にかは思ほし屈すらむ。

〔語釋〕

(一) 掠なるべし

●立太子の宣旨 東宮附職員任命。

(三) 東宮附の武官

(四) 東宮の

(五) 「などぞ」の「ぞ」衍文なるべし

(八) 推薦状をよこしたる也

(九) 辨解すべき

(一) 御役に立つべき

(二) 仲忠北山より出てし時の馬添の一人

〔考異〕

(一) 給ひつ―給ふ

(六) みな―みなう

(七) 召さるゝ―なさるゝ

(一〇) 事も―事ども

と聞え給ひつ。

かくて夕方になりて、宣旨持て参りて、上達部などみな参り給へり。中納言殿に、今日はまうけし給ひつれば、皆あるべき様にせられぬ。帯刀どもは、君たち、御掎たちの中に然りぬべき、一人づつ出だして、なし給ふ。殿上人、藏人などぞ、これかれ御勞りにて、みなまるりぬ。宮司召さるゝ程に、大將殿より、人のなるべき御文してあり。見給へば、
 仲忠日頃、宮に度々まるれど、物騒がしきやうにて、え聞えさせず。さるは自らも聞えあきらめぬべき事も侍るを、いかで。さて年頃相顧みるべきものの侍るを、數ならぬ心地して、え勞り侍らぬを、この折にだにこそはとてなむ。かれこれの御賜、しか侍るめれど、御勞になさせ給へ、とてなむ。然も仕まつりぬべきものなり。宮の大進にまかりならむ、となむ申し侍る。
 と聞え給へり。それは、伊豫介になされしが今一人なりけり。御かへり、

(語釋)
(一)私に人選せよとの仰故

(三)東宮大夫

(四)希望者の中にて

(五)仲忠

(七)藤英の妻十四の君

(考異)

(二)思ひ一思う

(六)大將の殿人—大將殿の人

(八)上には—ナシ

(九)こと—ナシ

后宮、仁壽殿女御の榮華を懐る。出家の望。

正頼承りぬ。宣はせたる人の事は、いとやすき事なり。一人は此處にものせよとあれば、然るべき人も侍らぬを思ひ給へ煩ふを、然りぬべしと御覽する人侍らむを、よろこび聞ゆる。
と聞え給ふ。

かくて、大夫には伯父たちならまほしう思したれども、帝心寄あるやうに聞ゆる中にて、然てぞよからむと思して、大將をなし給ふ。権亮には、大殿の御勞にて、學士には、もとより宮に仕うまつる文章博士、大進は大將の殿人、少進には、大宮の御いたはりにて一人、女御の君のいたはり給ふ一人、もと宮なる一人なりぬ。それより次々の、みなこれかれ御勞になりぬ。御櫛匣殿、右大辨の北の方。

畫詞 ことは東宮のはじめの所。

かくて後の宮は、御心にこそ萬思したばかりつれ、帝にはじめ聞え給ひしに、御氣色悪しかりしかば、ことに聞え給はざりしかば、斯かることも、上にはことに怨

(語釋)
(一)あて宮腹の、以下后宮の心

(二)給ひぬる女御なるべし

(三)后宮の心

(五)仁壽殿が

(七)祐澄歟

(九)仁壽殿女御の方

(一〇)仲忠

(考異)

(四)えも—だも—も

(六)迎へて—て—ナシ

(八)かりたる如して—もりたるにまして

み聞え給はざりけり。下には、いと妬しと思すこと限なし。この腹の御子たちみな死なよむ、遂に思ふ如せむ、などおほして、朱雀院に出で給ひぬ女御憎しと思すこと、昔よりこよなし。いかで憎み立てて、院の内にえもさふらはせじ、と思せど、近きに大殿を二つ三つばかり賜はり給へば、御子たちの御局をしつよ、やんごとなき人の御女を迎へて、八の宮も宰相の御女をえ給ひて、迎へてさふらひ給ふ。我もくと清らをしつよ、めでたき御勢なり。彈正の宮御妻のなければ、物すこし覚え、かたちよく親ある人、我もくと参り集へば、それしもぞ人はさまざま多くさふらひ給ふ。女御の御許に、宮たち集ひて、御かたちは花をおりたる如して、大人も童も、夜晝あそびのよしり給へば、院の帝は、これを御覽じ聞召すとして、此方にのみおはしまして、朱雀一の宮むかへて、大將の朝臣あはせて、遊をせさせて聞きしがな」と宣ふ。父おとど、御同胞の君たち、常にまゐり仕うまつり給ふ。大將も聲たちも、院に参り給ふとてとぶらひ聞え給ふ。五の宮も、

- 〔語釋〕
- (一)女二宮
- (二)后宮の心
- (六)六の君
- (九)思雅
- (一〇)六君が夫の許へ歸りたり
- (一一)后腹の女三宮は

六君夫の許に歸る。

- 〔考異〕
- (三)心憂き—心憂い
- (四)べからむ—べき
- (五)思す—おもはず
- (七)ゆく—と—ゆらゆら
- (八)夜寒に心細きを—夜寒心細き
- (一一)より—よりて

二の宮を切に聞え給へば、いかでかと思したり。
 (二)かくて后の宮、わが御族よりはじめ、上達部、御子たちを憎しと思したれば、睦ましかるべきおとどたちも、畏まりて参り給はず。斯かれば、なほ心憂き世なり、これ等が世になりはてぬるにこそはあめれ、斯かる事を見で、御おろして、然りぬべからむ所に、籠り居にしがな、と思せど、只今は心をさめぬ様なりと思す。
 (四)

〔畫詞〕こよは朱雀院。

かくて太政大臣の北の方は、この事によりてこそ、宮の御掣取もあべかりしか、今は音もなし、若君だちは戀ひなき給ふ、御腹はゆくくと高くなる、何心もなく出で給ひて、秋の頃ほひ夜寒に心細きを、月頃離れ給ひて心ほそく思す。おとども夜毎におはしつと、泣きわび給へば、六君如何せむ」とてわたり給ひぬ。
 思雅「何事により、如何に思ほしてありつるぞ」と聞え給へば、斯かる事をなむ聞きしかとも聞え給はず、世の中にのよしりいで給ふ宮なれば、男の御心といふも

- 〔語釋〕
- (一)正頼が引留めし様に
- (四)若し我が其方を受せずして正頼の言ひし如き振舞をしたらば
- (五)子どもなどを
- (七)寺のちご位
- 〔考異〕
- (二)給へる—給ひつる
- (三)こそは—は—ナシ
- (六)ことになど—ことには

の妬くもと思して、おとどのとどめ給へるやうに聞え給ふ。おとど、思雅「然思しけるこそは心憂けれ。天下に然宣ふとも、此方に疎なる心はありなむや。よし、親然宣ふとも、哀とおほさば、月頃かく佗びさせ給はましやは。そこをおろかに思ふ人にて、人のおほし宣ふ様にしてましかば、我が様なる人にしもなくて、ことになどを如何にし給はむ。よき人はありとも、己が志のやうなる人はえしもあらじや」北の方、聞き給ひてけりと思して、ありし様をはじめより聞え給ふ、六君「宮の御文奉り給ひし時は、限となむ思ひし。その御文を見せ給はすなりにしかば、つらきになむ」と聞え給ふ。おとど、思雅「それは、實に然聞き給ひければ思しけむ。いかでか、然おほぞうには思ひなむ。こよにありや」とて取り出でて奉り給ふ。斯くて、ありしよりおほん中いとめでたし。

〔畫詞〕こよは大殿の北の方、御物語し給ふところ。君だち遊びありき給ふ。女君御髪喝食ばかり、いとをかしけにて、遊遊し給ふ。御だち三十人ばかり、

嵯峨大后の落勝

- (一) 女四宮懐胎中也
- (二) 四の宮なるべし
- (三) 生れたる皇子男なら
- (四) 四宮腹を太子に立て給へ
- (五) 朱雀も其積りて今上に申し給へ
- (六) 正頼の妻、大宮
- (七) 太子のあて宮腹に定まりたりと聞きて
- (八) 思ひしに「ナシ」
- (九) 思ひし思ひて
- (一〇) 待るべけれはぢ給ふべけれ

童あまた。御前に人の奉りたる物いと多かり。簀子に大納言、宰相いませがり。宰相中將、藏人の少將など物語し給ふ。かくて、嵯峨院、もし宮男もぞ生み給ふと思して、朱雀院降り給ひてはじめて参り給へりけるに、大后の宮聞え給ふ、嵯峨后、いかで聞えさせむ、と思ひ給ひつるに、一の宮、時過ぎてめづらしき事のありけるを、もし思ふやうにてあらば、「斯く今日明日になりたるは、斯くし給へ」と内裏にも聞えむとなむ思ふ。院にも御心えて申させ給へ。三條の御子も、聞きてつらしと思はめど、かの人まだ小かりし時、そこをば、大人になし給ひしなり。然思ひ奉りしかば、目に近く見るはかなしきうちに待るべけれ」など聞え給ひければ、朱雀、それまで定まらずば、然こそ物すべう侍るなれ」后の宮、嵯峨后、それを、定まるまじきやうに聞え給へかし。これを思ふになむ、限になりたる命は惜う、冥路は安かるまじけれ」と聞え給ひけるに、斯く聞召して、くちをしう、急ぎてもしてけるかな、と思す。朱雀院は、

- (一) 必ず此御子を東宮に立てんと
- (二) 梨壺腹の御子、あて宮腹の第二の御子共に親王になさる
- (三) 今上があて宮と約束して
- (四) 朱雀院、嵯峨院、嵯峨大后
- (五) 女四宮腹の御子を立てんと
- (六) 今上が
- (七) あて宮腹の御子を東宮に
- (八) 御心も「も」ナシ
- (九) 帝ナシ
- (一〇) 見世人の一世人の一みな人の

然ぞあらむと思しければ、悪しとも聞召さず、たゞ嵯峨院の后ぞ如何に思すらむとぞ思しける。かくて内裏の帝、母后の、御心もゆかでもかで給ひにしをいとほしと思して、只今生れ給へる梨壺の御子を、今上坊にするよとこそ宣ひしか」とて親王になし給ふ。藤壺の二の宮は、二なれど、三の親王になし給ふ。東宮孕まれはじめ給ひしより、「世中たひらかに思ふやうならば、必ず」など宣ひ契りて、年月ゆくを待たせ給ひし程に、あるは生れあるは孕まれ給へるを、母后は、昔よりの筋ありとて、大后公卿、一つ心にて宣ひたばかるなり、おほやけ、帝、大后、孕まれ給へる御子をと思して、返すぐ、一つ御心にして妨げ給ふべし、と聞召して、人にも宣はで、帝、御心一つに思して、その日まで音もせで、俄にはする給ふなりけり。后の宮の御氣色を見、世人の言ひのよしるなりけり。藤壺の参り給はぬことを、夜書上はおほし嘆く。人もことにまう上らず、わたり

〔語釋〕
(二)今上があて宮へ

〔考異〕
(一)月頃は御使もたてまつり給はず一月頃御使もたてまつり給はて

給ふ所もなし。起き臥しおほすに、月頃は御使もたてまつり給はず。坊するてば、その喜してむ、それにつけてを、と思して待たせ給へど、然もあらねば、今上あさましう、心強き人にもあるかな。例の、我こそは負けぬべかめれ」とて木工助なる藏人して、御文奉れ給ひければ、御たちめづらしがり悦びて、御簾のもとにたど出でに出で、土器さしなどす。御文には、今上たちかへり聞えても、覺束なく、度々のを、見つとだにあらざりしかば、見る人もあやしがりしを、常に世の例にはあらでもありぬべしや。月頃は、あゝる様にもあらずや。

とて、

今上山彦のこたへざりしを聲々にまだしらくもと騒がれしかな
なほ参らるまじきにや。

とあり。いと珍らしと思して御返、

〔語釋〕
(二)東宮

(四)なるべく同行せん

(七)東宮

〔考異〕
(一)思ひ―思う

(三)べかめり―べかめり

(五)参りぬ―参り給ひぬ

(六)なむ―ナシ

(八)下にはまがくしげ
なりや―しだいはさかし
まなりや

あて宮いと珍らしう賜はせ給へるは、畏まりて承りぬ。いともく嬉しき御喜は、まづ奏せむと思ひ給へりしかど、月頃仰せごとも侍らざりしかば、如何なる御氣色にかと思ひ給へつよみてなむ。山彦とかや宣はせたるも、いさや。白雲もいろかはりぬと聞きしかばやまびこもいかど答へ憂からぬおほろけにや。参り侍らむことは、この宮今日明日参り給ふべかめり。同じくばとてなむ。

と聞え給ひて、織物のほそなが、あはせのはかま一具賜ふ。御かへり御覽じて、参りぬべかめりとおほして、

今上昨日は珍らしきなむ。雲の色とか。

たつ雲をいろくみだる風といへどいづる月日をかざしやはする

悦とかあるは、おほろけの志にやは。この宮一人によりてなむ、數多の親にも恨みられ奉りぬる。下にはまがくしげなりや。今傍も羨ましとこそ思

(語釋)
(一)それらも皆御身を愛するからの事

(二)立太子の事につきて

(三)脱文あるべし

(六)あて宮の方

(八)あて宮に

(語釋)
仲忠、あて宮の御方に伺候す。東宮参内の用意(考異)
(四)月日とか作るは一月と日レは
(五)給ひて一給ふ
(七)参り給ふ一参り給ひ
(九)言ひつがせ一取りつがせ

へ。それらも皆。

(二)とて、これはたの藏人して奉り給ふ。喜びて持て参れり。大宮もおはす。見給ひて、大宮「嵯峨院も、聞え給ふ事あとり聞きしぞかし」と宣へば、女御の君、あて宮の(三)ところきけ。怪しくも」とて笑ひ給ふ。御返、
あて宮「承りぬ。月日とか侍るは(四)いづれともくもへだつれば月も日もさやけく人に見ゆるものかは
それも御心にこそは、と承りしかば。
と聞え給ふ。

かくて東宮の御讀經に、物のはじめなりとて、僧綱たち、名ある智者どもなど召して、論義などせさせ給ふ。大將参り給ひて、夕つ方、西のおとどに参り給ふ。寶子に衲まるり給ひてこれかれ物聞え、大將、女御の君に物聞え給ふ。孫王の君して御いらへなど言ひつがせ給へば、大將、仲忠「今はかく、ありしよりも親しく仕

(語釋)

(一)御取次なしに御話の事したし

(二)立太子の事に關して

(六)兼雅の許に

(七)朱雀の后宮

(八)孫王の君

(一〇)「思すとて」となるべし

(考異)
(三)さても一はなぞて

(四)なく一なくなむ

(五)所々より一に上り

(九)者ぞともぞ思し出づる一ものぞと思しつる

うまつるべく侍るを、路し無くとも承りなむ。さても先つ頃、世中にあやしき事を申しけるを、いかに思ふ給へるならむと聞召しけむことをなむ、此處にも彼處にも、限なく思ふ給へなけきて、誰々もまかりありきもせて侍りつる。所々より、かの三條に、とかく宣はする事なむありける。さる心も思ひ知れとて、かの宮消息にて侍りし、事定まりて御覽せさせむとてなむ、まだ失はで侍る」とてこの君して、宮の御文を奉り給ひて聞え給ふ、仲忠「かくも聞ゆまじけれど、昔の志、うしなはず、今行くさき頼み聞ゆることもなほ侍れば、うたてある心も持たる者ぞともぞ思し出づる」と聞え給へば見給ひて、大宮なども、いと恐ろしくもありけるかなと思す。大將、仲忠「御覽じてば賜はりなむ」と聞え給へば女御の君、かく書きて出だし給ふ、
あて宮くる春を雲に知らせずなりにせばふちも絶えぬる松にやあらまし
大將、見給ひて、

- (一) 正頼
- (二) 東宮
- (三) あて宮へ
- (四) 居處の近きをいふ
- (五) 未考

あて宮、實忠にそて君を入内せしめん事を勤む。實正の賛成。

仲忠 巖のうへの種よりまつと聞きしかば縁もはるぞふかく知るべき
 など聞え給ふほどに、大殿おはし合ひて、内裏に宮参り給ふべきことを定め給ふ。
 十月十五日、女御もろともに参り給ふべしとて、あるべき事どもみな定め給ふ。か
 くてみな参り給はむとて、童下仕とよのへ、六人三十人、わらは八人、唐綾のあを
 色の五重がさね、縁のうへのはかま、下仕八人、檜皮の唐衣、うちぎども著たり。
 かくて出で給ふに、三條の新中納言殿より御文あり。

實忠いともく、思ふやうなる御慶は、まづ自ら参りて聞えさせむとせしを、
 忌々しけなる様に思ふ給へつとみてなむ。「近うさふらはど」とか宣はせし
 を、陰踏むばかりにて久しうなりぬれど、いとおほつかなくて参り給ふべか
 なれば、あさづまの心地してなむ。
 身をすてし山邊にもなほあるべきをいまもまどはす君にもあるかな
 宣はせむまよにと思ふ給ふること心ならぬ様にも。

(詠釋)

- (一) 東宮の事
- (二) 季明
- (三) 實忠が
- (四) 實正
- (五) ぞて君
- (六) 今上へ
- (七) ぞて君
- (八) 我が娘の如きは

(老異)
 (一) 宮の御事は見給ひつ宮の君の御事は
 (六) けりナシ

と聞え給へり。見給ひて御返。

あて宮の御事は、あしきやうに言ひ騒ぐなりしかば、いと昔の人のものし
 給はぬをなむ、哀に心細く思ふ給へし。今も心ゆるびなく、恐ろしき世な
 れば、御宮仕などし給ひて、後見きこえ給はど、頼もしうなむ。民部卿殿に
 聞ゆる事ありしや。聞き給ひけむ。なほおほし立たば、よもうしろめたうは。
 と聞え給ふ。見給ひて民部卿殿の物し給ふに、實忠「かよる、何事にか侍る」と聞
 え給へば、實正「そよ。然る事ありけり。姫君の御事ぞや。睦まじき人奉らまほ
 しきを、事々しくはあらで、忍びて局に物し給ふやうにてまるらせ奉り給へ、
 と聞えよ」となむ、女御になり給ひし慶に、かしこに物する人のまうでたりけ
 るに宣ひける」中納言、實忠「苦しや。前々のやんごとなき人をだにも、あるもの
 ともし給はざるものを、これらは何の事にかあらむ。親の人並々にて勞るにこ
 そ、女は人とも見ゆめれ。かよる徒ら人の子をば何にせむ」民部卿、實正「それは

〔語釋〕
 (一)今上が
 (二)他の女御たちと申あしければ
 (三)あて宮が身を入れて世話したらば
 (四)季明の聲
 (五)入内の世話すべし
 (六)今の御妾たちの中に
 (七)祓澄
 (八)二の宮なるべし、
 (九)三の宮なるべし、
 (一〇)返事するなど煩に言ひつけ置けり
 (一一)朱雀院
 (一二)誤あらんか、一本
 (一三)その折は「又」その折々は
 (一四)見給ふるに「きき」給ふるに「ききこえ」給ふに

然しもあらじ。かの女御の御心に入れ給ふと見給はゞ、いと哀にぞ思さむ。前々の人はあれど、みな中どもの悪しければ、女御も心解けず物し給ふなれば、それに隨ひて、上もものし給ふを、彼處に勞り給はゞ、いとよくぞあらむや。この御服はてて、四月ばかりに裳など著せ奉り給ひて、出だし奉り給へ。己らも、もろ共にこそ参らせ奉らめ、たゞの人の然りぬべきもなし。宰相中將こそは、昔より志有るなどあめれど、見給ふるに、物思ふ人にこそ。然あらぬわかき人々は、數多あれど、然せむやは「中納言、實忠」この日頃は、五の宮の御文とて度々見ゆれど、世の中の煩はしさに、「物な聞えそ」とてぞ侍る。民部卿、實馬、それは然るあだ人にて、女ありと聞く所にては、然ぞ宣ふるなる。朱雀院の二の宮をも思ひかけ給ひて、入りなどし給ふなれと、男御子つどひて、夜晝遊をしつゝ、起き居給ふなれば、上も、それ聞召すとておはしますなれど、さりとて、帝の御前に参りなどし給ふなれば、その折には人こむ、とて兵をまうけてぞ待ち給ふな

〔語釋〕
 (一)正類
 (二)用心せねば
 (三)忠康が女二を捨てたらば
 (四)女二宮の堅固の人数に加て
 (五)女二
 (六)平頼が番人とたのむ積の人の中にも
 (七)明々の處におきこ比較すればよく思はると女も
 (八)そで君はあて宮に明段寄るまじ
 (九)あて宮は
 (一〇)あて宮をいふ
 (一一)地爐敷、一本「ふる」
 (一二)多かめれば「多かん」なれば
 (一三)生憎心「あやにて」
 (一四)宣ふ「申し給ふ」
 (一五)こそは「は」ナシ

る。一日、左の大殿の宣ひしは、「後の宮の、よくもし給はずば、この御子して、名を立てさせて、恥を見せ、棄て給ひなばいかどせむ。子どもよりはじめて、いくらもあらむ人を申し加へて、この御子まかさせ奉り給へ」と宣ひしかど、たのみ給ふ人の中にも、然思ひたるも多かめれば、如何にあらむ。かく生憎心おはする宮なれば、よろしと聞き給はゞ、たゞ入りに入りおはしなむ。なほ然思はせ「實忠、いさや。所々にて思ほし合せむに、恥かしけなるものも、同じ所にて見くらべ給はゞ、土と玉との如こそあらめ」實馬、いで、何か、この君ことに劣り給はじ」中納言、實忠、いみじきことをも宣ふかな。如何ならむ人とか思す。女一の宮こそ、おとり給はずと聞きしか。それも向ひ居たまへりしかば、氣劣りてこそ。世に類あるべき人にもあらずや」民部卿、實馬、かたへは見なしなり。思ふ人は然ぞ見ゆるや」實忠、吾君は、あやしき御族にこそは「など宣ふ。」

畫詞

こよは三條の西のかた。民部卿、中納言、物まるる。御前に、ちろし

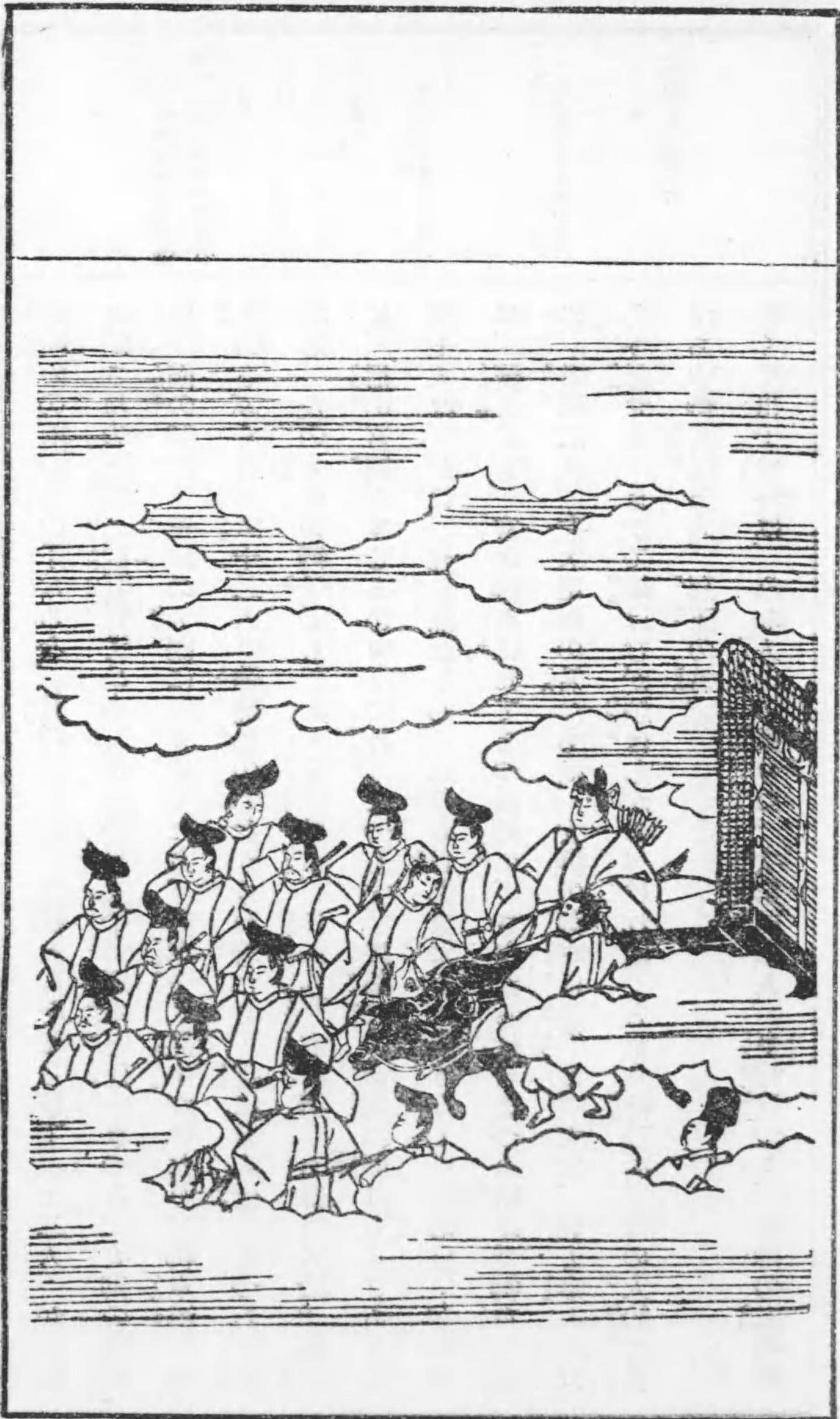
話釋
 (一) すみ物 殿
 (二) 見給はどなるべし
 (四) 内々は夫婦の中は元の如くになれるを知らずやの意
 (五) 東宮
 (七) 宮の 衍文 殿
 (八) 誤あらんか

東宮もて宮内。行列仲頼の妻と其の母、見物の中にまじりて行列を觀る。

(考異)
 (三) べけれどーべけれど
 (六) 銀の箔ちらしたる白袴 白かさね白はかま

て、まがりなどして物調ず。割籠(一)する物あり。これは東のかた。御簾のうちに、北の方臥し給へり。姫君物まるる。おとな童多かり。姫君の御乳母のいふ、「上の、うちはへ惱み給ふを、おとどの氣近う見給へば、如何なるごとも聞えつべけれど、もて離れ給へればこそ」まさご君の乳母、「昔の根這ふらむとも知らずや」姫君「あな聞きにく。何事ぞや」など宣ふ。

かくて東宮参り給ふ日になりぬ。御車、宮の御方に十、女御の御方に二十、絲毛六つ、擗椰毛二十、うなる下仕、車二つづつ、人給どもは、これかれ出だし給ふ。車の口付ども、装束どもとよのへ、容貌もえらびて、十人づつ付たり。宮の人給は、裾のきぬ、冠したり。あるは銀の箔ちらしたる白袴、あるは薄色の下襦(五)。裾濃のはかま、心々にせられたり。女御の御方の人給は、狩装束、車ごとに心々なり。かくて、東宮の御車は東の大路の前、大宮の大路に引き立てたり。宮の御車はあかすけにて、輦の大なるやうなり。黄なる御車牛かけたり。御車添(七)は



〔語釋〕
 (三)「おほき」と「御族」なるべし。忠雅の
 一門の人々

〔四〕東宮

〔考異〕
 (一)線鞋靴—ふかやう

(二)黒牛—黒うて

嵯峨院の庵の人の子なるを、長ひとしく、容貌あるをえらびて、十二人、かいねりがさねの下襲(二)線鞋靴はきて、後には宮の藏人、所衆ぞ仕うまつる。女御の御車は、南の御門、三條の大路にひき立てたり。御車牛、黒牛かけたり。御車添、御方のさぶらひの人十二人、葡萄染のしたかさね著たり。後に廿人仕うまつる。上達部、左の大殿の御子ども三人、源中納言、良中將、右大辨、おほき大殿。御族は、後の宮聞召すことありとて仕うまつらさず。民部卿の御族は服なり。さあらぬ殿上人は、四位、五位無きなし。六位も目あきたるは無きなし。宮おはしませば、藏人ども、宮の御車にたてまつる所に、さながら仕うまつり給ふ。御車の後に、乳母二人、左大臣殿の君たちは、女御の御車に奉る。大宮、いと参らまほしう思せど、まかで給はむが煩はしかるべければ、とまり給ひぬ。一の人給は宮たちの御乳母三人、孫王の君。かくて出で給へば、みな人馬に乗りぬ。次第司二人、事行ひつと、女御の君の御

〔語釋〕
 (四)仲頼

〔考異〕
 (一)乗りたれど—乗りた

(二)うちまぜ立てたり—うちまぜて立てたり

(三)ごとくなる御前に松明—ごとく御前まつた

車の次には、御櫛匣殿の人だまひさながら立つ。その次に、よろづの宿徳乗りたれど、女御の御方の人だまひの後にぞ立てける。宮たちの御乳母のいふやう、「同じ御腹に生れ給ひつる同じ宮に仕うまつれど、如何なる人の、一の車に乗るらむ。我ら如何なれば、宮のをさめ、御廁人の後に立つらむ」と腹立つ。孫王の君、「かの宮をかしづき聞え給へばぞや」と言ふ。大宮の大路よりのほり給へば、おほくの左右の物見車、うちまぜ立てたり。夜静に月の光晝のごとくなる御前に松明ともしたり。絲氣の車には御前六人、檳榔毛には四人、火ともせり。車の簾高くあけて、後口よりこほれ出でつと乗りたまへば、装束、容貌、あらはにめでたし。物見車、大將と中納言とを見て言ふやう、「これは、名だたりし涼、仲忠ぞな。めでたくもなり勝りたるかな」といふ。右大辨を見て、「これは藤英ぞかし。生きながら、人の身變るものなりけり。この世にも淨土はありけり」又ある女良中將を見て、「これは行政ぞな。いとみじく清らなりや。あはれ源少將法師あらまし

〔語釋〕

(三)仲頼

(四)あて宮

(五)仲忠

(六)仲頼

(八)仲頼なればこそ

〔考異〕

(一)はやーをや

(二)はやーぞや

(七)かの君は「は」ナシ

(九)むれつる「むれくる

かば、如何ならまし。容貌心めでたかりしはや。手をかき、歌をよく讀みしはや」
 と車ごとに言ふ。少將の妻母、ひとつ車にて物見る。母、「わが聲の君をほろほし
 給ひてし人の、めでたくて物し給ふかな。斯かりける幸人を、思ひかけ給ひけ
 るぞ、おほけなきや」女、仲頼妻「さればこそ、死に入りて久しかんめりしか。山へ入
 るとてこそ生き出でたりしか。そのかみ侍従なりし人だに斯くなり給ふめれば、
 (五)かの君は、今は大臣にもなりなまし」母、「かの大將のやうに、いかで。宰相など
 (六)(七)には然もありなまし。されど、君なればこそ、かよる君たちの、うち羣れて、深
 き山邊を尋ねて、いみじう志をしてとぶらはれ給へ。その御徳にぞ、かよる面
 白き目をも見れ」とてみな泣く。女、
 仲頼妻かたらひてむれつる鳥を見る時ぞのこれる袖も朽ちはてぬべき
 (九)母、
 袖のみやくちははつらむ君なくてみも見る効のみえずもあるかな

〔語釋〕
 (三)あて宮が帝の所へ

〔考異〕

(一)二人は「は」ナシ

(二)御供人など「二十

人」と

(四)御物語「御物語に

(五)給ひつゝ「給ふかつ

がつ」給ひつゝかつ

(六)間の「間を

今上、あて宮并に其腹
 の皇子たちを寵愛せら
 る。登華殿懐胎。

などいふほどに、御前は中の御門にいたりぬれば、後は宮まだ近し。
 かくて参り給うて、まづ東宮入り給ふ。御車に、乳母二人はさふらふ。今二人は、
 藏人御供人などと歩み入り給ひぬ。梅壺におり給ふべしと、輦の宣旨申して、
 (二)女御入り給ふ。御輦にては、宮たち、いま宮の御乳母、孫王の君さふらふ。後に
 おとな六十人ばかり、わらは、下仕あゆみ、四位五位具したり。こと君たち、皆
 おはす。かくて藤壺におり給ひぬ。御おくりの人、男女まかで給ひぬ。

〔畫詞〕

こよは東宮まわり給ふ所

かくてまう上らせ給ひて、月頃の御物語、おそく参らせ給へる事など、かたみに
 聞え給ひつゝ、まだ御殿籠らぬに、「丑二つ」と申すに、女御下り給ひなむとすれ
 (五)ば、今上「しばし待ち給へ」とて、今上「この頃の夜は、かう言ひてもまだ暗し。
 今上「獨りねし夜はまぢかねし時の間の疾くもこよひは思ほゆるかな
 明けがたかりしものかな」と宣へば、女御、

〔語釋〕

(三)未考

(四)あて宮腹第二皇子

(五)あて宮腹第四の皇子

(七)今上

(八)今上が

〔考異〕

(一)とくはうくも

(二)うたてくうたてろ

(六)女御ナシ

あて宮夜々は知りけるものをこよひしもなほさへとくはなどか聞くらむ
上、今上「うたてくも言ひなさるよかな。さりともし「うちなす鐘の」など宣ふほど
にあかくなれば急ぎ下り給ひぬ。すなはち御文あり。
今上只今は、
歎きつよふる夜もあれど朝ほらけおきつる霜のわびしかりつる

女御、

あて宮明けぬれば雲のうへにもとまらずておきゆく霜の寒きをぞ知る
と聞え給ふ。

二の宮、赤らかなる綾かいねりのひとへがさね、織物の直衣、襷がけの御はかま、
今宮、こもんの白きあやの御衣一かさね奉りて、襷かけて、いとをかしく肥
えて、這ひありき給ふ。女御、上わたらせ給へば、みな出だしすゑ奉りて、乳母
たちは、御几帳の後に並み居て、いづれの宮をかまづ抱き給ふと、挑みかはして

〔語釋〕

(一)「えう(整)しかけたる」なるべし

(六)あて宮の妾内が此の子故に遅なはりし故

〔考異〕

(二)やり給へやりて給へ

(三)我ナシ

(四)これも類の人ぞこれ

はたゞの人ぞなど

(五)とて「ナシ

(七)罪をも負ふまじき

罪も思ふまじき

(八)かきナシ

(九)夜うさり「う」ナシ

見るに、二の宮あそび給ふをかき抱き給ひて、御膝にするて、かき撫でつよ見給ふ。
御髪はやうしかけたる様にめでたし。肩うち過ぎたり。御容貌いとめでたし。う
へ、今上坊をこそ、まづ見むと思へ。呼びにやり給へ」と聞え給へば、あて宮「い
ま、今日明日過して」と宣ふ。今宮の御乳母、いとねたしと思ふ。二の宮のは、
乳母「されば我こそ」とて誇る。今宮、なに心もなくたゞ笑ひに笑ひて、二の宮に
這ひかより給へば上、今上「これも類の人ぞ。これも憎くはあらねど、いたく我に
物を思はせつるや」とて宣ふ。
今上二葉にもまだ見えざりし玉かづら這ふまでまつぞ久しかりける

女御、

あて宮まつだにも苦しからずば玉かづら立つをぞ君に見せむと思ひし
うへ、今上「おそく参り給ひしかば、これをいと憎く、見じと思ひつれど、親の罪
をも負ふまじきものかな」とてかき抱き給ふ。おはしまし暮らして、今上「夜うさ

〔語釋〕
 (一)左衛門督の君に歎、忠澄なり
 (二)東宮を
 (三)東宮を
 (四)東宮を
 (五)今上が
 (六)今上が
 (七)今上が
 (八)今上が
 (九)今上が
 (一〇)今上が
 (一一)今上が
 (一二)今上が

りまう上り給へ」とておはしましぬ。
 まう上りて下り給へば、今与坊呼びてす忍給へれ。こよに物せむ」と宣ふ。下り給ひて、左衛門の君に、「わたし奉り給へ」と宣へば、大殿、上人などしてわたり給ひぬ。知らぬ顔にてわたり給へば、いとくおとなしう、紐ついさしてさふらひ給ふ。御髪は居長にて、いと氣高う清らなり。今与けにこれは、聞きつるやうに、たどの人には見えざりけり。親にこそいとよう似たりけれ。あいなう心さへ似るかな」と宣へば、女御、あて宮「いかど然は侍らむ」上、今与人のえもどくまじう、心強くこそは」と宣はす。
 (一)坊一坊を
 (二)これは一見れば
 (三)いかど一いかどは
 (四)もどくまじう一もどかるまじく
 (五)かく一かくて
 (六)候ふ一ナシ

〔語釋〕
 (一)女御たちを
 (二)昭陽殿
 (三)登華殿が

〔考異〕
 (一)巡にて一女御巡にて一女御
 (二)まう上り給へと申し給ふことなし
 (三)はらみ一にんじ
 (四)帝も一も一ナシ

ありてこそ、院にも騒がれ奉りしか」など宣ひて巡にてまうのほらせ給へば、いと花やかになまめかしくもてなし給ひて、世中まつりごとも、いとかしこうせさせ給ふ。御學問に心を入れて、御遊も常にせさせ給ひて、いとおもしろうし給ふ。梨壺は、なほもの宣ひなです。他人は、まうのほり給へど、殊なることなし。人の御宿直の夜も、藤壺の御ためには、然るやうにもあらずもてなし給ふ。四の宮は、藤壺参り給ふべしとてまかで給ふに、さがなものはまだ参り給はず。式部卿の宮のは、女御にならずとて、父宮おほし嘆くと聞召して、度々召しければ、登華殿「如何はせむ」とて参り給へれば、輦ゆるされ給ひぬ。時々まうのほり給ひ、晝も時々わたらせ給ふほどに、十月ばかりよりはらみ給ひぬ。父宮、すこし嬉しと思す。
 (一)ありてこそ、院にも騒がれ奉りしか」など宣ひて巡にてまうのほらせ給へば、いと花やかになまめかしくもてなし給ひて、世中まつりごとも、いとかしこうせさせ給ふ。御學問に心を入れて、御遊も常にせさせ給ひて、いとおもしろうし給ふ。梨壺は、なほもの宣ひなです。他人は、まうのほり給へど、殊なることなし。人の御宿直の夜も、藤壺の御ためには、然るやうにもあらずもてなし給ふ。四の宮は、藤壺参り給ふべしとてまかで給ふに、さがなものはまだ参り給はず。式部卿の宮のは、女御にならずとて、父宮おほし嘆くと聞召して、度々召しければ、登華殿「如何はせむ」とて参り給へれば、輦ゆるされ給ひぬ。時々まうのほり給ひ、晝も時々わたらせ給ふほどに、十月ばかりよりはらみ給ひぬ。父宮、すこし嬉しと思す。

- (一)正頼に御相談なくて
- (二)實忠
- (三)實忠
- (四)實忠
- (五)實忠
- (六)實忠
- (七)實忠
- (八)實忠

新年、菅原忠保修理頭に任ぜらる。滋野眞菅父子放されて召還さる。女四宮皇子を産む。

- (一)あるべき一なるべき
- (二)定め……ならぬは
- (三)定め……ならぬは
- (四)定め……ならぬは
- (五)定め……ならぬは

事も、宣はせではし給はず、奏し給ふことも否び給はず。おとども、公の謗とあるべきことは定め給はず、やんごとなき事ならぬは奏し給はず。右の大臣をば、心憎き恥かしきものの心ある人にし給ふ。右大將は、公私にも、かしこきものに思はれ給へり。然あらぬ人も、調ひたり。新中納言、よろづ人に惜まれ、上も、これ宮仕せさせてしがなと思す。

かくて年還りぬ。朔の日、朝拜きこしめす。二日、朱雀院、嵯峨院に参り給ふ。三日朱雀院に行幸あり。大將、思ひあるべければ、かうぶり賜はせず、やくなきものどもに賜ふ。これはた、かうぶり賜はりぬ。次々の節會どもも、みな聞召す内宴には、平中納言殿の御息所なり。容貌も清けなり、ある中に下臈にてまかなひ給ふ。

司召にもなりぬ。女御奏し給ふ、あて宮内卿忠保朝臣は、よき官はえ賜はるまじき人にや侍らむ」うへ、今上然も聞えず。よろしき人なめるを、嵯峨院の御た

(一)あて宮の侍女兵衛がわが親の身寄なればとて

- (一)侍るなるにやは一侍るにや
- (二)眞菅さけしき人に侍りしかど一眞菅はさかしき人に侍りしかば
- (三)かの男どもの一あの男どもが
- (四)四の：大后宮一嵯峨院の四の宮男宮うみ給へり父みかど大后宮
- (五)いと一ナシ

めに過したること有りて沈むとこそ聞きしか」女御、あて宮「さ侍らば、いと哀にて侍るなるを、修理頭のおきて侍るなるにやはなさせ給はぬ」うへ、今上「など、勞るべき様やはある」女御、あて宮「さも侍らねど、兵衛が親がたにて、常に申さずれば」など聞え給へば、なされぬ。世の中に「いみじき官得つるものかな」と驚きさわぐ。左のおとど、よき折に奏し給ふ、正頼「このはなち遣はしてし、滋野眞菅さけしき人に侍りしかど、その罪を、後まではかうぶり侍るまじ。かく御世のはじめなどには、天下の罪あるものを免させ給ふなる。かの男どもの、哀にて侍るなる、召につかはさむは如何侍らむ」うへ、今上「ともかうも知らざりし事なり。これかれよろしう定められて、あるべからむ様に物せられよ」と宣へば、喜びて、みな召に遣はす。

かよる程に四の宮男御子生み給ひぬ。大后宮、斯かりけるものを、今しばし、坊定まらざらましかば、と思す。御産屋いとなく、所々より御産養例の作法な

り。三條院よりもいかめしう仕うまつり給ふ。

【書詞】 ことは嵯峨院の四の宮の御方。

かくて修理頭は、覺えぬ喜して、驚きよろこぶこと限なければ、出でてありかむとするに、年老い、牛車、装束もなし。直衣装束は、女著せたれど、上のきぬは無し。女紀念にせむとて少將の装束一くだり持たりける、取う出たれど、うへのきぬは元より無し。とかうたばかり程に、三日も過ぎぬ。辛うじて、所々に慶申すと言ふ、忠保「こよらの年頃、公に捨てられ奉りて、諸資財を賣りて、世になくしく佗しき目を見て、わづかに侍る女の童の夫に侍りし山伏の、昔の衣をぬぎ松の葉を包みて、深き山よりとぶらひ侍る物をわかちて養ひ侍るにかよりて、一人の従者も侍らず衣裳も侍らで籠り侍るを、明王の出でおはしまして、斯くまかり浮びたる慶を、すなはち申さむと思ひ侍りつれど、とかくの事ども出で侍りつる程に、今までになり侍りにけり」と申すを、他人はなほ聞き給ふ。左のお

〔語釋〕
(六)右の「もと」の誤

〔考異〕
(一)なければ「なけれど」
(二)物をわかちて「をもちて」

(三)侍るを「侍るに」
(四)申さむ「奏せむ」
(五)とかくの事ども出で侍りつる程に「かくの如くはていし侍りつる程に」

〔語釋〕
(一)修理頭を望む者他に數多あり

(二)師澄

(五)仲頼の妻

(一)「あて宮へ」

(二)「近澄などに取次を頼みて」

〔考異〕

(三)「主」まし

(四)「仲頼の」の「ナシ」

(六)「もの」ものにて

(七)「亡ぼして」て「ナシ」

(八)「天上の天女をも持てならさすめれば」天下の仙人も御目ならさめれば

(九)「女御は」は「ナシ」

(二〇)「思して」て「ナシ」

とぞ 兼雅「けに、いと怪しう沈み給ひつるを、如何に思はれつらむ。此御慶は、兼雅らにはえ宣はじ。東宮の女御になむ返すく申さるべき。かの女御こそ、度々申されけれ。他人あまたあり、かの御同胞の左大辨、兼けて仕うまつらむ」と切に申されけれど、主を申しなされけるとぞ聞きしか「修理頭、おどろきて、忠保「何の故にか、女御然奏せしめ給ひけむ。私事には侍れど、仲頼の朝臣の、山にまかり籠りしも、かの女御によりて」とて、童への佗び申すことを、聞召すところや侍らむ、と畏まり侍る。忠保は、「男の好色といふものは、怪しきものに侍れば、おほけなき心の侍りて、身をも亡ぼして侍るにこそあれ。女御知り給ふべき事にもあらず」と愚なる心にも制し侍るを、身の便なきまゝに申すなり「おとど、兼雅「男の好色は然ぞあるや。女あるときけば、天上の天女をも持てならさすめればにこそ。かの女御は有識にて、さやうの事を思して勞られたるにこそはあらめ。新中納言御兄弟を越してこそは物せらるなりしか。彼處に、藏人の少將などして、

申させ給へ」と宣ひつ。

〔畫詞〕 ことは右大臣殿の御方。修理頭年六十ばかりなり。宮、おとどに梨壺の御文見せ奉り給ふ。女三「この頃は、なまうで給ひそ。藤壺、隔てもこそ思せ」兼雅「今衣更の程にもものせむ」とて、生れ給ひし宮の、脇息をおさへて立ち給へるを、抱きてありき給ふ。

〔語釋〕
(一)兼雅が
(二)梨壺腹の皇子
(三)中の君等をおきてある處

仲忠、母を訪ふ。女二宮の囀。
(五)「こうじがくれは小路障」歟、一本「こしがくれ」文、かうしかぐれ

(六)仲頼の妹
(七)女一宮

〔考異〕
(一)年一ナシ

かくてかんのおとどの御方に、大將まうで給ひて、仲忠「なほ申すべき事の侍るを、疾くわたり給ひなむや」北の方、俊隆女「此の晝ぞまうで侍りぬる。夜はことにもとまり給はず。かの宮見奉りにぞ、かく晝間には」大將、仲忠「この東にはものし給ふや」北の方、俊隆女「わざとにはあらで、夕暮、夜の間にごうじ隠せらるなるや」大將、仲忠「然思すべき人にこそは。年頃いかに思ひつらむ。かの按察使の君なども、いと目やすき人にぞありける。かよる人どもを見捨てて、いかで物し給ふらむとこそ。屢、まるり來べきを、かしこに疑はしき程になり給ひぬるを、人少に

〔語釋〕
(一)仁壽殿
(二)仁壽殿腹女二宮

(三)五官以外の人も、「さちぬも人知れず」なるべし

(四)とても奪取ることは叶はぬものと

(五)「大事」は「御車」の誤なるべし

て、心細けにおほしたればなむ、まかりありきもえせぬ」北の方、俊隆女「けにさぞなり給ひぬらむ。参らむとするを、按察使など、憎しと思へば、恥かしくてこそ。院の上は、などか今まではまかで給はざらむ」仲忠「いさや、かの二の宮を、五の御子の、世を世ともし給はず、帝后も物聞え給はぬ人の、いかで取らむとのみし給ひて、まかで給はどもかくもせむ」とのみあれば、里にもえ。然らぬ人知れず盗まむ、入らむ」とのみあなれば、それに怖ちて、えまかで給はぬぞや。藤壺の、さばかりのよしられ給ひしかど、情づき、人の御返事申しつぎ、えすまじきは、さてこそあらまほしくてえ給ふなりしか。これは物驗がしくぞあるや。「さては得ぬものと懲りにたるにこそはあらめ。然てのみあらむやは」とて明日ぞ、これかれ大事して迎へ奉り給へるなる」と聞え給ふ程におとどおはしぬれば、御物語など聞え給ふ。

〔畫詞〕 ことは右大臣殿。

正頼、女二宮女四宮を自邸に迎ふ。祐澄近澄等女二宮を途中に奪はんとして成らず。

〔語釋〕

- (一) 女二宮の迎に正頼等
- (二) 「忠澄ら参りて」なるべし
- (三) 勿體ぶりに居る間に
- (四) 實は祐澄がかねて
- (五) 實は祐澄が居る也
- (六) 近澄
- (七) 賢正、涼、藤英

〔考異〕

- (一) 然れど一さば
- (二) 大事は「大事の」
- (三) 「ば」ナシ
- (四) 胡篋を負ひたる男ども
- (五) 胡篋を負ひたるもの
- (六) 胡篋を負ひたるもの

かくて、御迎に、おとど、君たち出で給ふ。左衛門督の君、忠澄、何か。まるり給はずとも、忠澄は参りて、まかでさせ奉りてむ」おとど、正頼「然れど、一所をだに、我らかしづき奉るべし。況や、七所の孫の宮たち迎へ奉りたらむに、何の事かあらむ。宿徳つくらむ間に、事惹き出でては、え効もあらじ。我主たちの御心もしらず。わかき男女、同胞と具し給ふ、やすく思ふべきにもあらざりけり」と宣へば宰相中將うち笑ひて、祐澄聞召し懲りたる事やあらむ。さやうに好いたる人も、今は侍らぬものを」とつれなく言ふ。下には、いかでこの折に盗まむ、と思ひたばかる。藏人の少將は、物も言はで、下りて入り給ふらむほどに、入り臥しなむ。まさに殺されむやは。又、さらば然て死なむ、と思ひおはす。かくてみな出で立ち給ふ。おとど、正頼「私の大事は、この事にまさるはあらじ。此の事かく同じ心にし給はざらむをば怨み申さむ」民部卿、源中納言、右大辨、まうで給ふ。上達部は御馬にて御前、弓、胡篋を負ひたる男どもあまたして、衛門督

宰相などは御馬にてまうで給ふ。

〔語釋〕

- (一) 奮固の武士あり
- (二) 朱雀院
- (三) 女一宮懐胎中也
- (四) 忠澄
- (五) 誼あらんか、五宮をいふなるべし
- (六) 心得違したる様なるは如何

〔考異〕

- (一) 入り給ふ一入り給ひ

朱雀院の御門には、後の宮おはすれば陣居たり。御車も寄せさせず。御門にひき立てて参り給へり。上おはします。女御、仁鸞、まかで侍りて、御産平かにもものし給はど、いと疾く参り侍りなむ」うへ、朱雀、かく大事とて物せらるれば、頼もしきものを。されど、今日やんごとなき迎人ども、頼もしくあめれば。男御子たちは、な率て物し給ひそ。いと騒々しからむ」と宣ふ。上おもほす御心ありて制し宣はせて、御車、近う寄せさせ給ふ。左のおとど、右大將、左衛門督、近くさふらひ給ふ。五の宮いとしどけなき氣色にて、上立ち給へる御前より、二の宮の御許へ、たど入りに入り給ふ。今、何方にぞ。あな騒がし。かのおほいまうち君は「大將の朝臣の見給ひて、仲患いと怪しからずや」とて引き留め給へば、涙をながして、たど泣きに泣き給ふ。今、など御子のあやまりて見ゆる。思ふ心あらば、我にこそ言はめ」と宣へば、涙を拭ひてさふらひ給ふほどに、皆ひき連れて

〔語釋〕
(二)かひなくしき出立ちしたる者、女二宮を尊はんとせせし。

(六)仲思の心、祐澄近澄等はたくめる所ありと見ゆ

〔考異〕

(一)御前に―御前の

(三)ひたぶる装束―ひたぶるの装束

(四)寄り来べくも―寄るべくも

(五)なきに―なきを

(七)やごとなく―やんどなく

(八)見給ひて―見て

出で給ひぬ。御車の左右には、おとど、大將の御車をひき並べて、御前に君だちうち圍みておはしませば、こよかしこに、ひたぶる装束したる者ども、うち群れつよあれど、寄り来べくもあらねば隠れぬ。

大將、宰相の中將、藏人の少將のなきに、これはみなたばからるゝ様あらむ、此

處をば離れぬ、彼等ぞ煩はしき、と思ほして、御車をひき別れて走り先だちて、宮

におりて、入りて見給へば、宰相の中將、かよる業の爲に片時に千里行く馬立て

飼ひ給ひけるに、鞍おきて、やごとなく睦まじう仕うまつり給ふ四人、狩衣に草

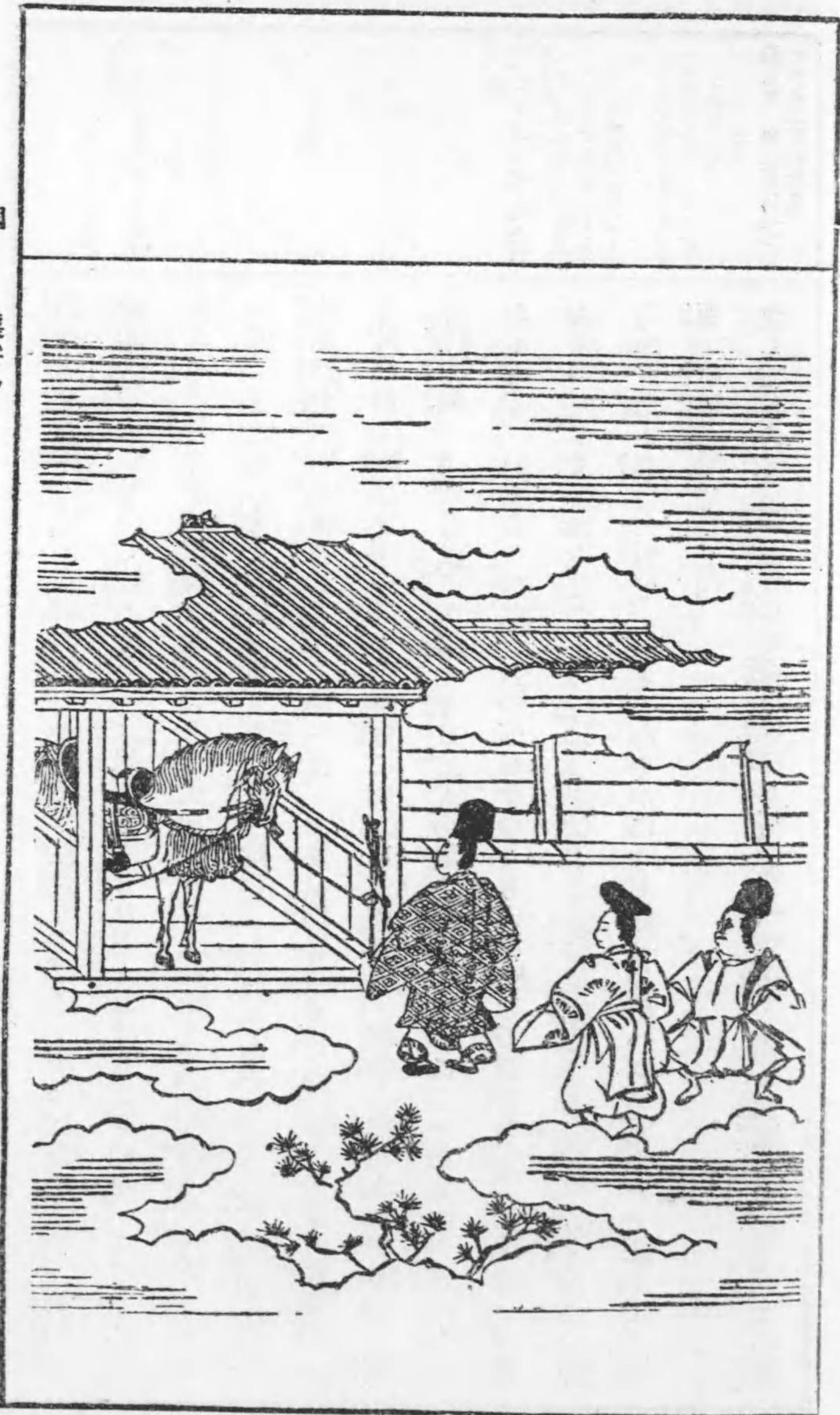
鞋はきて隠れ立ちたり。をかしと見給ひて、上にのほりて見給へば、御車寄する

程にあたりて、立てり。見ぬやうにして入りて、紙燭をさして、御帳の内その邊

をめぐりて見給へば、藏人の少將、直衣すがたにて、壁代と御障子との間に立て

り。いとをかしと見給ひて、待ち奉り給ふに、おはし著きぬ。

御車寄せて、御几帳さして、仲思はや下りさせ給へ」と聞え給へばおとど、左衛



〔語釋〕
(一)我は恥かしくもなけれど

(三)仁壽殿が

〔考異〕
(二)こそあらめこそは
あらめ

〔五宮 彈正宮に托して
文を女二宮に贈る。〕

門督と立ち給へば、女御の君、仁壽「あな見苦しや。こよには恥ぢ奉らず。物恥し給ふ人こよにもものし給ふめり」大將、仲忠「宮たちもおはしまさぬを、とてさふらふなり。仲忠をばな疎ませ給ひそ。火を暗うなさむ」とて御松明も暗うなさせ給へば、さる様こそあらめとて、まづ下り給ひて、宮たちおろし奉り給ふ。おとど、左衛門督、御几帳さして入り給へば、大將「後に立ち入り給ひて、やがて御座所へも入れ奉り給はず、一の宮の御方におはしまさせて、御帳の内に入れ奉りつ。宰相の中將、祐澄「こは、大將の今日盗人の氣色を見てするにこそあらめ。宮たちもおはせで、いとようたばかりつべかりつるものを」とて齒咬をして出でぬ。少將もすべり出でて去ぬ。つとめては、つれなくて皆出で來たり。大將「見合せて、いとをかしと思ひたれど、いとまめやかにうち語らひ給へば、氣色いと悪くて、宰相の中將「居たまへり。かくて五の宮、彈正宮の膝を枕にして、夜一夜、泣くく物語して、五宮「まろを

〔語釋〕
(一)女二宮
(二)彈正宮が
(三)君の御文の中に封入して女二宮に上げて下され
(七)人と宮たちにも「歎
(九)あて宮が嫌でもなかりしに何を憚りて手を出さざりしぞ
(一〇)「ありしぞ」なるべし
(一一)女二宮
(一二)女二宮を
(一三)賢忠の女そて君
(一四)妻にしてもよき器量と聞く
(考異)
(一)この宮一宮の
(四)宮に一宮の
(六)をば一をも
(八)にも一にぞ
(一四)聞きしは一聞きしが

ば、如何にせよとて、この宮をばまかでさせ奉り給へるぞ。かよる心ありとて、宮も月頃は見給はず、上もよからず思したれど、それも思はず。宮に、我を子にして助け給へ」など宣ひあかして、つとめて御文かきて、五宮「これ、御文の中に奉り給へ。まろをば、よも憎しと思はじ。皆人に憎まれぬ人を、宮たちにも思しつらむ」と宣へば彈正宮、忠康「こよにこそ、人に憎まれて獨りのみ侍れ」五の宮、「あな痴や。同じ心なりけむ人を、何につよみてたどにはあらじぞ。わりなくとも、物をだに言ひそめつれば、その人をこそ我いかでと思ひたれ。何れの男か、人を思ひかけて、それに憂くて一人はある。上の御心を思はずば、宮をも今までかく思はましやは。昨夜は、萬のこと覺えざりしかど、とらへて参り給ひにしかばこそは、え見合せ奉らずなりにしか」彈正宮、忠康「中納言の女のもとに、御文遣はすと聞きしは、それこそ人も見つべう聞ゆれ」五の宮、「よしと人の言ひしかば、文やりしかども、返事もせず」兄宮、忠康「なほそれを宣へかといふな

〔語釋〕
 (一)我も
 (二)女二宮を手に入れんと
 (三)女二宮を我に譲り給へ
 (四)「など」となるべし
 (五)五宮が頼む故差上る也と五宮の文を封入したることわりをいふ也
 (六)女二宮が

〔考異〕
 (三)思ひしを—思ひしかど—思ひしかども
 (四)この—二の
 (七)にや—にやは
 (一〇)まよひて—まどひ

り。此處にも斯くてのみやは侍らむ、いかで見むと思ひしを、然宣ふと聞きしかば、五の宮、「この御子を賜べ」忠康「それは譲り聞えむ」などて、五宮「この文を疾くく」と宣へば、二の宮の御もとに御文かき給ふ。
 忠康夜の間いかど。昨夜御送もえせずなりにしをなむ。平かにや。覺東なくなむ。

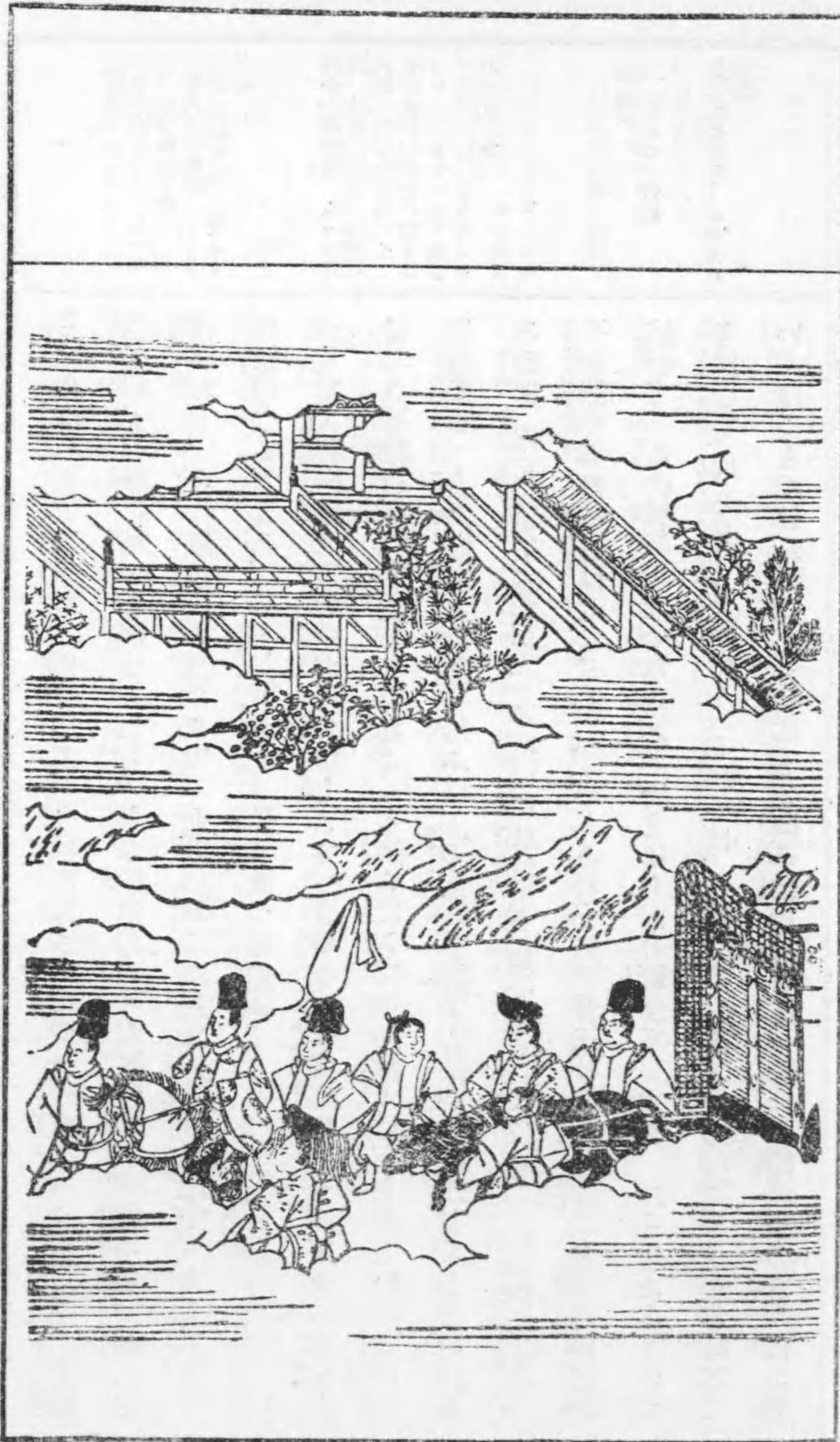
とて、

忠康これは、いと哀に宣へば、いとほしさに奉るなり。

とかき給へり。見給へば五の御子の御文には、

五宮よべは御供にと思ひしを、あさましく、上の許させ給はずなりにしかば、中空になむ。

かへり行く鴈のさとへと思ひしを雲にまよひてひとり音ぞなく
 今そこに参りこむ。別いても近き衛どもこそいと恐ろしけれ。



- (一) 語釋
- (二) 仲忠
- (三) 女一宮の安産
- (四) 忠こそ法師
- (五) 忠こそ法師
- (六) 大殿の「衍文歎一本大殿に」

御女一宮難産。人々の周章。仲忠の悲痛。正頼の同情。男子を生む。女二宮の乳母が祐澄の胎を受け、女一宮の御産の騒ぎに紛れて女二宮を盗ませんとせし噂。

- (一) 君には一君に
- (二) 御産屋を御産屋の

と聞え給へり。二の宮、見給ひて、女「あなうたてや」と宣ふ。女御の君、見給ひて、仁鸞「けに然もし給ひてまし。あな煩はしや」など宣ふ。宰相中將、藏人の少將など、今は氣色にも出ださで、女御の君には見え奉り給はで、まうで語らひ給ひつと、よろづの事志、ふかう仕うまつり給ふ。

かくて大將殿は、宮の平かにおはしますべき事を、神佛に申させ、所々に修法などせさせ給ひ、御産屋をありしよりも清らにして待ち給ふに、十月といふ上の十日過ぎぬ。人々心もとながり給ふに、中の十日も過ぐれば、萬のかしこしといはるる僧都、僧正、申し集めて、不斷の御修法七八壇せさせ給ふ。眞言院の律師して、孔雀經の御修行はせなどして、思しさわぐに、廿三日の晝つ方より悩みはじめ給ひて、その夜一夜なやみ給ふ。いとほしがり騒ぎて、大宮、かんのおとどわたり給ひて、明る日一日悩みくらし給へば、民部卿の北の方、大殿の、子産み給ひていくばくもなければ、あえ物にとて聞え給ひければ、わたり給ひぬ。宮の内より

- (一) 語釋
- (二) 女二宮を
- (三) 御氣がかりて
- (四) 女一宮をいふ
- (五) 后宮の機嫌を損ねまじとて
- (六) 女一宮は女二宮が朱雀院を下りし時の騒ぎを聞き居る故

- (一) 壺坂上るづの壺坂
- (二) 腹立ち一腹立ち
- (三) 死なむと手を打ちて一しとむと手うちて
- (四) 人々さわぎ一々多
- (五) この折に盗み出でむ
- (六) この折には盗みもして

はじめて、左右の大殿、朱雀院よりも修經の使、乗り連れて、行きちがひつと、初瀬、壺坂、よろづの所々にまうで、左右のおとど、御子たちも皆おはしましぬ。よろづの人、皆簀子に居並み給へり。

かよる折に、人々騒ぎてしづ心あらじと思ひて、例の君たちは、乳母を語りひて、萬のたから物を取らせて、「日だに暮れば盗ませよ。入れよ」とて暮るよを待ち給ふ。朱雀院には、帝やすくもおはしますす出で入り思ほし歎きて、おはしますとすれば、後の宮腹立ちのよしり給ひて、いみじき事をし給ひて、后宮「この盗人死ななむ」と手を打ちて宣へば、御心をやぶらじ、とてえおはしますさす。

五の宮、「彼處の人々さわぎたらむ。この折に盗み出でむ」とて日の暮るよをまち給ふをも知らず、女御の君よりはじめて、宮にかより奉り給ひて心まどひ給ふに、二の宮は、何心なくて西の方に人少にておはす。一の宮、まかで給ひし夜のこととをきと給ひにしかば、さるいみじき御心にも、女二の宮に「おはして我を見給

(語釋)
(四)女一宮が仲忠に止められて朱雀院へ行きざりしを

へよ」と聞えよ」と宣へば、然聞ゆ。宮あまたの御方々を恥ぢ聞え給ひて、まどひて泣くく入り給へり。女二「此方寄り給へ。わが許なしりぞき給ひそ」とてすゑ奉り給へるに、心知りたる人々は、いみじく泣く。その夜、いとおそろしく病みあかし給ひて、その日の晝つかたより、をさく物も宣はず、たどなへになへ臥し給ひぬ。女御の君聲も惜み給はず、ふしまろび泣き給ふ。大宮、「あなかまや。かく宣へば、いと湯水も参らすまどひ給へば、我も死なむと泣きこがれ給ふめり。あまた持ち給へる族にだに、斯く宣はするを、まして唯一人持ち給へる父母、如何聞き給ふらむ。誰もかよる目をこそは見しかど、今まではあらずやは」と聞え給へば、仁鸞「數多おはすれど、この宮をば、小くより、上の限なくかなしきものにし給ひて、寶持ちたる心地こそすれ」と宣ひつゝ、「年頃見ぬこと」とおもほし嘆きて、迎へ奉り給ひしにも、参り給はざりしを、いとくち惜しと思ほしたりしものを、今一度見せ奉らずなりぬるにやあらむと思へば、いみじう悲

(考異)
(一)恥ぢ聞え給ひてこえて

(二)給ひて給ひつ

(三)持ち給へるも給へる

(語釋)
(二)朱雀が

しうなむ。此の宮により奉りてこそは己を人とも思したれ。片時も、見奉らでは如何はあらむ」と泣きまどひ給ふ。朱雀院より御使、「只今も、いみじう聞きつるは、如何なる事にかあらむ。定かに宣へ。いとくち惜しく、年頃いとおほつかなく思ひつるを、斯くいふかひかななる事。只今ものせむとするを、男ども一人もなく、皆そこに物しにければなむ。心のうちに、己にあひ見むと念じ給へ。ここにも限りなく願し侍る」と聞え給へ」とあり。大宮、見給ひて、大宮「斯くなむ」と申し給へば、女二「ねたく、召しよ折参りなむとせしものを」と息の下に宣ふ。大宮、御返、
大宮「畏まりて承りぬ。おほせごと賜へる人は、この晝つかたより、物も宣はず。いと頼もしけなくなむ。かくても、平かにあるものとは思ふ給へながら、心細くなむ。かくなむと物し侍りつれば、参らずなりにける事」となむ聞え給ふ。

(考異)
(一)こそは己を人ともこそ己をも人にも

(三)聞きつるはははは

(四)侍ると侍るを

〔語釋〕
〔六〕女にはまたも歎、妻は再び得べし親は再び得べからずの意なるべし

〔七〕犬宮

〔八〕俊隆女

〔考異〕

〔一〕衣も脱ぎあへ―衣は脱ぎもあへ

〔二〕かくも―も―ナシ

〔三〕弱くは―は―ナシ

〔四〕こそは―は―ナシ

〔五〕集まり―集まりて

〔九〕昔―昔は

とて奉り給ふ。

大將殿、衣も脱ぎあへ給はず、直衣などのうへに、水を浴みつゝ、まどひ給へば、

人々脱ぎかへさせつ。庭に出でて、大願を立てて申し給ふ、仲忠「この人を免れ給

ふまじくば、おのれを殺し給へ。片時おくらし給ふな」と伏しまるび泣く。簀子

に、上達部、御子たちおはす。ありとある人は、立ち並みてぬかづく。朱雀院の

御使は降る雨の脚のごと、参りては立ち並みてあり。萬のところくの御使あり。

左右のおとど、下りておはして、「などが、かくも見え給はぬものを、心弱くは見え

給ふ。よろづの事、心をしづめてこそは」とて集まりのほりて、父おとど、兼雅を

にもまたも逢ひぬるものにこそあれ。親こそ、逢はざんなれ。よしや、兼雅を

ば然も思ふらむ。かたのやうなる女子もあり、女親をば如何にせよと思ふぞ。昔

忘れにたるか」と宣へば、仲忠「女親にはた、あるに随ひて仕うまつり侍りにき。殿にまだえ仕うまつらぬ。仲忠が代には犬を顧みさせ給へ。女子なれど、たゞには

〔語釋〕
〔二〕宮あこ君誕生の時

〔三〕妻の

〔五〕私があて宮を許さぬとて君に怒られたり

〔六〕産婦の

〔考異〕

〔一〕ちくれじと―ちくれじとすと

〔四〕うち―ナシ

あらじと見給へるものなり。いとよく仕うまつりなむ。此の君徒らになり給はば、やがて淵河にも落ちいりて死に侍りなむ。更におくれじ」と聲も惜まず泣けば、かんのおとど、俊隆女「目もこそ二つあれ。一所を、親君とたのみ奉るわが子にて、などか斯くは宣ふ。我が子の御代に、我こそ死なめ」と臥しまるび給ふ。左のおとど、正頼「男は、必ずかよる目をぞ見る。左衛門佐の折になむ、かよる目見侍りし。人のかなしう覺え侍りしよりも、嵯峨院の思召しけむことを思ひ侍りしなむ、いと辛かりし。これも、院のかく思しさわぐらむを聞き給ふらむ所、苦しうおほえ侍らむ」大將、仲忠「それまでも覺え侍らす。かの御身のいみじきをのみなむ。御方々物し給ふとて、あたりへだに寄せられねば、御面をだに見奉らぬこと」と宣ふ。左のおとど、うち笑ひ給ひて、正頼「かよりける御中を、はじめは心ゆかず思ほして、勘當せられしはや」と宣へば、人々わらふ。正頼「物な思しそ。正頼生け奉らむ。人の勞れにたるならむ。かやうの事は、人勞れぬれば、斯うも

(語釋)
(一)正頼は湯兼雅は食物

(三)仲忠を

(四)仲忠

(六)仲忠が女一を

(考異)
(一)誰がのもく〜たがのをも〜たがをもたがをも

(五)隔てたり〜たてたり

あり。おのれ、二十餘人の子どもの親なり。こよらの御子たちは、誰がのもく、居立ちてなむ生ませ奉りし。まづ、湯まるれ」とて、おとどは湯、父おとどは物とりて、すかせ給へどえすかせ給はず。辛うじてこしらへて、参りて、正頼「いざさせ給へ」とて牽て入りて、正頼「人々しばし入り給へ。この主えみ奉らず、と侘びまどひ給ふ。入れ奉らむ」女御の君、仁賢「何か。くちをしうなり給ひにたるものを、今更に」と宣へど、人は出で給ひぬ。二の宮は添ひておはするに、ちひさき几帳隔てたり。女御の君、仁賢「おのれは、物の恥も知らず、さきにいとよう見給ひてしものを」と宣へば、入りて見給ふに、いと御腹たかくて、息づき臥し給へり。大將、仲忠「わが君は、如何に侍れとてか、かくは臥し給へる」とてかき起して、湯まるり給ふを、えまらねば、仲忠「ともかくもなり給ふとも、仲忠が志と、御湯聞しめせ」と泣く〜聞え給へば、一啜まるる。お物一口くよめ奉り給へば、すき給ひつ。よろこびて、脇息に尻かけて、かき抱きあげ給へば、心

(語釋)

(一)赤兒の泣聲の形容

(三)仲忠をいふ

(四)生兒は男か女か

(五)男兒を祝ひて翁といふなるべし

(考異)

(一)〜と泣く〜うまれ給ひぬいかにかくなど

知らひたる人抱きつきて侍る。おとど、弓走り引きて、うち聲づくり給ふ。大徳たち、近うさふらへど、加持高うもせさせ給はず。仲忠「弱き人は、それにまどひ給ふものぞ」とて密に讀ませ給ふ。眞言院の律師一人、いち早く讀む。いと尊し。おとど、正頼「かよる折には、人多くなさふらひそ。騒がし」とて、御湯度々まりて、弦打しつと、聲づくり居給へるに、寅の時ばかりに、いか〜と泣く。おどろきて、女御探り給へば、後のもの平かなり。臥せ奉りて、大將やがて添ひ臥し給ひぬ。ないしのすけ、「仕うまつるやうあり。あやし」と聞ゆれば、仲忠「なほさて仕うまつり給へ」とて起き給はず。笑ひて、物など著せかへ奉りて、「いとあやし。なほ起きさせ給へ」と集まりて聞ゆれば左のおとど、正頼「よかんめり。なほ休ませ奉れ。いみじく迷ひ給へる人なめり。まづ湯まるれ。そも〜何ぞ」と問ひ給へばすけ、「おきな」といと心よけに、ないしのすけ申す。仲忠「あなむくつけ。はや追ひ遣れ。いと恐ろしきものなり」と宣へばかんのおとど、俊隆女「さら

(語釋)
(三)氣をもみ給へる

(考異)
(一)目見—目を見—目を見せ
(二)給へど—給へども
(四)給ひつれど—給へれど
(五)他事なく—ことなく

ば、賜はりて率てまかりなむ」と宣ふ。宮、女「何か。しばし。今見む」と宣ふ。大將、仲思「いみじき目見給へるものを、なにか見給ふべき」と聞え給へど、女「何か憎かるべき」とてゆるし給はず。おほん臍緒切りて、湯殿まるる。講師文よむ。左のおとど、お物湯につけて、まづ大將の主にまるらす。正頼「いみじういられ給へる、理や。よくもあらで數多侍るが、一人かけにたるだに、いかと思ふ。御後見しに参りつるぞ」とて参り給ふ。かく、いみじう悩み給ひつれど、産み給ひては、ことなる事もなし。たゞ他事なく、御身すくみてぞおはする。朱雀院に御使参りて、くはしく奏す。限なく悦び給ひて、よろづの物多く奉り給ふ。左のおとど、正頼「いたく煩ひ給ひつ」とて、例の御手づから君たちひき率給ひつよ、物調じて奉り給ふ。例の御産養、所々より有り。御産屋、いと面白ういかめしけれど、大將入り臥し給へれば、興ある事もなし。女御殿もえ入り給はず。かんのおとどのみ、夜晝

仕うまつり給ふ。御たち、「犬宮の御時おもしろかりしを、此度は醒めたりや」といふ。

(語釋)
(一)女—官に
(二)女—宮が
(四)「もきな」は此赤兒を
(五)校陰女が

かくて七日過ぎぬれば、かんのおとど、宮に聞え給ふ。校陰「すこしさわだち給はば、院に参り給ふべかなり。御方、とく参り給ひなむ。此度のはなをくしかる。おきなるてまかりて、徒然とさうくしくして侍るに、もてかしづきぐさにもし奉らむ。ゆかしく思さむ時は、ゐて奉りて御覽せさせむ」ときこえ給へば大將も、仲思「いとよき事なり。憎くとも、つねに参りて見侍りなむ。御覽せむと思さむ程には、迎へて見せ奉らむ」と宣へば宮、女「いさや、かく恐ろしきことなれば、またあるべくもあらぬを、吾兒をこそは」仲思「犬がもてあそびにもとてぞや」女「然らば何かは」と聞え給へば、乳母湯まるる。ないしのすけひき率てまかで給ひぬ。

かくて、大宮もおとどもわたり給ひて、萬の物調じて奉り給ふ。大將、仲思「い

(考異)
(三)此度のはなをくしかる—こたみのいなをしかな

〔語釋〕
(一)嵯峨院へ参りて参りがひある程の器量なりや否や

(六)此儘ても

〔考異〕
(一)給ひつれば―給へれば

(三)給ひ―ナシ

(四)むかひ居―居―ナシ

(五)給へれど―給ひつれど

(七)人に―に―ナシ

(八)忘れ聞えむ―忘れむ

みじう煩ひ給ひつれば、御髪や落ちむと思ふこそいとゆよしけれ」宮、女「さるは、少し人心地もせば院に参らむと思ふものを、かくて歇みぬるにやあらむ。と思ひしかば、いと戀しく覺え給ひしものを」仲忠「それも、見所ありて、人の様に物し給ひしかば、それを思してゆかしがり聞え給ふにこそあらめ。今は效なからむや、見え奉り給ひぬべしや、見奉らむ。起き給へ」と聞え給へば、女「さらば見よ」とておき給へり。大將うち笑ひて試みに、仲忠「むかひ居給へるこそつれなけれ」とて御髪をかき撫でて見給へば、落ちけもなくめでたし。かくてすこし瘦せ青み給へれど、いと清らなり。仲忠「かくながらも、憎けには見奉り給はねども、今すこし人となりてこそは。しばし念じ給へ。衣更の程にをまるらせ奉らむ。吾が君、かくて見奉るこそ、徒ら人に見奉りたる心地もすれ。死にて臥し給へりし様よ。いづれの世に、左の大殿の御心を忘れ聞えむ」宮、女「物も覺えざりしに、律師の加持せしこそ、とほく聞えて、助かる心地せしか。いかでこの悦言はむ」

〔語釋〕
(一)祓澄に女二宮を

(四)越後乳母が

〔考異〕
(一)乳母は―は―ナシ

(三)ける―けるが

(五)さいなみて―おひ出

(六)呼び―ナシ

大將、仲忠「今よく物し侍らむ。いとみじき人なり」など宣ふ程に、左近の乳母といふ、騒がしけなる氣色にて、出で来て申すやう、左近いと恐ろしき事をこそ聞き侍りつれ。二の宮の越後の乳母は、宰相中將に盜ませ奉らむとばかりて、多くの物賜はりにける。大なる瑠璃の壺に、黄金一壺入れて、沈の衣箱に、きぬ綾入れてこそ賜はりにけれ。かよる事知りたる下衆を、はかなき事にてうちさいなみてければ、腹立ちて、言ひのよしりければ、皆人聞き侍りつ。前々もおほくの物得てけり」と聞ゆ。宮、女「然ればこそ。それを思ひて、一夜も呼び入れ奉りしぞかし。あなかまや。聞きにくし」大將、仲忠「何事ぞや」と宣へば宮、女「あらず」と宣ふ。大將、仲忠「いとよく知りて侍る事ぞや。五の宮も、狩衣すがたにて、細殿に立ち給へりけり。さるさわぎに、少將入りなましかば、如何ならまし。心すとも、さるべき心か」と宣ふ。乳母、左近、左近等こそ然るいみじき物も賜はらず、恐ろしきはかりごととも仕うまつらで歇みぬれ」大將、仲忠「やぶれ子持に

嵯峨院の花の宴。今上朱雀院以下参會。詩歌。仲忠講師をつとむ。嵯峨大后今上の女四宮に厚からざるを怨む。

(語釋)
(三)實忠

(考異)
(一)給へれば、給ひつれば
(二)思して―思召し

おはすとも、今もさやうにたばかりよかし。否とも言はじや御伯父どもに」など宣ふ。

畫詞 ころは御産屋のところ。

かくて、年いとおそき年にて、三月かみの十日ばかり、花盛なり。嵯峨院、花の宴きこしめさむとて、造りしつらはせ給ふ。よろづの財物をつくして、御前の物どもまうけ給ふ。多くのまうけ物せさせ給へば、源中納言は院の家司なれば多くのかづけ物調じ給ひて、奉り給ふ。

かくて、十日なむ、その日なりける。かねて、朱雀院に嵯峨「花御覽じにわたらせ給へ」と聞え給へれば、参り給ふを、内裏の帝、聞召して、朱雀院に参らむと思ふを、同じくばその日嵯峨院に参らむ」と思して、御供にとて、度々中納言を召すに、参り給はむともなければ、明日になりて、藏人御使にて、今上嵯峨院に参るべきを、院の御供に、民部卿これかれ仕うまつるべければ、御供に人さふらふ

(語釋)
(二)實忠に勤むる也
(三)御供に参りたりともあて宮が我に對して薄情なりとは思はるまじ
(七)仲忠
(八)かくて―衍文歟
(考異)
(一)里にはた久しう―里には久しう―里にはさいしやう
(四)とぞ―とや
(五)思ひしもし侍らねど―思ふにあらねど
(六)帝には―帝ぞ
(九)などかとは宣へば―などせめ給へば
(一〇)見棄てて参りて―見棄て参りては―見す見す奉りて

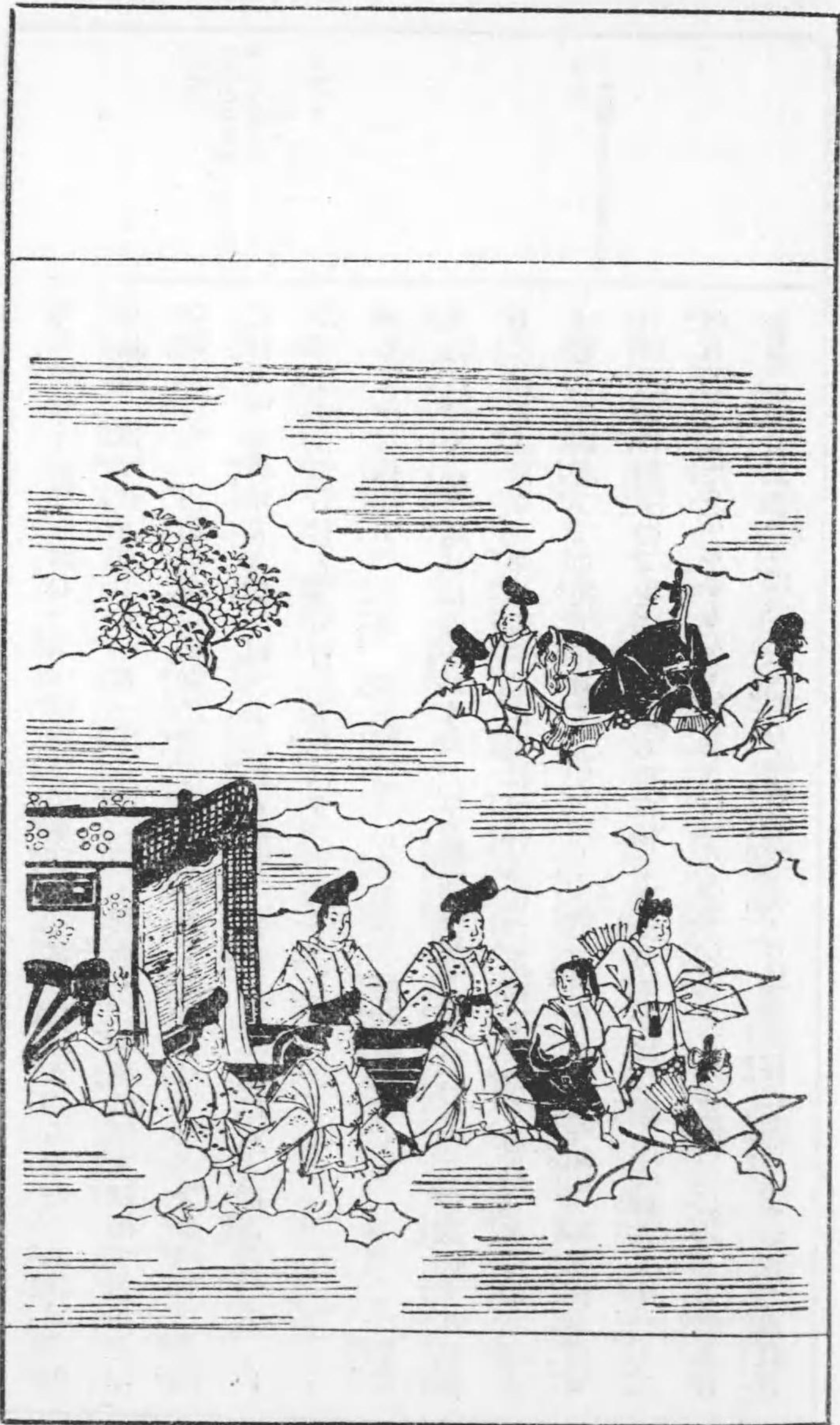
まじきを、里にはた久しう物せらるなるを、仕うまつられなむ。世にあらむ人の明日見ざらむや。ひがみて」など仰せられたり。民部卿、實正「かく度々仰せらるるを、なほ参り給へ。かの女御、世に、志なくてあるき給ふとも聞き給はじ。申し給ふ事を聞き給ふとぞ思さむ」中納言、實忠「何か、それをば思ひしもし侍らねど、久しく交らひもし侍らぬに、そこばくの帝の御前には、いかでかさふらはむ。そが中に、嵯峨院は、いかに目癖つい給へる帝には」民部卿、實正「東人は、宮のうちには、來ぬものか。然思ひてこそ参るべかなれ」とて、さふらふべき由奏せさせ給ふ。民部卿よろこびて、我仕うまつらむとて調ぜられたる直衣の御衣どもを奉り給ひて、我はあるにしたがひて仕うまつり給はむとす。大將も、暇文出だして参り給はぬを、行幸あるべしとて召せば、え参るまじき由を奏せさせ給へば、かくて宮、女「猶参られよかし。などかとは」と宣へば、仲忠「かくておはするを見棄てて参りて、しづ心もなからむに、文作り、遊せよと責められ

〔語釋〕
 (一)「もしぢうやくにやさしあて給はむ歎ぢうやくは「重役」なるべし
 (二)嵯峨院の御勸にて
 (三)さて責められて琴をひきしが故にこそ斯く君と夫婦にもなりたれ
 (四)朱雀院に「の」に「衍」文なるべし
 (五)追て省試といふ試験を経て進士になるべき者
 (六)「ちかすみ」は傍註の撰入歟
 (七)誤あらんか

〔考異〕
 (五)舞人—才人
 (八)給ふ—給へと
 (二〇)有りしもせじ—有りもせぬ

ば、心空にて、過をしてや騒がれむ。そのうちに、嵯峨院の見付け給はど、もしぢうやくにさしあて給ふ。御前にて騒がしき目を見せ給ひしも、かの御そどのかしにて、上は責め給ひしぞかし。別いても、然てぞかくてもさふらふぞかし」など宣ひつ。その日になりて、事缺けぬべし。右のおとどは院の御供に仕うまつり給ふべければ、大將さふらひ給はではあるまじ」と騒げば、むつかりて参り給ひぬ。

辰の、一點ばかりに、朱雀院に、上達部、御子たちひき率て参り給ひぬ。辰の二點ばかりに、内裏の帝行幸し給へり。此院、喜びかしこまり給ふ。花の蔭に舞人ども、樂所の者ども、皆さふらふ。文人は、博士よりはじめて、進士より出でたる人三十人、擬生も召したり。しばし有りて右大將、源中納言、新中納言、宰相の中將、右大辨、良中將、藏人の少將、ちかすみなどは文の人に召さる。嵯峨院題給はせて探韻せさせ給ふ。仰せらるゝ。嵯峨「このえうにも有りしもせじ。公卿た



〔語釋〕
〔一〕誤あるべしはうこ一本「かう」又「け」

〔三〕末考

〔考異〕
〔二〕心勞し―心をちうし

ちに役仕うまつらせむ。右大辨季英の朝臣に、はう仕うまつらせむ。右大將の朝臣には、講師仕うまつらせむ。朱雀院、「いと興あり。朝臣は、文講師する事をなむ申し侍り」内裏の帝、「御前の講で、いとなく仕うまつりき。よき今日の講師に侍り」と皆ゆるし給へば大將、然ればよ、何事にあて給はむとは思ひつる、いかで仕うまつらむとすらむ、と思ほす。
かくてみな探韻す。大將、文を賜はりに参るを、嵯峨院御覽じて、嵯峨「この朝臣見る時こそ、齡延ばはる心地すれ。いと警策になり勝りにけり、この國の人には餘りにたる人かな」朱雀院、「この頃は憔悴したるにこそ侍るめれ。先つ頃、ほとほとしき病者をなむ侍りて、かしく心勞し侍るなり」嵯峨院、「然聞き侍りき。三の内親王のもとに、とぶらひに物して侍りしかば、頼もしけなくものして侍りしを、ことなる事もなく物せられけるを喜び侍り」朱雀院、「いみじう侍りけるを、辛うじてちうはいして侍り」嵯峨院、「今日此の朝臣に、何でふわざし出ださ

〔考異〕
〔二〕文題ども賜ふに高くも―文題どものたまふにかたくも

せて、おもき祿賜はせむ」院うち笑はせ給ひて、朱雀「今は、賜はすべき祿もなし」とて笑はせ給へど、いさよかつよみたる氣色もなく、いと目安くて入りぬ。つぎに源中納言目安くて入りぬ。新中納言出で來たるを、帝たち、「山籠は、いかで出で來たるにかあらむ。今日めづらしき事は、先づこれなりけり」と驚き給ふ。内裏の帝、「辛うじて召し出でたるなり」と宣へば朱雀院、「あたり、さてもありぬべき公人の、怪しうてもありつるかな。此の朝臣の、常に嘆きしものを」など宣ふ。
午の二點ばかりに、擬生の男どもに、文題ども賜ふに、高くもあらず、五位、六位なり。あらはなる所にさふらひて、近衛つかさの官人ども、左右にさふらひ、そなたに居たる、近く参りて、仕うまつらせ給ふ。探韻賜はる人の目やすきをば譽め給ふ。見苦しきをばわらはせ給へば、憶しつと、天下の失禮を仕うまつりあり。上たちも、御文あそばす。御子たち、上達部、御心にまかせて作り給ふもあ

(考異)
(一)御子たち―御子たち

(二)笛―ふみ

(三)ゆるちかに吹く―ゆ
たかに吹く―ゆるちうよく

り。朱雀院の御子たち、后腹の二の御子は、御病して、法師になり給ひて、西山
におはす。大殿腹の四人、后腹の五人さふらひ給ふ。七の御子、中の君のあね、
女御の御腹、それ参り給はず。九の御子は、更衣腹、わらはにて参り給はず。嵯
峨院の御子は、三人ながら、内裏の御ともに仕うまつり給へり。御前ごとに皆ま
るれり。文人樂所の者どもなどに物賜ふ。上たち御琴あそばし、上達部御子たち、
笛仕うまつり給ふ。樂所には、樂仕うまつりあはせて、いと面白し。
申の一點ばかりに、擬生の文題とらせ給はむとすれば、あるは清く書きたるもあ
り、あるは半書きたるもあり。とかくし惑ひて、手をひろけて奉り参るに、途
に倒るよもあり。かく惑ふを今日の物見にはしたり。花さそふ風のるらかに吹く
夕暮に、花雪のごとく降れるに、大將文奉るに、胡篋負ひてかうぶりに花雪のご
とく散りて、仲頼「右の近き衛の府のかみ、藤原の仲忠」と申し給ふ聲、いと高う
いかめし。嵯峨院、「よき講師の試の聲なりや」とて笑はせ給へど、つれなくて

(語釋)
(一)誤あるべし

(三)女一宮の御産の時の
事をいふ

(考異)
(二)つらむ―つらむ

(四)花を―花に

(五)雪と見るかな―雪ぞ
ふりける

(六)帝―御歌

(七)けむ―ける

入りぬ。文みな奉り侍れば、文題とらせ給ひて讀ませ給ふ。大將まるらせ給ひ
て讀み申し給へば、帝たちよりはじめて、皆聞き給ふ。いさよか怖ぢつよむ所な
し。朱雀院、かよるものに心強き、物に怖なき人、いかで前後知らず惑ひけむ、
なほ吾が御子をおろかには思はざりけり、と思す。やんごとなき文どもをば誦せ
させ給ふ。大將の文を、みな帝たち誦じ給ふ。土器まるる。新中納言いみじう褒
めらる。右大辨土器まるる。
かくて、御遊はじまりて、朱雀院、「老せる春を弄ぶ」と歌の題にかよせ給ひて
嵯峨院に奉り給へば、御土器とりて内裏の帝に奉り給ふとて、
嵯峨春くればかみさへ白くなる花をことしは君も雪と見るかな
内裏の帝
今上積りけむ花をもなどか見ざりけむ春とはわれも言はれつる世に
朱雀院

(語釋)
(三)朱雀院第四の皇子

しろくとも千代しつもらば花を見にいづれの春かつれて來ざらむ
式部卿の宮

つもり行く花もなけきに木隠れて空にしられぬ下枝なりけり
など申し給へば五の宮、「すどろに仕うまつりそしたるや」とて御土器まるり給ふ。
土器くだりて、中務の宮。

かくばかり枝は盛に匂ひつよいつかは春のふかく積りし
兵部卿親王。

いにしへは春の色をや君はみなこひてををしむ花はちらめや
彈正宮。

ちる花ぞかしらの雪と見えわたる花こそいたく老いにけらしな
師の親王。
うちむれて花をしをりてかざさずば何にか春の老も知らまし

(考異)
(一)オトろにナクわ
(二)春の一雪の

五の宮

風をいたみ我らにふれる花をさへかしらの雪と見るな宮人

常陸の太守の親王。

さくら花咲かざらませば野へに出でて春の齡を何に知らまし

大政大臣

忠雅櫻花いつかあくべき野邊に出でてこころづくに君がをしむに

左の大殿

正頼もとゆひに花結べりと見ゆるまで見れどもかよる春の花かな

右の大殿

兼雅散りぬとて手ごとに折れば櫻花髪さへ白くなりまさるかな

右大將

仲忠さくら花幾世をふれば木隠れてみる人ごとに老を見すらむ

(語釋)
(一)「我ら」は「我がみ」歟
(二)朱雀院第六の皇子歟

民部卿

實正老もみな花をり遊ぶ此のくれは春さくらやとしもにわくらむ

藤大納言

忠俊立ちよれば老をのみます櫻花折りつよかさず君は幾世ぞ

權中納言

忠澄ちる花に頭のおほく白くるは世々をへだつるやどにさけ春

源中納言

涼花の色はさかりに見えて年ごとに春のいくたび老としつらむ

左衛門の督

清雅老いぬとて春をばをしむ頃しもぞよろづの花は盛なりける

新中納言

實思君むれて花みるけふと思はずばやまの朽木も春を知らめや

〔語釋〕

(一) 誤あるべし

(二) 「さけ春」は「さけばか」の誤なるべし、「一本」さけやと

(三) 「右衛門督」なるべし

民部卿

實正老もみな花をり遊ぶ此のくれは春さくらやとしもにわくらむ

藤大納言

忠俊立ちよれば老をのみます櫻花折りつよかさず君は幾世ぞ

權中納言

忠澄ちる花に頭のおほく白くるは世々をへだつるやどにさけ春

源中納言

涼花の色はさかりに見えて年ごとに春のいくたび老としつらむ

左衛門の督

清雅老いぬとて春をばをしむ頃しもぞよろづの花は盛なりける

新中納言

實思君むれて花みるけふと思はずばやまの朽木も春を知らめや

〔語釋〕

(一) 仲頼をいふ歟

(二) 仲澄をいふ歟

(四) 「など」としてなるべし

(七) 忠こそをいふ

とあるを、朱雀院いといたく誦ぜさせ給ひて、土器參らせ給ひて宣ふ。

朱雀わが前に木高くなりしもと櫻山べにえだぞ朽つと嘆きし

内裏の帝

今上朽ちぬとてなけきし枝は春を知るありし櫻の見えぬ今日かな

嵯峨院

もろともにおひし櫻のまつ枯れてのこれる枝を見るがかなしき

なむとて御土器度々になりぬ。御時よき程にて、御遊さかりて、大將源中納言な

どに、箏の琴賜ひて、みな人も物の音仕うまつりあはせて、順の舞し、歌うたひ猿

樂せぬはなし。上たち、いみじう興あはせ給ひて朱雀院、「今日はいと興ある

日なりや。いぬる年の秋仲頼が居つる所にて、此の族まかりて、人も聞かぬ所に

て、己がどち、隠したる手どもあらはして、警束に侍りけるこそいとになく侍り

けれ」嵯峨院、「然聞くや。忠まろ法師に陀羅尼讀ませて、かの朝臣の琴ひきける

- (一) 嵯峨太后
- (二) 正頼の妻大宮
- (三) 嵯峨院第四皇女、今上の御姿
- (四) 后の位
- (五) 承香殿を

- (一) 考異
- (二) 久しうも「も」ナシ
- (三) 屢も「も」ナシ
- (四) 思ひ「思」
- (五) 承香殿に侍る人「あ」
- (六) 思ひ「思」
- (七) 思ひ「思」
- (八) 思ひ「思」
- (九) 思ひ「思」

曉たど人などのみな集ひにけるをや」と宣ふ。

内裏の帝立ち給ひて、(一) 后の宮に對面し給へり。后の宮、「あなかしこや。久しうもなりにけるかな。三條に侍る御子の、若菜摘にまうで來たりしまよにや侍らむ」(二) 帝、今上、屢もまうで來べきを、まかりありきも心にまかせ侍らざりければなむ」(三) 宮、后宮、今は、かく今日明日になりにて侍れに、聞えさせ置くべき事も、聞えさせ置きて、其路も安くと思ひ給へるを、いとく嬉しく、わたりおはしましたる事をなむ。(四) 此承香殿に侍る人は、思ほえ老の後に出来て侍りしかば、中になしなく思ひ給へて、顧みさせ給へ」とて參らせし効なく、人数にも思ほされざれば、恥かしう思ひ給へるを、此の位譲り侍りなとなむ思ひ給へる。「便なき事」と、これかれ聞ゆとも、昔思ふ給へし志叶ふるとおほして、必ずをせさせ給へ」帝、久しく思ほし煩ひて、今上、まだ物の心も知らず侍りし時、見なれ奉りにしかば、睦まじく頼もしきものには、彼處をなむ。あやしう人にも似給はず、疎

- (一) 考へさせ侍らむに「なるべし」
- (二) 考へさせ侍らむに「なるべし」
- (三) 考へさせ侍らむに「なるべし」
- (四) 考へさせ侍らむに「なるべし」
- (五) 考へさせ侍らむに「なるべし」
- (六) 考へさせ侍らむに「なるべし」
- (七) 考へさせ侍らむに「なるべし」
- (八) 考へさせ侍らむに「なるべし」
- (九) 考へさせ侍らむに「なるべし」
- (一〇) 考へさせ侍らむに「なるべし」
- (一一) 考へさせ侍らむに「なるべし」
- (一二) 考へさせ侍らむに「なるべし」
- (一三) 考へさせ侍らむに「なるべし」
- (一四) 考へさせ侍らむに「なるべし」
- (一五) 考へさせ侍らむに「なるべし」
- (一六) 考へさせ侍らむに「なるべし」
- (一七) 考へさせ侍らむに「なるべし」
- (一八) 考へさせ侍らむに「なるべし」
- (一九) 考へさせ侍らむに「なるべし」
- (二〇) 考へさせ侍らむに「なるべし」
- (二一) 考へさせ侍らむに「なるべし」
- (二二) 考へさせ侍らむに「なるべし」
- (二三) 考へさせ侍らむに「なるべし」
- (二四) 考へさせ侍らむに「なるべし」
- (二五) 考へさせ侍らむに「なるべし」
- (二六) 考へさせ侍らむに「なるべし」
- (二七) 考へさせ侍らむに「なるべし」
- (二八) 考へさせ侍らむに「なるべし」
- (二九) 考へさせ侍らむに「なるべし」
- (三〇) 考へさせ侍らむに「なるべし」
- (三一) 考へさせ侍らむに「なるべし」
- (三二) 考へさせ侍らむに「なるべし」
- (三三) 考へさせ侍らむに「なるべし」
- (三四) 考へさせ侍らむに「なるべし」
- (三五) 考へさせ侍らむに「なるべし」
- (三六) 考へさせ侍らむに「なるべし」
- (三七) 考へさせ侍らむに「なるべし」
- (三八) 考へさせ侍らむに「なるべし」
- (三九) 考へさせ侍らむに「なるべし」
- (四〇) 考へさせ侍らむに「なるべし」
- (四一) 考へさせ侍らむに「なるべし」
- (四二) 考へさせ侍らむに「なるべし」
- (四三) 考へさせ侍らむに「なるべし」
- (四四) 考へさせ侍らむに「なるべし」
- (四五) 考へさせ侍らむに「なるべし」
- (四六) 考へさせ侍らむに「なるべし」
- (四七) 考へさせ侍らむに「なるべし」
- (四八) 考へさせ侍らむに「なるべし」
- (四九) 考へさせ侍らむに「なるべし」
- (五〇) 考へさせ侍らむに「なるべし」
- (五一) 考へさせ侍らむに「なるべし」
- (五二) 考へさせ侍らむに「なるべし」
- (五三) 考へさせ侍らむに「なるべし」
- (五四) 考へさせ侍らむに「なるべし」
- (五五) 考へさせ侍らむに「なるべし」
- (五六) 考へさせ侍らむに「なるべし」
- (五七) 考へさせ侍らむに「なるべし」
- (五八) 考へさせ侍らむに「なるべし」
- (五九) 考へさせ侍らむに「なるべし」
- (六〇) 考へさせ侍らむに「なるべし」
- (六一) 考へさせ侍らむに「なるべし」
- (六二) 考へさせ侍らむに「なるべし」
- (六三) 考へさせ侍らむに「なるべし」
- (六四) 考へさせ侍らむに「なるべし」
- (六五) 考へさせ侍らむに「なるべし」
- (六六) 考へさせ侍らむに「なるべし」
- (六七) 考へさせ侍らむに「なるべし」
- (六八) 考へさせ侍らむに「なるべし」
- (六九) 考へさせ侍らむに「なるべし」
- (七〇) 考へさせ侍らむに「なるべし」
- (七一) 考へさせ侍らむに「なるべし」
- (七二) 考へさせ侍らむに「なるべし」
- (七三) 考へさせ侍らむに「なるべし」
- (七四) 考へさせ侍らむに「なるべし」
- (七五) 考へさせ侍らむに「なるべし」
- (七六) 考へさせ侍らむに「なるべし」
- (七七) 考へさせ侍らむに「なるべし」
- (七八) 考へさせ侍らむに「なるべし」
- (七九) 考へさせ侍らむに「なるべし」
- (八〇) 考へさせ侍らむに「なるべし」
- (八一) 考へさせ侍らむに「なるべし」
- (八二) 考へさせ侍らむに「なるべし」
- (八三) 考へさせ侍らむに「なるべし」
- (八四) 考へさせ侍らむに「なるべし」
- (八五) 考へさせ侍らむに「なるべし」
- (八六) 考へさせ侍らむに「なるべし」
- (八七) 考へさせ侍らむに「なるべし」
- (八八) 考へさせ侍らむに「なるべし」
- (八九) 考へさせ侍らむに「なるべし」
- (九〇) 考へさせ侍らむに「なるべし」
- (九一) 考へさせ侍らむに「なるべし」
- (九二) 考へさせ侍らむに「なるべし」
- (九三) 考へさせ侍らむに「なるべし」
- (九四) 考へさせ侍らむに「なるべし」
- (九五) 考へさせ侍らむに「なるべし」
- (九六) 考へさせ侍らむに「なるべし」
- (九七) 考へさせ侍らむに「なるべし」
- (九八) 考へさせ侍らむに「なるべし」
- (九九) 考へさせ侍らむに「なるべし」
- (一〇〇) 考へさせ侍らむに「なるべし」

疎しくものし給ひしかば、思ほし直すまでとなむ、しばし物聞えざりし。宣はする事は、かやうの事は例とはせでなむ物するを、考へさせ給ふらむに、然る例あらば、何かは。然らずば、封賜はらなどをこそは、御位久しく物すべく侍るなれ」宮、后宮、封賜はらなどせずとも、この位とこそ言はせまほしく侍れ。其處には、坊の母をとこそは思すらめ。此の人をば哀と思さましかば、かよる事も侍りけるを、しばし待たせもこそはし給はましか。然もや聞ゆるとて、急ぎし給へるこそは「帝、今上、かよる事の疾くものし給はましかば、何の疑にかは。年頃さもあらで、彼が来てまうで來たりしかば何心もなく、然あらむをりは然せむ」と宣ひてしかば、「空言せず」といふ族にまかりなりにたれば違へじこととなむ。彼も思ほし棄つべきにもあらぬを」と聞え給へば宮、后宮、すべて幸なき者は」とて御氣色よからねば、立ち給ひて、四の宮の御方に參り給ひて、今上、いと痛く醉ひにけり」とて裝束解きひろけて臥し給ひて、今上、いとよく案内申し給ひてさいなま

給はざりし
 (一)皇子をなせ早く生み
 (二)女四腹の皇子を
 (四)産の時あて宮は里に
 下りたれば小き時は見ざ
 りしと也

(考異)
 (三)あるものか—あるに
 や

せ給ふなめり。萬の事かたみにならひて、哀に睦ましくこそ。あさましう打ち泣
 き給ひしかば恐ろしさにこそ聞えざりしか。などかは、かよるわざをも、疾くは
 し給はざりし」など聞え給へば、女四「あなむつかしや。何でふ然るものをか」上、
 今上「かよる程のをまだ見ねばぞや。かよる序に、此處のを見で、いつか。なほ見
 せ給へ」と宣へば、乳母召して、見せ奉り給ふ。まだ五十日にも足り給はず、いと
 つぶらかに、白く肥え給へり。上、抱き給ひて、今上「あなちひさや。人のはじめは
 斯くあるものか、我らも然ぞありけむかし。かよるものを大になすこそ、女は恐ろ
 しけれ。宮は、いと大になりけり。はじめはいとあさましや」女四「月ごろ御覽じ
 ならひたらむを」今上「それはまかでにき。大になりたり。それをぞ小きと見しか」
 とて、今上「これをも對面とや言はむ」とてあこめの御衣ぬぎて乳母に賜ふ。
 かくて上達部殿上人座に著きさふらひて、御輿寄せてぞ「久しくなりぬ」と奏せ
 させ給ふ。上、今上「あな物憂や。こよに泊りなばや」と宣ふに「亥四刻」と申すに、

(語釋)
 (三)女四宮

(考異)
 (二)よく—ナシ
 (二)ばかり—ナシ
 (四)擬生衆まで—清らに
 て

時なりぬとて騒ぐに、今上しづ心なく言へば。然ば疾くまゐり給へ」とよく聞え
 こしらへ給ひて出で給ふに、后宮より、源中納言の奉り給へりし女の装二十
 くだりばかり、櫻色の細長、あはせのはかまなど、上達部殿上人に賜ふ。院の御方
 よりも、例の公様にてはあらで、御子たち、上達部に、例の女の装束一具、殿上
 人には細長はかま、下藤の文つくりなどには、腰挿棒持の綿、擬生衆まで賜ふ。大
 將には、講師の祿とて、御馬一つ、御子たちにも御馬一つ、帝たちには、世にか
 しこき御帶、御佩刀など奉り給ふ。

畫詞

こよは嵯峨院の花の宴の所

樓の上(上)

梗

概

● 兼雅、一條西の對に遺題の歌を見て宰相上の行方を尋ねんと志す、俊隆女之を仲忠に謀る。● 仲忠石作寺に参籠して宰相上とその子とに邂逅す。● 仲忠邂逅の趣を父に告げて先づ文を贈らしむ。● 仲忠宰相上を訪ふ。父に自ら宰相上を迎へんことを勸む。● 兼雅自ら行きて宰相上を三條に迎ふ。宰相上腹の小君兼雅に懐かずして仲忠を基ふ。● 兼雅梅壺を三條に迎ふ。俊隆女に對する他の妻妾たちの嫉妬。俊隆女兼雅に愛を他の女に分たんことを勸む。● 仲忠小君を携へて参内す。東宮小君を携へてあて宮の許に至る。● 俊隆女、太宰大貳の贈物を人々に分つ。● 仲忠、犬宮に琴を教ふべき心構を女一宮に語る。母を訪ひて同じ事を語る。兼雅來合せて夫婦古を追懐す。● 犬宮の美しくしき。仲忠の秘藏。● 仲忠京極の舊邸に犬宮に琴を教ふべき樓を造る。人々の噂。● 新築の樓の結構。● 仲忠、朱雀院及び嵯峨院に参る。嵯峨院、俊隆女の琴を聞きに京極の邸に御幸あるべき事を約す。● 仲忠樓上にて琴を教ふべき由を犬宮に告ぐ。● 涼、仲忠を訪ふ。● 樓の噂。● 涼、犬宮を際見す。歸りて妻今宮に犬宮の美しさを語る。● 仲忠、犬宮の修業中は一切人に逢はずまじき由を女一宮に告ぐ。女一宮、犬宮に名残を惜む。● 犬宮の京極に移るべき日の準備。● 犬宮京極に移る。行列。女三宮の感傷。見物人の評判。● 到着。● 饗宴。● 樓上の景色。● 朱雀院より女一宮及び俊隆女を訪はる。● 仲忠、母及び犬宮と京極に籠居す。兼雅京極を訪ふ。兼雅夫婦の懷舊。